ポケモン探検隊　スピリッツ　～光り輝く命～

橘 紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン探検隊　スピリッツ　～光り輝く命～

【Ｎコード】
Ｎ３５６６Ｗ

【作者名】
橘　紀

【あらすじ】
記憶を失い、身体がポケモンになってしまった人間の少年。一流探検家になりたいという夢を持っているが、臆病であるが故になかなか一歩を踏み出せない一人のポケモン。この二人が出会ったその時、その瞬間、すでに狂い始めていた世界の運命の歯車は、さらに大きく狂いを見せるか、それとも……？これは、時と闇を巡る、探検隊の物語。

冒頭―――プロローグ（前書き）

この小説が初めての方は、はじめまして。
もう救助隊読んだよ！という方は、またお会いしましたね。
橘　紀と申します。

救助隊と同時進行という形で連載しています。
作者としてはどっちも読んでほしいな～というのが本音なのですが、
救助隊読まないとこの小説は読みづらい、というわけではないので、
お気軽に読んでくださいませ☆

それでは、どうぞ！

冒頭———プロローグ

……ふぅ、ちょっと休憩しようかな。いつまでもこうして文字と睨めっこだと疲れるね。

……ん？キミは……誰だい？

こんな森の奥深くにまで来るなんて、物好きだねぇ。迷った？え、そうじゃない？

まぁいいや、急いでないなら、ちょっとここで休んでかない？今お茶持ってくるから。

……。

あぁ、ゴメン。不躾なほどキミの顔見ちゃって。

なんか、どこかで会ったことがあるなぁ、って思ってさぁ……

多分、気のせいだよね。キミはボクのこと知らないような顔してるから。はい、お茶。

……ん、どうしたの？地面なんか見て……

あぁ、この本は何かって？

ボク、さっきまで本を書いてたんだ。ちょっとした小説ってとこ

かな。

……ファンタジー？違う違う。まぁ、ある意味ファンタジーっぽいね。現実をはるかに超越してるから。

これは、ずっとずっと昔―――まだボクも、多分キミもまだ生まれてないずっと昔に起こった実際の出来事をベースにした物語なんだ。

……半分以上白い？ハハハ、当たり前だよ。書き始めたのがちょうど三日前だからね。これじゃ書き終えるまで何年かかるかなぁ……。

……興味あるって顔してるね？違くても、ちょっと聞いていかない？語り聞かせなら、そんなに時間もかからないし。

時と闇をめぐる、探検隊の物語を……ね。

冒頭―――プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？
何分若輩者ですから、ちょっとおかしな部分もあると思われますが……
それでも楽しんでいただければ幸いです。ご指摘はいつでも受け付けております^^
それでは、またお会いしましょう♪

２０１１．９．２４　変更
ちょっと雰囲気をがらりと変えてみました。
このプロローグに出てきた語り部、誰だか分かりますか？
分かったあなたは神にも匹敵するほどの洞察力と勘を持ち合わせてます！（何

紹介――登場人物１（前書き）

探検隊「スピリッツ」の紹介です。

紹介――――登場人物１

スバル（ポッチャマ）
性別：男
年齢：不明（記憶を失っているため）
波動の色：優しい薄荷青色（ミントブルー）
　本編の主人公。もとはニンゲンであったが、記憶を失い、ポケモンになってしまった。
　キロットと共に自信の宝物であるヘルメットを取り戻したのが縁で、彼と探検隊「チーム・スピリッツ」を結成する。
　口調がかなり乱暴で、性格は悪く言えば短気、百歩譲って良く言えばポジティブシンキング。ギルドの先輩に対して最低限の敬語が使える程度の丁寧さは持っているが、たいていは後先考えずそのままどこへでも突進していく。しかし、それなりにヒトとしての情はあり、落ち込むキロットを幾度となく慰める一面もある。
　大きな黄色いゴーグルのついた、紫色のヘルメットを頭にかぶっている。本人にとって大切な物らしいが、それに関する記憶さえも失ってしまっている。

キロット（ピカチュウ）
性別：男
年齢：十四歳
波動の色：パワフルな橙色（オレンジ）
　探検隊「チーム・スピリッツ」の副リーダー。
　自分の宝物を強奪されて途方に暮れていたところを、スバルに助けられる。宝物を奪い返した後は、行くあてのなかったスバルに一緒に「探検隊をやろう」を提案する。
　スバルとは全く正反対の、自他ともに認める臆病な性格で、傍か

ら見ても情けないと思うほど打たれ弱い。その分心優しい性格の持ち主で、しっかりしているところはしっかりしている。探検のことになると若干ヒトが変わるほど好奇心旺盛。
凄腕の探検家である父を目標としており、その父からもらった宝物［遺跡の欠片］の謎を解くことが夢。
探検隊結成当初は何も身に着けていない。

＞i322218—4059＜

紹介――――登場人物１（後書き）

いつか設定集でも作ってギルドメンバーとかも紹介したいな。
そう思いながら現在フランス語の教科書片手にパソコンと拳を交えぬ殴り合い中。

第一話　遭遇――始まりの兆候（前書き）

第一話ようやっと投稿～！
なんだかＢＷで流れる「ＨＰがやばい時のＢＧＭ」が脳内でループしとる……

第一話　遭遇――始まりの兆候

長く厳しい冬が過ぎ、桜の蕾が少しずつ膨らみ始める春。
そんな穏やかなイメージとはまるで正反対の激しい嵐が、今夕から夜明けにかけて猛威を振るっていた。町で商いを営む者は早くから店をしまい、急いで寝床に戻り雨凌ぎの準備をする。夜が更ける頃になっていよいよ嵐はその勢いを増し、時折雷鳴が聞こえるほどにもなった。地上のとある海岸では、空にも負けじと言わんばかりに海が荒れ狂う。海岸近くにある断崖絶壁に住まいを持つ一人のポケモンが、必死に眠りに就こうと麻でできた掛け布団で耳をふさぐ。
一段と大きな雷鳴が、海岸中に響き渡った。恐らくそのせいだろう。その雷鳴の中に潜む悲鳴を、耳に聞く者など誰一人いなかった。

――翌日。
昨晩中あんなに暴れまわっていた嵐は何処へと消え、海は元の穏やかさを取り戻した。時刻は昼と夕暮れの境目。徐々に赤く染まる太陽に照らされて、海がまるで一足早い星々のように瞬く。
陸地に目を向ければ、そこは見事な砂浜。海底の珊瑚が長い年月をかけて化石と化し、微細な塵となり陸に蓄積してできた白い砂浜も、太陽が赤く染まるスピードに比例してだんだんと赤みを帯びていく。
その砂浜の上に、小さなヒト影が倒れていた。

――は、離してはダメだ！

――あと少し……もう少しなんだ……！

――しっかりしろ！……！

頭の中で反響する、誰かの叫び声。誰の声なのか……思い出せない。深く考えることが……出来ない……

――――そのまま、眠るように意識を失った。

一方、町から海岸へと続く道――――

「ケッ、この弱虫め！」

「これを返してほしけりゃ電撃でも出してオイラ達を捕まえてみろってんだよ！」

「ま、待ってよぉ……うわぁ！」

足がもつれ、頭から派手にすっ転んだピカチュウを、これまた派手に笑いながらからかうドガースとズバット。ドガースの頭には、もともとピカチュウの宝物であった直径十センチほどの石の欠片のような物が乗っかっていた。一通りピカチュウを馬鹿にした後、再び二人は海岸へと足早に去っていく。

「うぅ…ま、待って……！」

汗と涙で顔がぐしゃぐしゃになりながらも、疲労で棒になった足に鞭打って、ピカチュウも海岸へ向かった。

「……ッ、ここは……？」

同じ頃、海岸で倒れていた少年も目を覚ました。寝っ転がったまま仰向けになってみると、目に入るのは夕暮れ一歩手前の薄紫色の空。それを見て寝起きの目を休ませると、少年は勢いをつけて身を

起こした。横になって倒れていたので、顔と身体の右半分が砂に塗れている。それらを払おうと持ち上げた右手を見て、少年は偶像化したように固まってしまった。

「…あれ……これ、オレの手？」

少年の目に映った自分の右手は、青いふさふさした羽毛で覆われていた。

驚いた勢いで跳ね起き、自分の身体を見回してみる。黄色くて小さなかわいい足、身体は手と同じく青い羽毛で覆われていて、背中には体よりも青いマントのようなもの、口に手を当てると、丸くて堅い嘴……

それら全てを確認すると、少年の脳内には、ある奇妙な数式が出来上がった。

黄色くて小さなかわいい足＋身体の青い羽毛＋真っ青なマント＋丸くて堅い嘴＝……

「お、オレ……ポッチャマになってるうううぅぅ！」

少年の絶叫は、海岸から街へ戻っていくピカチュウの耳にもしっかりと入っていた。先程まで彼の宝物を盗んだドガースと、何故か奇妙な紫色のヘルメットをかぶっていたズバットを追いかけていたのだが、彼らが海岸奥にある洞窟に入っていった瞬間、諦めたように立ちすくんでしまった。あの洞窟に逃げ込まれたら……ピカチュウは小さい頃の苦い経験を思い出し、宝物を諦めて家に帰ることにした。そこで、例の少年の絶叫を聞いたのだった。

「な、何？今の……」

恐る恐る振り返ると、冷や汗ダラダラ且つ瞳孔全開のポッチャマの顔が飛び込んできた。

「どわ！」

「うわひゃあ！」

正面衝突する二人。ピカチュウの方は尻餅をつく程度で済んだが、ポッチャマの方は勢いが反動になって返ってきたのか、五メートルほどゴロゴロ転がっていった。

「ひえええぇ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

別に彼が悪いわけではないのに、狂ったように土下座して謝るピカチュウ。転がるだけ転がったポッチャマは起き上がるなり、土下座中のピカチュウを見てあんぐりと口をあけた。そして一言。

「ピカチュウ……でけぇな……」

……ヒトにぶつかっておいて謝らずに何言ってんだオレ。反射的とはいえ、ポッチャマは今自分が言った言葉に対し自分でツッコミを入れた。……しかし、ピカチュウは怒るどころか、はたと土下座をやめ、不思議そうにポッチャマをつくづくと見つめて、言った。

「でかいって……キミ、ポッチャマでしょ？ボクと身長ほぼ同じじゃないか」

変わったコだねぇ。と朗らかに笑い飛ばされた。身長高い低いや変わっている云々はこの際どうでもいい。彼の台詞の中盤辺りの言葉は、ポッチャマに避けがたい現実を突きつけられたようなものだ

った。

「……やっぱり……オレ、ポケモンになっちまったのか……」

「……え？」

「実はさ、オレ……今はこの通りポッチャマだけど、もとはニンゲンだったんだよ。しかもどういうわけか、これまでの記憶が全然ねぇんだ……」

非現実的なことを長ったらしく喋ってしまった結果、ピカチュウの円らな目がさらに大きく丸くなり、案の定その目は「驚き」から「疑い」の色に変わっていった。

「ニンゲンって……何百万年も前に絶滅したっていうあのニンゲンでしょ？それが今の時代にいるわけないじゃないか」

「（この世界のニンゲンって絶滅してたんだ…）い、いやそうみたいなんだけどよ、ホントにオレは元ニンゲンなんだ」

「エイプリルフールはまだ先だよ。ボクを騙してネズミ鍋にしようったってそうはいかないからね」

「するかよ！」

まず「ネズミ鍋」が何たるかを知りたいところだが、今はそれどころではない。なんとかしてこのピカチュウを説き伏せないと、誰からも信用されないかわいそうなヒトになってしまう。あの手この手を使って説得すること数分――

「わ、わかったよ。信じてあげるからそんな顔しないで……」

涙目でピカチュウは信用してくれた。若干どんな顔になっていたのかは気になったけれど、ポッチャマはほっと胸をなでおろす。気が楽になったのか、次の瞬間、叫び声のようなものが頭の中に響い

た。

――――しっかりしろ！スバル！

「……スバル」

「ふぇ？な、何て言ったの？」

相手の顔に恐怖していたピカチュウが、慌てて聞き返す。

「オレの名前、思い出した。オレの名前は……スバル」

「そ、そうなんだ。あ……ボクの名前、キロットっていうんだ。よろしくね！」

相手が何の躊躇いもなく手を差し出してきたので、スバルもたじろぐことなく握手を交わした。自分から名乗って握手を求めるということは、（とりあえずは）本当に信用しているということだ。それを確認した上で、先程から疑問に思っていたことを口にしてみた。

「ところでお前、なんか顔とか身体とかが砂だらけだぜ？何かあったのか？」

「う……それがさ」

長い両耳をだらりと垂らしながら、キロットはこれまでの経緯――――不良の二人に自分の宝物を盗まれてしまったこと、追いかけたは追いかけたが洞窟に逃げ込まれてしまい、諦めて引き返すところだったことを話した。

「ふぅん……その洞窟って、どんな所なんだ？」

「どんな所って……とにかく昼間でも真っ暗なんだ。ボク、以前あの洞窟に迷い込んで、真っ暗な中いろんなポケモンに袋叩きにさ

れたことがあって……」

以来、あの洞窟には立ち入らないようにしているのだという。そんな目に遭ったら確かにトラウマにはなるだろう。だが、それだけで宝物を諦めるというのはどうも……

かける言葉が見つからず、スバルはカリカリと頭をかいた。そして、また何かを思い出したのか、海岸の時のようにそのままのポーズで固まってしまった。

「……ど、どうしたの？」

「あのさ、キロット……オレのヘルメット、見なかった？」

「ヘルメットって……頭にかぶる、アレ？」

「それ。紫色のヤツで、黄色いゴーグルが付いてんだけど」

「紫色の……ヘルメット……」

キロットは額に手を当て、天を仰いで記憶をたどってみた。なんだかつい最近見たような気がしてならない。最近というより、ついさっき――――約十分前。

「……かぶってた」

「誰が？」

「さっきボク、チンピラ二人に宝物盗まれたって言ったでしょ？その中の一人が、紫色のヘルメットをかぶって……」

「なんだってえええぇぇぇ！」

キロットが言葉を切る前に、スバルの小さな身体に似つかわしくない絶叫が海岸にまで響き渡った。岩場で羽を休めていたキャモメやペリッパーが、驚いて一目散に空へと飛び立っていく。

「そ、そいつ等、どこ行きやがったんだ？」

「え？だから洞窟に……」
「こうしちゃいられねぇ！追うぞ、キロット！」

スバルはキロットの腕をむんずと掴むと、一直線に海岸へ走っていった。途中でバランスを崩し、ほぼ引きずられるような状態で強制連行されるキロット。

「な、なんでボクまでええぇぇ！」

真っ暗な洞窟内に、キロットの泣き声が響き渡った。

第一話　遭遇――始まりの兆候（後書き）

第一話終了。
ちなみに作者は「ネズミ鍋」を食したこともないし見たこともありません。

第二話　奪還―――初めての戦い（前書き）

初めての戦闘描写！

さて、うまく……出来てる……か……なぁ……？（←徐々に薄れゆく自信

第二話　奪還―――初めての戦い

春の海が起こす穏やかな潮騒はいつの間にか薄れ、代わりに洞窟の奥から聞こえてくるのは、天井から染み出した水が地面にポツリと落ちる音と、正体不明の化け物を彷彿とさせる呻き声のような音だった。それだけでも十分怖いのに、目隠しされたと勘違いしてしまいそうなくらい真っ暗な場所なので、立ったままでも嫌というほど恐怖を味わえる。

それでも、スバルは平然としていたからまだいい。キロットはというと、潜入して五分後に汗びっしょりになり、そのまた五分後には涙で顔ぐっしょりになり、さらに五分後には鼻水ダッラダラになるなど、見ているこちらが恐怖するほど散々な顔になっていた。

あまりにも酷過ぎて、「大丈夫か？」という気にもなれないスバル。呆れる半面、この五分後にはどんな状態になるのか少しワクワクしてきた。

「そ、そんな期待のこもった顔で見ないでよおぉ！」

……今度は叫びかよ。

「なんでそんなにビビってんだよ？」

「だって怖いじゃん！ただでさえ真っ暗なのにこんな化け物の呻き声みたいな音が聞こえてきたら誰だって怖がるでしょ？」

洞窟から吹いてくる風の音をどうやったら化け物の呻き声に脳内変換できるんですか。敢えてその言葉を口に出さず、ガシガシと頭を掻きながらスバルは言葉を選んだ。

「大丈夫だって。さっきから化け物の『ば』の字も出てこないし、

今お前が使ってる“フラッシュ”のおかげで、こうしてお互いの顔くらいはしっかり見えてんだからさ」

慰めとは程遠いスバルの言葉に、キロットはがっくりと項垂れた。その尻尾は、ほんのりと白く光り輝いている。“フラッシュ”は相手の目を眩ますほど目映い光を放つのが普通だが、キロットのテンションに比例しているのか“ほたるび”よりもか細くなっていた。

それでも、奥に進まなければいけない理由が二人にはある。ドガースとズバットに盗まれた、スバルとキロットの宝物を取り返すためだ。

「そんなに大事なものなの？その……えっと、ヘルメット？だっけ」

まだ汗と涙（以下略）で顔をぐしゃぐしゃにしつつも、ようやく落ち着いたキロットが聞いてきた。考えてみれば、スバルは名前と「元ニンゲンであること」以外はきれいさっぱり忘れているはずなのに、奪われたヘルメットを取り返そうと躍起になっている。

「むー……何て言えばいいのかな。記憶にはないけど……失くしたら一生後悔しそうな気がしてならないんだよ」

「そうなの……ボクの宝物も同じだよ。すっごく大切な物だから……アイツ等から絶対取り返すんだ」

「（……あれ？洞窟入る前『諦めて帰るところだった』とか言ってなかったか？コイツ）」

禁句のような気がして、スバルは慌てて口を塞いだ。

少し先に進むと、「カタッ……」と何かの動く音がした。臆病であるが故に音や気配に敏感なキロットがビクンと耳を動かし、それと同時に尻尾の“フラッシュ”が一層強く瞬いた。

「い、今、なんか音しなかった？」
「音ぉ？何も聞こえなかったけど」

訝しげにスバルが振り返ろうとすると、女にも負けないくらい甲高いキロットの悲鳴が響き渡った。

「きゃあああぁぁ！スバル、スバル、取ってええええぇぇぇ！」

泣き叫ぶキロットの顔面には、堅い甲羅を持つ水ポケモン、カブトがへばりついていた。急いでスバルが引き剥がそうとするが、彼よりも小さい身体のくせに力がものすごく強く、爪から剥がそうとしても一ミリも動かない。まるでキロットの顔と一体化してしまったかのようだ。奮闘するうちにイライラが募り、スバルの堪忍袋が音を立てて切れた。

「しつけぇな……とっとと離れろって言ってんだろーがぁっ！」

スバル本人は、ただ叫んだつもりでいたらしい。この後とんでもないことになるだなんて、思いもしなかった。

「ギャアアアァァァ！」

キロットほどではないが、突然カブトも甲高い苦痛の悲鳴を上げた。スバルの口から叫びと共に、無数の泡が光線のように勢いよく飛び出したのだ。水タイプの技の一つ、“バブルこうせん”である。“バブルこうせん”は短く青い軌跡を描き、五十センチもない至近距離でカブトの甲羅にヒットした。ごく小さいが、クモの巣のようなヒビが入る。顔が塞がれているキロットはもちろん、技を繰り出した張本人のスバルでさえも、今何が起こったのか理解できなかった。頭が混乱する中で、スバルはとりあえずカブトを取り外しに

かかる。
カブトはすでに気絶していたようで、すんなりと剥がすことができた。キロットの顔には目立った外傷はなかったが、涙その他諸々は先程よりも酷くなっている。
「キロット、大丈……」
「怖かったよおおぉぉ！ほんとに死ぬかと思ったあぁぁぁ～！」
声をかけるなり、キロットは赤ん坊のようにびーびー泣き出した。コイツ絶対十歳未満だ。もし同い年だったら情けなくて仕方ない……自分が。
それにしても、さっきの“バブルこうせん”――――繰り出した自分が言うのも何だが、想像を絶するほどだった。たいして相性がいいというわけでもないのに、カブトの甲羅にヒビを入れるほどの威力……
「ふぅ……あ、スバル、さっきはありがとう。もう大丈夫だよ」
「あ？あぁ……そっか」
考え事をしているうちに、キロットはもう泣き止んでいた。
再び、二人は歩き始める。なぜカブトが襲ってきたのかは分からなかったが、それ以降はポケモンに襲われなかったので、さほど気にすることはなかった。進むうちにだんだんと下り坂になり、潮の香りを纏った風が吹いてきた。もうそろそろ出口に着くのかもしれない。すると、またキロットの耳がピクリと動いた。
「な、何だよ？」
「静かにして。声が聞こえる……」
潮騒に微かに交じる、誰かの話し声。スバルもキロットに倣って、

耳を澄まして声を聞きとろうとした。

「……おいどうするよ、コドワ？」

「お前に分かんないことが俺に分かるかよ、ティッド」

イライラしているのか、コドワと呼ばれたドガースは当たるようにズバット、もといティッドに言い放った。

スバルとキロットからヘルメットと石の欠片を奪ったこの二人は、大海原を目の前にして立ち往生していた。逃げ道がなかったのである。本格的に沈み始めた夕日によって赤く染まっている海に囲まれ、陸地は今二人が立っている場所だけになっていたからだ。

「ところでティッド、お前何変なヘルメットかぶってんだよ？」

コドワは今頃気付いたかのように、ティッドがかぶっているヘルメットについての質問を飛ばした。

「あぁこれか？逃げてる途中海岸で倒れてる奴見つけてよ、そいつがかぶってたヘルメットが珍しかったからこっそりいただいたってわけ」

「……ケッ、余裕ぶっこきやがって。追手が弱虫君とはいえ、いま俺達は逃げてる身だぜ？しかも今に至っては洞窟の奥底で立ち往生」

「……流石に俺も、この展開は予想してなかったぜ」

「やれやれ、折角一つぐらい手柄立てて、兄貴に喜んでもらおうと思ったのによぉ……」

「見つけたぞこの泥棒野郎共おおぉぉ！」

聞いただけでも怒りがビシビシ伝わってくる怒声と共に、“バブルこうせん”が目にも留まらぬ速さで一直線に飛んできた。当たるか否かの瀬戸際で、コドワとティッドが左右に避ける。程なく部屋の入口から、スバルとキロットが走ったままの勢いで飛び込んできた。

「ヤ、ヤベッ……もう来ちまったのかよ！」

ただでさえ行き止まりで逃げ場がないだけに、その焦りも一入だった。だがそれも、ちょうど今浜辺に打ち寄せた波のように、一気に引いていくことになる。

「さぁキロット、お前も何か言ってやれ！」

「ええぇ！そ、そんなの……ボクにできるわけが……」

唾を飛ばして怒鳴るスバルとは対照的に、キロットは誰が見ても分かるくらいにガタガタブルブルと震えていた。コドワとティッドはそれを見て、勝ち誇ったようにニヤニヤと笑う。

「ケッ、そこのピカチュウ君はあんまり乗り気じゃないようだな」

「へへっ、あそこまでガタブルだと同じ男とは思えねぇぜ」

二人から言いたい放題言われても、キロットは怒るどころか今にも泣き出しそうな顔になっていた。その分、スバルはさっきよりも増してイライラしている。だがそのイライラの矛先は、コソドロ二名ではなくキロットに向けられていた。

「お前なぁ……あんな奴らにあれほど言われてムカつくとも思わねぇのか？」

「だ、だって……ホントのことなんだもん……」

「はい？聞こえなかった。もう一回言ってみ？」
「……ホントのことだもん！ボクが泣き虫で臆病なのは生まれつきなんだよっ！」

絞り出すように叫び、いよいよキロットは声を上げて本格的に泣き出した。それを見てコソドロ二名は声を上げて本格的に笑い出す。スバルはそれを交互に見ると、イライラがたっぷり詰まったため息を一つ吐き出した。

「あっそ、わかったよ。じゃあ一生そこで泣いてりゃいいじゃねぇか」

突っ放すように言い放ち、スバルは砂を蹴ってコドワとティッドに向かっていった。二人のうち、スバルのヘルメットを持っているティッドに“バブルこうせん”を放とうとするが……

「“ちょうおんぱ”！」

ティッドの大きく開けた口から、ガラスを爪でひっかいたような不快な音を内に含む音波が飛び出してきた。慌ててスバルが右に転がり直撃を避けるが、金切り声が耳を通して頭の中にわんわん響く。側転交じりで着地しつつ、片手で耳を塞いで耳鳴りを抑えようとするが、その隙を狙ってコドワの“たいあたり”がスバルの背中に命中した。

「ッ！てめぇ……っ！」

地面に叩き付けられながらも、振り向きざまにコドワに反撃しようとしたが、それをティッドの“つばさでうつ”が阻止する。
二対一という圧倒的に不利な状況の中、それでもスバルが抵抗し

ているのを、岩陰に隠れてブルブル震えながらキロットは見ていた。このままスバルを見捨てて逃げ出そうか、危険を顧みずコドワとティッドに立ち向かっていこうか、その二つの考えが頭の中でぶつかり合って大喧嘩を始めた。結局、前にも後ろにも進めず、時間ばかりが過ぎていく。

「……！」

悩むキロットの足元に、何かが転がってきた。直径十センチくらいの石の欠片――――キロットの宝物だ。今繰り広げられている戦いの中で、コドワが落としたのだろう。

これを拾って引き返せば、宝物奪還に成功したことになる。コソドロ二人も、キロットの宝物を落としたことに気が付いていない。もともとそのつもりでここに来たのだ。スバルに強引に引っ張りこまれたとはいえ、勇気を振り絞って洞窟を抜けたのだ。その勇気は無駄にならないのだ。

スバルを見捨て――――宝物を持ってここから逃げさえすれば。

そんな考えに急かされて、宝物に手を伸ばそうとし、思いとどまった。戦うのも嫌だけれど、そんな非情なことなんてもっとできない。それに、自分には探検家になるという夢がある。探検家は未開の地を探検するというのが普通だが、今この世界で生じている異変から、ヒトびとを救うという役目も負っているのだ。困っているヒトを助ける。困っているヒトなら……今、目の前にいる。

伸ばしかけた手を引っ込め、目の前の岩を飛び越えて、キロットは空中から“でんきショック”を放った。見境なく繰り出した電撃は、コドワやティッドはもちろんスバルもその威力を十分に堪能し、目映い光が収まった頃には、キロット以外のポケモン達は目を回して気絶していた。

「わああぁぁ！ごめんスバル、大丈夫？」

地面に降り立ったキロットが倒れているスバルを揺さぶる。水タイプなので大ダメージを受けていると思いきや、数秒呼びかけるだけで意識を取り戻した。

「ホッ、よかったぁ……」

「……なんだよお前、本気出しゃちゃんと出来るじゃんか」

スバルは大きく笑って言うと、勢いをつけて飛び起き、未だに気絶しているティッドからヘルメットを取り上げ頭にかぶり直した。やはり、こうした方がなんとなく落ち着く。だがかぶっても、このヘルメットに関する記憶は全く思い出せなかった。

「やった……ボクの宝物……取り返すことができたんだ……」

キロットも自身の宝物を拾い上げ、また泣き出している。だが、これは嬉し泣きだ。今まで流していた涙と違うことは、スバルにだって分かっていた。だから、敢えて何も言わないであげた。

「さて、そろそろ帰るか。もうこんな潮臭い所に長居はゴメンだぜ」

「え、ちょ、ちょっと待ってよぉ！」

慌ててキロットは涙をぬぐい、そそくさと出ていくスバルの後を追っていった。

第二話　奪還――――初めての戦い（後書き）

今日の更新はここまで！
誰か［オレンのみ］をください……（疲労困憊

第三話　結成――――動き出す物語（前書き）

第三話更新。なんだか短い。
しかも地の文の量がだんだんと減ってきてる……これはヤバイ。

第三話　結成――――動き出す物語

あれからどのくらい時間が経ったのか、スバルとキロットには分からない。だが夕日はまだ完全に沈んでおらず、水平線から半分だけ顔を出していた。来た道を引き返して洞窟から出たスバル達を迎えてくれたのは、夕日色のベールを纏った砂浜や岩場、小さな林や広大な空、そして、無数に漂う大きなシャボン玉だった。

「わあ～！今日も綺麗だぁ！」

一つ一つ夕日を映し出すシャボン玉に目を輝かせて、キロットが砂浜を駆ける。スバルもそれに続き、夕日が一番よく見えるという場所まで行って、二人で並んで腰かけた。

キロット曰く、この海岸は毎日夕暮れ時になると、ここを住処としているクラブ達が一斉に泡を吐き出すらしい。その理由は泡を吐いているクラブ達本人しか知らない。彼等と夕日の織りなす自然の芸術が、キロットの大のお気に入りなのだという。

「スバル、さっきはありがとうね。これが取り返せたのも、スバルのおかげだよ」

不意に、キロットが切り出してきた。

「何言ってんだよ、オレは何もしちゃいないぜ。あのコソドロ二人を倒したのはお前だろ？」

「そうだけど……ボクが勇気を出してあいつらに立ち向かえたのは、スバルが必死で戦ってるのを見たからだよ。ボク一人で来てたら、あのまま引き返してたもん」

そう、とスバルは苦笑いをした。自分はただ、キロットを道連れに洞窟に入って、二対一だということにも構わず暴れていただけなのに。でも、キロットがあそこまで感謝してくれているのだったら、それでもまぁいいかな。そう思い直すことにした。

「これが、さっきの宝物だよ」

そう言ってキロットが見せてくれたのは、表面が平らに磨かれた石の欠片――欠片として微妙に大きいけれど――だった。一見、何の変哲もないただの石に見える。だが、キロットが徐に石の平らな部分に手を当てた瞬間、スバルは我が目を疑った。

「な、何だこりゃ？」

思わずこのような素っ頓狂な声を上げてしまうくらい。ほのかな光とともに、何もなかった石の表面に、言葉では言い表せない不思議な模様が浮かび上がったのだ。

「ボクが触るとね、いつもこう光るんだよ」

キロットが手を離すと、模様と共に光も消えた。試しにスバルも触れてみるが、何も起きない。

「この石――ボクは［遺跡の欠片］って呼んでるんだけど、探検家だったボクのお父さんからもらったものなんだ」

沈みかけの太陽を眺めながら、キロットが語りだした。頭上の空はもう夜の帳が下り、星が輝き始めている。

「ボクのお父さんは、巷でも結構有名な探検家でね、今までも数々

の探検を成功させてきたんだ。ボクは小さい頃から、お父さんの探検話や、伝説とかお伽話とかをいつも聞かされてて、いつかボクもお父さんみたいな探検家になって、この石の謎を解き明かしたいって思うようになったんだ」

楽しそうに話すキロット。彼の話には、スバルにも共感できるものがあった。まだ誰にも知られていない未開の地。そこに好奇心を持って飛び込むという、なかなか味わえないスリル。考えるだけでワクワクしてきた。

「この海岸から少し行った先に、探検家養成ギルドがあってね、その親方に頼んで弟子にしてもらおうとしたんだけど、ボク、自他共に認める臆病者だから……今日もギルドに行ったんだけど、結局は入れなくて……」

諦めて帰ろうとした時、例の不良共に襲われたのだという。

元気に立っていたキロットの耳は、話が進むうちにだんだんと垂れ下がっていった。スバルは少し考えた後、キロットの顔を見ずに言った。

「さっきも言っただろ？」

「え？」

「あのコソドロ二人を倒したのはお前だ———って言ったよな？だったらお前は臆病者じゃねぇじゃんか。本当の臆病者だったらまずあの洞窟すら入らねぇぜ？」

「そ、それは……あの時は、ホントに無我夢中だったし…（洞窟へはスバルが無理やり連れてったんだし）……」

「その時お前が精神的にどんな状態だったかはこの際どうでもいいんだよ。結果としてお前は、自分の力で宝物を取り返した。その事実がある限り、目撃者のオレは絶対にお前を臆病者とは認めないか

らな」

気取った台詞だと自分でも思う。言われたキロットは口を半開きにしてこちらを見ていた。傍観しているようにも見えるが、何かを考えているようにも見える。

「スバル、お願いがあるんだけど、いい？」

「ん？」

「ボク、もう一度ギルドへ行こうと思ってるんだ。あの時はダメだったけど、今なら……一人じゃ流石に無理かもしれないけど、スバルと一緒なら行ける気がするんだ。だから…」

「一緒にその探検隊なんとかギルドに来てほしいってか？」

先回りして聞いたスバルの問いに、キロットはおずおずと頷く。スバルからして見れば、今のキロットなら一人でも十分行けそうな気がするのだが……というか、そのギルドとやらはそんなに怖い所なのか？

「いやそんな……さっき言ったばっかじゃねぇか。お前は臆病者じゃねぇんだから、そのくらい一人でも行けるだろ？」

「う、うん！ボクのことを臆病者とは認めないって言ってくれたのはうれしいよ。だけど……スバル、記憶を失くしてるんでしょ？このまま行くアテとかあるのかなぁって……」

……恥ずかしい話、キロットにこう言われるまで、スバルは自分の今の状況すら考えていなかったのである。記憶を失くしてポケモンになり、自分のこともこの世界のことも何も分からないままで、どうして行くアテなどあろうか――――ないよな、そりゃ。

「……ゴメン、アテとかそういうの全然考えてなかった」

そう……と、キロットに苦笑いされた。だが次の瞬間、何かを思いついたようにピン！と耳を立てた。そして、

「スバル、もしよかったら……ボクと探検隊やらない？」

———唐突にこう聞いてきたのである。

「た、探検隊？オレと？」

「うん！絶対二人でやった方が楽しいし、ひょっとしたら、探検を進めていくうちにスバルの秘密とか分かるかもしれないじゃないか。ね、ね、悪い話じゃないでしょ？」

今まで砂浜のど真ん中にいたはずなのに、キロットがどんどん迫ってくるせいでまた洞窟に入りそうになってしまった。確かにアテが無いというのは事実だが、だからといってこの見ず知らずのピカチュウと探検隊とか……どう考えたっておかしい成り行きである。

とはいえ、ここで断ったら絶対泣き叫ぶし、第一この状態になったら引き下がることはないだろう。泣き虫で頼りないけれど、今はこのキロットが唯一信用できそうなヒトで間違いない。今頼まれていることも無理難題だったら全力で断るが、探検隊というのも面白そうだし……

探るつもりはないけれど、断る理由は見つかりそうにないな。

「……しょうがねぇな、分かったよ」

「え、えっ？じゃあ……」

「オレとキロットの探検隊コンビ結成ってわけだ。改めてよろしくな、キロット」

せっかくこちらから握手を求めてやったのに、キロットはその場

で固まったまま動かなくなってしまっていた。その原因が「感極まっている」ということは、涙で潤った目を見れば一発で分かることだけれど。

「ありがとう！ボク達、絶対にいいコンビになるよ！よろしくね！」

じゃあすぐにギルドへ行かないと……と呟くなり、握手目的で差し出されたスバルの手をむんずと掴み、今度はキロットがスバルを引っ張って走っていった。

「ち、ちょっと待て！早い早い早い！」

ギルドがある街までの道中、スバルは五回顔を強打したという。

日が完全に沈み、泡をはいていたクラブ達はすでに自分の住処へ帰った今、ここに新たな探検隊が結成したのを見届けたのは、夜空に浮かぶ満月と数多の星々だけであった。

第三話　結成――――動き出す物語（後書き）

探検隊結成！とりあえず一人拍手パチパチ。
さぁこれから忙しくなるぞ……

第四話　入門――――探検隊養成ギルド（前書き）

元気があるうちに連続更新。

第四話　入門――探検隊養成ギルド

探検隊要請ギルドに着くまでには、えらく長い階段を登りきらなければならなかった。キロットは連日通っているので慣れてしまったというが、スバルにとってはこれが初体験、しかも歩くのが苦手というポッチャマの体質のせいで余計に時間がかかってしまい、登りきって早々スバルはうつ伏せにばたりと倒れてしまった。

「だ、大丈夫？」

「ご、ゴメン……しばらく話しかけないでくれ……」

真っ青な顔で呻いている。

しばらくしてようやく落ち着き、スバルはギルドの外観を目の当たりにすることとなった。入口へ続く道に沿って、色々なポケモンの顔を模したトーテムポールが立てられており、その先にはいかにも落とし穴を彷彿とさせるような、格子で塞がれた大きな穴。それを超えて顔を上げれば、二つの燭台に照らされた大きなテント、さらにはどっしりとした布で作られたプクリンの顔と目が合う。なるほど、これでは初めて見たヒトなら不気味に思うだろう。

「あれ……おかしいな……」

まだ入り口からほど遠い所で、キロットが入り口を見て呟く。

「何が？」

「いやさ、いつもなら入り口は鉄格子で閉まってるんだけど……」

キロットが指差した先にある入り口は、まるで「どうぞお入りくださいな」とでも言っているかのようにその懐を開けていた。単な

る閉め忘れなのか、それとも、何かの罠だったりするのか。

「入ってみようぜ。何か言われたって閉め忘れたやつが悪いんだからさ」

「ちょっ、それは流石にマズいんじゃ……！」

キロットの制止も聞かず、スバルはすたすたとテントの中に入っていった。……うまい具合に、入り口前にある格子で塞がれた穴を避けて。

「おじゃましまぁ……うわっ！」

テントの中に足を踏み入れた瞬間、突然身体が重力に従って引っ張られていった。客観的に見れば、テント内にある穴に落ちてしまったのである。

「ス、スバル！」

「おわああぁぁぁ……」

叫び声と共に落ちていくスバル。一呼吸おいて、ドスンという鈍い音が響いた。

「イテテ……ここは……？」

腰をさすりながら起き上がり、辺りを見回してみる。地面から下に落ちたのだから、当然ここは地下のはずだ。なのに異様に明るいし、窓からは外の様子も見られる。

部屋の様子を一通り眺めていると、さらに下から声が聞こえてきた。

「侵入者だぞー！」
「きゃーですわぁ！」
「ヘイヘイヘェーイ！」
「と、とっ捕まえるでゲスー！」

ヤバイ、誰か来る！
スバルはほぼ気合と根性で腰の痛みを振り切り、先程落ちた穴へと続く梯子を登ろうとした。だが、

「うわぁ！」
「ぐへぇ！」

なんと上から、今度はキロットが頭から落ちてきたのだ。なんというバッドタイミング。ヘルメットがあるとはいえキロットの頭が頑丈すぎるのか、スバルの目からは無数の火花が飛び散り、一緒くたになって地面に叩き付けられてしまった。その上に、

「侵入者の身柄、確保ぉ！」
「おぉーっ！」

……総勢約十名ものポケモンがのしかかってきたのである。

「いやー、ホントにすまなかったねぇ♪」
「……アンタ、ヒト押し潰しといてよくそんなにヘラヘラしてられるよな」

全身痣だらけのスバルに睨まれ、身柄確保の命令を出した張本人のペラップは、バツが悪そうに翼で頭を掻いた。
一連の騒動の後、キロットが何とか事情を説明してくれたおかげ

で、ギルドに勤めているポケモン達の歓迎を受けられた。そして今、スバルとキロット、そしてギルドのメンバー達はこのギルドの親方の部屋にいる。実に三年ぶりという新たな弟子の登録をするためだった。

「それもこれもラドイル、あなたが夕食前にちゃんと入口を閉めなかったのが悪いんですわ！」
「だ、だってしょうがねぇだろ！今日は特別に腹が減っててそれどころじゃなかったんだよ！」

メンバーの一人であるキマワリに責められ、ラドイルと呼ばれたドゴームが半ば言い訳にならない言い訳を返した。……鼓膜が木っ端微塵になるほどの大声で。

「まあまあ二人とも、新入りの前だよ？喧嘩はダメダメ」

弟子の大半がラドイルの大声で気絶している中、それでもなお言い争いを続ける二人を、見るからに豪華そうな椅子に座っているプクリンがやんわりと制した。彼こそが、この探検隊養成ギルドを取り仕切る親方なのである。

「はじめまして、新入りさん。僕はピコル。このギルドの親方さ。えっと、君達は探検隊になるためにここに来たんだね？」
「は、はい！」

緊張しているのか、キロットが不自然に背筋を伸ばして答える。スバルも返事はしなかったが、右に同じだと一つ頷いた。

「じゃあ早速、ギルドの弟子として登録しなくちゃね。君達のチーム名は？」

「……はい？」

今さっき答えた「はい」に、疑問符をつけて返すキロット。考えてみれば、スバル達はコンビこそ組んだものの、探検隊のチーム名なぞこれっぽっちも考えていなかった。スバルに至っては、探検隊にチーム名が必要だということすら知らなかったのである。

「……ひょっとして君達、チーム名考えてないの？」

答えるのに手間取っていると、今までニコニコしていたピコルの顔から笑みが消えた。それを察したのか、周りにいた弟子たちの顔が瞬時に青ざめる。ペラップが慌ててスバル達の所まで飛んできた。翼をバサバサ言わせながらヒソヒソ声で聞いてくる。

「お、お前達、ホントにチーム名考えてないのかい？」

「は、はい……」

「じゃあ今から十秒でチーム名考えろ！早くしないと、親方様のアレが……！」

「……『アレ』って、なんなんスか？」

こんなに切羽詰まった状況にもかかわらず、「アレ」という言葉が気になったのか、のんきにもスバルが聞き返した。案の定、ペラップは頭から湯気を立てて（ヒソヒソ声で）怒鳴る。

「今それを聞く余裕があるならとっととチーム名考えてくれ！あと五秒！」

「ご、五秒？えぇっと……」

何かいいものはないかとキロットは時計回りに辺りを見回した。見えるのはギルドメンバー達の怯える顔ばかり。ぐるりと左を向い

た瞬間、おあつらえ向きに文字を見つけ、何も考えずにそれを叫んだ。

「『スピリッツ』！『スピリッツ』でお願いします！」

――――叫んだ本人が我に返るまで、時が止まったような気がした。キロットはマズいことをしちゃったかもと縋るような目でスバルの顔を見、スバルはオレが知るかよと慌てて面倒そうな表情を作る。その気まずい静寂を崩したのは、ピコルだった。

「なんだ、ちゃんとチーム名も考えてるじゃない。じゃあ『チーム・スピリッツ』で登録するね♪」

ピコルは上機嫌な顔で、どこからか紙を一枚取り出した。おそらく登録書だろう。ほっと胸をなでおろすスバル達だが、何故かギルドメンバー達はまだ怯え続けている。

突然、誰かに頭を押さえつけられ、スバルとキロットは地面にうつ伏せにされてしまった。ペラップが翼でスバル達を押さえつけたのだ。

「な、何すんだよ！」

「つべこべ言わない！痛い目に遭いたくなかったら伏せろ！」

そう言ったペラップも慌てている。と、次の瞬間。

「登録♪登録♪みんな登録……たああぁぁ――――――――――っ！」

ラドイルにも負けないピコルの元気な声が響き渡り、光、爆発音と共に、爆風がスバル達に襲いかかってきた。それは一瞬のうちに

部屋全体を覆い尽くし、あまつさえ親方の部屋のドアを吹き飛ばし、ペラップがそれに続いてゴロゴロと転がっていく。煙があらかた消えてふと顔を上げれば、見るも無残になった部屋と目を回している弟子達が目に入った。

「おめでとう！これで今日から君達もこのギルドのメンバーだよ！改めてよろしくね！」

一人何事もなかったかのように言うピコルの足元には、先ほどの登録書が煙を立てて落ちていた。驚いたことに、しっかりと「チーム・スピリッツ」というチーム名、スバルとキロットの名前がそこに書かれてある。どうやったらあの爆発でこんなもんができるんだよと、未だに起き上がれない状態のまま、スバルが登録書を見て驚愕していた。

「ここが、お前達の部屋だ」

おそらくあの爆発の一番の被害者であろうペラップが、通路の一番奥にある部屋のドアを開けた。そこには藁でできたベッドと、麻でできた掛布団が二つずつ。明かり代わりの蝋燭もある。さらに壁をくりぬいたような窓を除けばあとは何もない、シンプルな部屋だった。今日からここが、探検隊「チーム・スピリッツ」の拠点となるのだ。

「ギルドの仕事は明日からスタートだ。朝は早いし規則も厳しい。今日は夜更かしせず早めに寝ること！いいな？」

「はいっ！……えーっと……」

キロットの疑問に一早く気づいて、ペラップが先回りして言った。

「そうそう、ワタシの名はアシュアだ。今日は諸事情があってできなかったが、このギルドの弟子達の紹介は明日の朝やるからな。ちゃんと先輩達の名前の後には「先輩」とつけるように。わかったね？」

やけに最後の部分が強調されていることに疑問を持ちながらも、スバルとキロットは了承した。アシュアが出て行った後、スバル達は眠る気になれなかったが、何もすることがないので、無理やり明りを消して布団に入ることにした。

「ところでさ、キロット」

「なぁに？」

仰向けのまま、キロットは顔だけをこちらに向けた。

「さっきのチーム名……『スピリッツ』なんて、どこから出てきたんだ？」

「あぁ……あれね、無我夢中で辺りを見回してたら、ちょうどスバルのヘルメットの後ろに書いてあったのを見つけたんだ。それで咄嗟に……」

キロットが言葉を切る前に、窓から差し込む月明かりに照らして、スバルはそばに置いてある自分のヘルメットを見た。確かにゴーグルのゴムの部分に、ポケモンの足形を模した五つの文字が書いてある。因みに、これは見た目通り足形文字と言って、ポケモン達の共通文字なのだ。

「ホントだ。なんでこんな文字が……」

「ひょっとしたらさ、スバルの記憶に関係してるんじゃないかな。

大切な物なんでしょ？」

確かにそうだが、これに関する記憶はすっぽり抜けてしまっている。書かれている文字もまたしかりだった。これらについて考えても、謎が深まるばかりである。

「うーん、分かんねぇや。そうかもしれねぇけどな」

「……」

「キロット？」

返事がないのでもう一度呼びかけると、返事の代わりにキロットの寝息が聞こえてきた。まぁ、今日はたった半日で色々あったので、疲れてしまったのだろう。スバルもそうなのだが、キロットと違って相変わらず寝付くことができなかった。脳内でループするのは、自分に関する疑問ばかり。

「（オレは…誰なんだ？どうして記憶を失って……ポケモンになっちまったんだ……？）」

必死で考えても、答えだけが出てこない。

ずっと吹いていた夜風が収まるころになって、ようやくスバルにも眠気が襲ってきた。ひとまず頭の中を空っぽにして、麻でできた布団を頭からかぶる。

目を閉じていたので本人は気づいていなかったのだが、この時スバルの額に、［遺跡の欠片］とはまた異なる不思議な模様が、一瞬だけ青緑色の光を纏って浮かび上がった。

第四話　入門――――探検隊養成ギルド（後書き）

というわけで、ギルド入門です。
いつぞやの後書きでも書いたような気がしますが、
区切りがついたら設定集作って
ギルドメンバーの紹介をしていきたいです。
とりあえず現時点では
ピコル→プクリン
アシュア→ペラップ
ラドイル→ドゴーム
これだけを頭の片隅に入れて置いていただければＯＫです＾＾；

第五話　始動――ギルド生活スタート（前書き）

ご指摘とアドバイスをいただき、地の文と会話文の間を一行空けてみました。
あえてお名前は伏せますが、アドバイスをして下さった方にこの場を借りてお礼申し上げます。

時間ができ次第、前の話や救助隊の方も修正しておきます。

第五話　始動――ギルド生活スタート

ポケモンだけが住む世界、「アナザー」。
この世界は今、ある一定の箇所だけ時間がずれたり、或いは止まったりする「時の乱れ」という現象が各地で頻繁に起こっている。原因は未だに解明されておらず、ペースは遅いが、それが起こる場所は徐々に増えてきている。
その「時の乱れ」と比例して増えてきているのが「不思議のダンジョン」。時が乱れている場所で、何もなかったところに突然できている洞窟のことを巷のヒトびとはこう呼んでいる。一見普通の洞窟と何ら変わりはないのだが、一度それが出現すると、近くに住むポケモンは必ず狂暴化し、迷い込んだヒトを情け容赦なく攻撃してくるので、「不思議のダンジョン」関連の事故が後を絶たないのだという。昨日、スバル達が探訪した「海岸の洞窟」も、「不思議のダンジョン」の一つだったのだ。
しかし、「不思議のダンジョン」は悪いことばかりではない。入る度に内部構造が変わるという不思議な性質があり、その都度新しい発見もあるので、探検するには魅力的な場所だともいえる。そんな中生まれたのが「探検隊」という職業で、「不思議のダンジョン」に入って探検することはもちろん、ごく最近になって、実力のある探検隊が「不思議のダンジョン」へ行って迷い込んだヒトを助けるというボランティアを始めたのを皮切りにその運動はどんどん広まり、今や探検隊は、救助活動をするヒトびとの代名詞にもなったのだ。十人の子供に「将来の夢は何？」と聞けば十人の子供が「探検隊」と返答するほど、この世界のヒトびとにとって「探検隊」はまさに英雄的存在なのである。

「……というわけ。大体分かった？」

「朝っぱらから長い説明をわざわざどうも……」

スバルが欠伸混じりに言った。ようやく日が昇り始め、窓から白い光が差し込んでくる。

今日からようやく探検隊としての修行が出来るという興奮のあまり早く起きてしまったキロットは、今のうちにスバルにこの世界のことについて説明しようと思い、昨晩寝るのが遅かったスバルをたたき起こして先程の長い説明をしたのである。ありがたいことではあるが、せっかくの睡眠を妨げられたスバルとしてはたまったものではない。

「てか、その説明昼でもできるだろ。なんでこんな朝早くに……」

「だ、だってほら、スバルこの世界のこと何も知らなそうじゃない。みんなが集まってる時にこんな話したら、周りから常識ないヒトと思われちゃうよ」

言われてみればその通り。多少分別ついていそうな子供が、今更この世界の常識その他を教えてもらっているなんて、傍から白い目で見られるようなことだ。ただでさえ元ニンゲンであるという経歴がある以上、怪しまれないように普通のポケモンとして過ごしていきたい。そう思うと、キロットの心遣いがありがたかった。

ただ、それでもスバルにとっては睡眠第一であったため、

「まぁ、早くからありがとな。まだ朝早いし、オレもうちょっと寝るわ……」

「うん、おやすみ」

仰向けになって早々、スバルは鼾を立てて寝始めた。相当眠かったのだろう。キロットも特にやることがないので、もう眠くはなかったけれど、ベッドで横になることにした。

――――ドアの向こうから聞こえてくる足音にも気づかずに。

「起きろおおおおおぉぉぉ！朝だぞおおおおおぉぉぉ！」

地底火山でも噴火したのかと誤認してしまいそうな程の大声が、床を這ってスバルとキロットの耳に殴りこんできた。ぐっすりと寝ていたスバルは反射的に声にならない悲鳴を上げ、すでに起きていたキロットも、

「いやあああああぁぁぁ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

何故か土下座をし始めた。

「何土下座しとんじゃいお前は！男ならビシッと立って挨拶しろやオンドレェェ！」

「お、おはようございますぅ！」

土下座を連発していたキロットのみならず、スバルも（なぜか敬礼のオマケつきで）大声の主であるドゴーム――――確か昨日ラドイルと呼ばれていたはず――――に挨拶した。頭の中で暴れ狂う不協和音のせいで「ビシッと」立つことはできなかったが。

「よーし！あとはさっさと布団畳んで大広間に来いよ！もうすぐ朝礼が始まるからな！」

本人としては普通に喋っているつもりなのだろうが、それでも音量は先程と少しも変わっていない。耳を塞いでも少し音量が下がるだけ、いやそちらの方が身体的にもありがたいのだが、人が喋っている前で耳を塞ぐなんてことをしたら絶対怒られる。鼓膜破壊承知

で我慢するしかなかった。
太く短い足でドスンドスンとステップを踏みながら、別の部屋に入っていくラドイル。そこでもまた、大声による犠牲者が出ることだろう。……お気の毒に。

「……改めておはよう、スバル」
「……あぁ、おはよう」

キロットの顔は、寝不足でもないのに誰が見ても分かるほどげっそりとやつれていた。ましてや寝起きのスバルならもっと酷い顔になっていることだろう。原因はもちろん、一割は寝起き特有のストレス、残り九割はあの大男の大声だ。

「…ヤベッ、まだ頭がガンガンする……」
「脱走者が多いっていう理由がなんとなく分かった気がするよ……」

キロットの言う通り、今彼等がいる探検家養成ギルド———親方の名をとって「ピコルのギルド」とも言われているこの施設は、好評が故に昔は弟子入り希望が後を絶たなかったのだが、あまりにも厳しい修行に耐えかねて、脱走する弟子も後を絶たなかったのだそうだ。それ以来、最近は弟子入り希望が全くと言っていいほどなく、スバルとキロットの弟子入りが決まった時にギルドメンバーが手を叩いて喜んだのはこのことが理由である。

「さて、これからどうするんだっけ？」
「えーっと、布団畳んで……朝礼があるとか言ってなかった？」

その時、タイミングよくドアの向こうからラドイルの声が聞こえてきた。

「遅いぞ新入りいいいいいぃぃぃ！さっさと来んかいゴルアアアアアアアァァァ！」

しっかりとした木でできたドアが面白いように仰け反るほどの声。この部屋から大広間まで、結構な距離があるはずなのだが……

「は、早く行こうぜ……急がないと確実に耳ぶっ壊される……」

「……そ、そうだね……」

スバル達は手早く布団を畳み、再発した頭痛を頭を抱えて押さえながら、部屋を出て大広間へ向かった。

ギルドの地下二階に広がる大広間には、親方を除く計九人のギルドメンバーが集まっていた。朝早いというのに皆眠たそうな様子も見せず、静かにしろと叫ぶペラップのアシュアを完全無視して賑やかに雑談している。その雑談に紛れてスバル達は並ぼうとしたのだが、運悪くラドイルに見つかってしまった。

「てめぇら何時だと思っ……ふごっ！」

「お黙り！お前の声は相変わらずうるさい！」

ペラップがどこからともなく出したハリセンでラドイルを引っ叩く。ものすごくいい音とともに、ラドイルの顔が地面にめり込んだ。なんという破壊力。

「『チーム・スピリッツ』！今回は新入りだから大目に見てやるが、次遅刻したらこのラドイル先輩のようになるからな！肝に銘じておくように！」

「は、はいっ！」

背筋がゾッとするのを感じながら、スバル達はまたもや必要のない敬礼をした。なんだか軍隊みたいである。

「えー、少々（というか、かなりなんだけど）遅れてしまったが、これから朝礼を始める」

ペラップが咳払いをして切り出し、親方の部屋まで飛んでいくと、恭しい手つきでそのドアを開けた。昨日ピコルの“ハイパーボイス”で吹っ飛ばされたのを急いで直したせいか、ところどころ壊れているのが目に入る。

間もなくそこから、ピコルが何故かあっちへ行ったりこっちへ行ったり蛇行しながら現れた。

「では親方様、一言どうぞ」

「……」

ピコルの口は開かない。……一分、三分待っても、ピコルは何も話そうとしない。いい加減心配になったキロットが、何か言おうと口を開けた。すると、

「……ぐぅ……ぐぅぐぅ……すぴ～……」

ピコルの立っている場所から、鼾らしき音が聞こえてきた。……正直信じられないが、これは誰がどう見たって、立って目を開けたまま寝ている。

「ありがたいお言葉、ありがとうございました～♪」

アシュアがメトロノームのような尾をリズム良く振っている。気

付いていないのか、あるいは気付かないフリをしているのかは定かではないが、少なくともその他の弟子の大半は気付いているらしく、口元を引きつらせて苦笑していた。

「……あのさ、スバル」
「ん？」
「親方、何て言っ……」
「知らんわ」

キロットの言葉が終わる前に、スバルがきっぱりと言い放った。

「それでは最後に、毎朝恒例の誓いの言葉、始めっ！」

アシュアが右手を挙げた瞬間、大広間にいる八人の弟子全員が大きく息を吸い込み始めた。反射的に嫌な予感を感じ、スバルは咄嗟に耳を塞ぐ。

「ひとーつ、仕事を絶対サボらなーい！」
「ふたーつ、脱走したらお仕置きだ！」
「みっつー、みんな笑顔で明るいギルド！」

……全体的にツッコみたいところが山ほどある誓いの言葉だが、それ以前に、最もうるさいラドイル&その他の弟子達渾身の大声を間近で聞いてしまい、泡を吹いて倒れそうになるスバル。ここの朝礼は耳の拷問会なのだろうか。

「キロット……ホントにここで修業やろうってのか？」
「うん？そうだよ」

予想外に平然とした声が返ってきたので、スバルはそちらの方に

度肝を抜かれた。目の前には、何事もなかったかのように立っているキロットがいる。

「お、おま、お前、今の大声パレード平気だったのか？」

「だってこれから探検隊としての修業が始まるんだよ？ボクもうワクワクして大声とか全然聞こえなかったもん！」

キロットの円らな瞳が、光を受けて乱反射している。子供みたいだ……いや子供か。スバルは呆れを通り越して、こんなキロットに恐怖を感じることしかできなかった。

「お前達、そこで何やってんだ？早くこっちに来なさい」

振り向くと、アシュアが地下一階に続く梯子に止まっていた。翼で「おいで」のジェスチャーをした後、梯子を使わずに直接地下一階まで飛んで行く。スバルとキロットは顔を見合わせ、それについていった。

第五話　始動――ギルド生活スタート（後書き）

妙に短い気がしてならないと思ったら、
ギルドの朝の場面しか描写していないことに気付く。
そりゃあ短くなるわけですわ。
「チーム・スピリッツ」の初めての修行は次回に持ち越しということで（蹴

第六話　研修――――初めての依頼（前書き）

調子の悪さがそのまま文章に影響してる……

スランプくーん、顔出すのがちょっと早すぎるんじゃないかな～？

第六話　研修――――初めての依頼

「ギルドの修業の大半はここの掲示板に張られている依頼をこなすことだ。お前達もこれから毎日、この修行をやってもらうからな」

依頼の掲示板があるという地下一階には、様々なポケモンでごった返していた。「ピコルのギルド」は探検家の養成の他に、全国各地から集まった依頼を掲示しているので、ギルドに所属していない探検家も連日ここに通い詰めているのだという。

「しかし、修行も探検も初心者であるお前達をいきなり不思議のダンジョンに放り込むわけにはいかないからな。このギルドでは七日間だけ、新人の研修期間というものを設けている」

「研修期間？」

「そう、ギルドの先輩と共に簡単な依頼をこなすのだ。先輩の名前も覚えられるし一石二鳥だろ？」

そう言うとアシュアは、八枚の小さな紙を取り出した。ギルドの先輩もアシュアを除くと八人であることから、おそらく先輩達の今日のスケジュールか何かだろう。一通りそれらに目を通し、アシュアは一つ頷くと、地下二階へ続く梯子へ向かって大声で叫んだ。

「おーい、ゴゾ！いたら地下一階まで来てくれぇ！」

掲示板を見ている探検家や探検隊がざわめいているにもかかわらず、アシュアの声がよく響くのか、呼びかけを聞いた一人のポケモンが姿を現した。まるねずみポケモンのビッパである。

「コイツはゴゾ。お前達より一つ上の先輩だ。今日はコイツと一緒

に依頼をこなしてもらうからな♪」
「ゴゾでゲス。今日はよろしくでゲス」
「あ、あぁ。よろしく（今時『でゲス』ときたか……）」

相手の語尾に少々違和感を覚えながらも、スバルは応答した。アシュアはゴゾに一枚の依頼状を渡すと、これからの段取りについて説明をし、地下二階へと飛んで行った。

「［探検隊バッグ］に今日の冒険に必要な物があらかた入っているそうでゲス。もう一度確認してみるでゲス」

ゴゾにそう言われ、キロットは探検隊結成時にもらった［探検隊バッグ］の中を探った。「アナザー」全土が描かれた［不思議な地図］に、食料用の［リンゴ］と、［オレンのみ］が三つずつ。探検隊の証である［探検隊バッジ］と、装備品の［しあわせリボン］と［キトサンバンダナ］が入ってあった。

「さて、今日の依頼の舞台は『小さな原っぱ』でゲス。張り切っていくでゲスよー！」

やけに一番テンションが高いゴゾに引きつられ、「チーム・スピリッツ」は初の依頼場所「小さな原っぱ」へと向かった。

「小さな原っぱ」も「海岸の洞窟」と同じ、「不思議のダンジョン」の一つだった。そもそもギルドの送られてくる依頼全てが「不思議のダンジョン」というのだから当たり前といえば当たり前。規模は「海岸の洞窟」よりも小さく、新米探検隊が依頼をこなすには絶好の場所だともいえる。しかしそれよりもスバルを不機嫌にさせたのは、その依頼の内容だった。

「スバル、どうしたの？そんな不機嫌そうな顔して」
「そりゃそうだろ！『［わかくさグミ］が欲しい！ダンジョンで拾ってきてください』なんて内容だったら嫌でも不機嫌になるじゃねぇか！」

内容が探検、妥協して救助と期待していたスバルが怒るのも無理はない。いくら「不思議のダンジョン」が危険だからとはいえ、これでは子供のお遣い同然である。その後もスバルが言いたい放題言っていると、後ろからすすり泣く声が聞こえてきた。

「うわわ！どうしたんですかゴゾ先輩！」

振り向くと、ゴゾが肩を震わせて泣いている。あんなに鬱憤を言い放ったのがまずかったのだろうか、とりあえず謝るつもりでスバルがゴゾのもとへ走っていく。

「うぅ……大丈夫でゲス。ちょっと感極まって泣いてただけでゲス」
「……感極まって？」
「実はあっし、君達が来る前はギルドの中で一番の後輩だったんでゲス。ずっと後輩が欲しいなって思ってたら……こんなに早く、しかも二人も後輩ができるなんて……！」

とうとうゴゾはおいおいと声を上げて泣き出した。気持ちは分からないと言ったら嘘になってしまうが、傍から見るとオーバーな感じがする。
そんなゴゾを見て反省（？）したのか、それっきりスバルは不満をもらさなくなった。時折凶暴化したポケモンが出てくるが、技を一発当てれば気絶する程度なので大したことにはならなかった。正直、「海岸の洞窟」よりも簡単なダンジョンのような気がする。

割と奥深くにまでたどり着き、手分けして［わかくさグミ］を探すことにしたスバル達。テンションの上がらないスバルが、何となく俯きながら歩いていると、足で何かを蹴飛ばした様な感覚がした。

「…何だこれ？」

蹴飛ばした物を拾い上げてみると、それは小さなキャンディーのようなものだった。透き通った緑色をしている。

「お、スバル。それが［わかくさグミ］だよ！」

キロットがスバルの肩越しに覗き込み声を上げる。遠くで探していたゴゾも声を聞きつけ、こちらに寄ってきた。

「意外と早く見つけたでゲスねぇ。流石でゲス」

「……なんか、呆気なさ過ぎないか？」

「日暮れまで探すよりずっとマシでしょ？早く依頼主に届けてあげよう！」

キロットは手渡されたグミを小さな巾着袋に入れると、代わりにバックから［探検隊バッジ］を取り出した。このバッジ、探検隊の証であると同時に、頭上高く掲げると一瞬でギルドまで戻れるという優れ物なのである。早速キロットが頭上高くバッジを掲げると、瞬く間にバッジから発せられた光がスバル達を包み込み、微細な粒子となってかき消えた。

「チーム・スピリッツ」の初依頼は、三十分足らずで達成されたのである。

「いやー、お前達、案外早く終わったじゃないか♪」

グミを手渡されて大喜びで帰っていった依頼主を見送っていると、アシュアが話しかけてきた。上機嫌そうに尾を振っている。

「……内容がアレだったら遅くなる方がおかしいでしょ？」

「ま、そうだよな。正直ここまでやるとは私も思ってなかったよ♪明日はちょっとレベルを上げてやるか」

さて……と呟くと、アシュアは懐から何かが入った袋を取り出し、スバル達に見せた。

「何スか？それ」

「今回の依頼の報酬、二千ポケだ」

「に、二千って……莫大な金額じゃないですか！」

キロットは驚きの声を上げる。スバルは驚く以前に、この世界のお金の単位が「ポケ」であることを頭の中にメモしておいた。

「だが」

「へ？」

アシュアは袋の口を開けると、その中から硬貨を取り出し、それをスバルに手渡した。算用数字で百と書かれた硬貨が二枚。要するに二百ポケである。

「ほとんどが親方様の取り分♪お前達にはこのくらいかな♪」

「このくらいって……たったの一割だけ……？」

空気の抜けた風船のように、高揚していたキロットの心は急速に冷めていった。いくら内容がショボ過ぎたとはいえ、これは流石に

酷過ぎる。キロットがそう抗議すると、アシュアは笑いながら、

「これがギルドのしきたりなんだよ。我慢しな♪ゴゾと分け合いにならないだけでもありがたく思いなさい♪」

と、腹が立つほど上機嫌な声で返してきた。

仕事が早く終わったため、スバル達はゴゾにギルド内部の施設を案内してもらった。チリーンのメルが経営する探検隊チーム編成所、何をしているのかゴゾでも分からないという、グレッグルのボルリドが営むトレード店などを、先程から同じテンションでゴゾが説明してくれた。そうして時間を潰していくうちに、続々と先輩がギルドに帰ってくる。そして窓から見える空が赤くなる頃、鈴のような音が聞こえてきた。

「みなさーん、食事の準備ができました！晩御飯の時間ですよー！」

そう知らせてくれたのは、編成所を切り盛りしていたチリーンのメル。彼女の呼び鈴が鳴り終わるや否や、ギルド地下二階にいた先輩達の大多数がとび跳ねながら喜んだ。我先に食堂へ行く者もいる。スバル達もゴゾに促されて、食堂へと向かった。

一日の仕事で空腹なのか、ギルドの夕食は食事というより一種の戦場と化していた。［リンゴ］一個をかじっている間に次の［リンゴ］へ手を伸ばす。先輩達に比べてさほど仕事という仕事をしていないせいか、そんなに空腹になっていない。それでも、見る見るうちに減っていく先輩達の皿の料理を横目で見ながら、スバルとキロットもなるべく急いで食べ物を腹に入れた。

食事という名の戦争が終わり、満腹になった先輩達は自分達の部屋へ帰っていく。スバル達は部屋に戻る前にアシュアに呼び出され、明日の依頼に必要な最低限の道具と、これから一週間の研修で手伝

いをしてくれる先輩の割り当て表を手渡された。

「（うわ……明日ラドイル先輩かよ……）」

明日の予定を見たスバルがこう思ったのは余談である。

「はぁ……なんか、疲れたね」

キロットが溜息混じりに言ってきた。メインの修行はそれほど疲れるものではなかったのに、日常の些細な出来事があまりにも濃厚過ぎて、活力がどんどん抜き取られていくような気がする。

「ま、これでも研修なんだろ？これで疲れたって言っちゃあ本格的な修行についていけねぇぜ」

「そんなこと言って、スバルすっごいやつれた顔してるよ？」

キロットにそう言われ、スバルは苦笑した。スバルに至っては身体的にも精神的にも忙しい一日だったが、この疲れは悪いものではなかった。もしあの時キロットの誘いを断っていたら、今頃アテもなくどこかを彷徨っていただろう。それに比べれば、何かやるべきことをしながら過ごすこの生活がいい。

「……スバル？」

キロットが呼びかけた頃には、スバルはもう眠りの世界に入っていた。昨日と正反対である。キロットは微笑みながら、暗がりの中、手探りでバッグから［遺跡の欠片］を取り出した。

———ボクだって、このくらいで弱音を吐いてちゃいけないんだ。

絶対、この欠片の謎を解いてやるんだから。

窓から入ってくる月明かりに照らされて、［遺跡の欠片］の表面がキラリと輝いた。

第六話　研修―――初めての依頼（後書き）

後書きの場を借りていくつか補足説明を。

～その１　バッグの中の装備品～
原作は「波動のリボン」と主人公に応じた装備品でしたが、
この小説ではポッチャマとピカチュウの装備品、
［しあわせリボン］と［キトサンバンダナ］にしました。
理由？トップシークレットということで；
決してスバルにもキロットにもリボンが似合わないからというわけじゃ（ぁ
波動のリボンは後にとある場所で出す予定です。

～その２　初めての依頼場所～
「湿った岩場」ではなく、未開の地「小さな原っぱ」を初依頼の場所に。
こちらの方がなんとなく初心者っぽいかな？と思いまして。
（出てくるポケモンのレベルは格段に違いますがｗ）

……でも、今思えば「湿った岩場」でもよかったんじゃないかとふと思（殴
はい、自覚してます。ダメな作者です。

第七話　修行――――不思議な夢（前書き）

書いてから気づいたんですが、救助隊も探検隊も
三番目のダンジョンが出る回の事件内容が全く同じ。

第七話　修行―――不思議な夢

「そろそろ、『スピリッツ』も本格的な仕事に入るね。アシュア」

アシュアを除く弟子達全員が寝静まった夜、親方専用の豪奢な椅子に座り、好物である［セカイイチ］を齧りながら、ピコルはアシュアに言った。「チーム・スピリッツ」がギルドに入門して早七日。仕事慣れのための研修が終わり、彼等にもいよいよギルドの一員としての仕事が与えられるのである。

「大概の新入りはこの研修だけで弱音を吐いて脱走するっていうのに……しぶとい奴等ですね」

アシュアはそう呟きながら、弟子ごとの明日のスケジュールを確認していた。傍らには今月のギルドの決算などが書かれた大量の紙の束。これらの管理を全て、ピコルの一番弟子であるアシュアが担当しているのである。過労にも程がある。

「そんなこと言わないの。ともだちが増えるのはいいことだよ？最近このギルドも人数が少なくてつまんなかったんだもん」

「……そうですね、申し訳ございません」

一通り書き仕事も済ませて書類を束ね、親方の部屋を出ようとするアシュアを、ピコルが止めた。

「アシュア、明日もまた［セカイイチ］、お願いね♪」

「もう勘弁してくださいよぉ～、こうして夜な夜な食糧庫から［セカイイチ］を持ってこさせるのは～」

「起きろおおおおぉぉぉ！朝だぞおおおおぉぉぉ！」

ギルドの朝は、この言葉で叩き起こされることから始まる。キロットはもう慣れたというが、スバルはまだ慣れず、頭痛と一緒に大広間へ向かうことになる。ゴゾ曰く、ラドイルの大声を洗顔代わりだと思えば気持ちよく目が覚めるとのことだが……どう脳内変換してもあの大声は洗顔にならない。

「スバル、いよいよボク達も本格的な修行スタートだね！」

キロットはすでにうずうずしている。

この日が来るまでの七日間は激しく地獄に等しかった。ゴゾと一緒に行ったお遣い同然の依頼から始まり、例の大声で依頼人を気絶させる羽目になってしまったラドイルとの救助。

三日目はキマワリのジオーネと救助――こっちを見るなり「きゃー！カワイイですわー！」と抱きついてきたことは正直今すぐ忘れたい。

親子で弟子入りしたというダグトリオのシーザとディグダのマミタとの救助は、遭難した依頼人を探すよりもサボったシーザを探す方が何倍も苦労した。

不気味の代名詞と称されるグレッグルのボルリドとの依頼は……この時だけお遣いでよかったという感想だけにしておこう。

六日目はラドイルに負けず劣らず野生児であるヘイガニのビジックが騒がしいせいで幼い依頼人は泣き出すし、最終日はわざわざ編成所を休んでまで同行してくれたチリーンのメルに、何故かビジックがデレデレしながらついてくるという珍事が起こった。

こうして、「チーム・スピリッツ」の慌ただしい研修は幕を閉じたのである。

「ひとーつ、仕事を絶対サボらなーい！」
「ふたーつ、脱走したらお仕置きだ！」
「みっつー、みんな笑顔で明るいギルド！」

朝礼の締めくくりである誓いの言葉を終えた後、スバル達はアシュアに連れられ、依頼掲示板のある地下一階へ向かった。今日も相変わらず、個性豊かな探検隊達が掲示板とにらめっこをしている。

「さて、まずは七日間の研修ご苦労様♪もうこのギルドには慣れただろう？」
「……はい、慣れましたよ（いろんな意味で）」
「それはよかった♪じゃあ早速依頼をこなしてもらいたいところだが……まずは、ここにある二つの掲示板について説明しようか」

アシュアは一つ咳払いをすると、ギルドの階をつなぐ梯子を目の前にして左手、「探検隊Q&A」というものが書かれた看板がある方の掲示板を翼で指し示した。

「あの掲示板は、主に救助や探検同行要請の依頼が張られている掲示板だ。お前達がこなした研修の依頼も、あそこから取ってきたものだ」

ハードな依頼が来ることはあまりないため、駆け出しの探検隊がこなすのにもってこいな依頼が張られているのだという。言われてみれば、その掲示板に集まっている探検隊のほとんどが、こんな言い方は失礼だけどあまりキャリアがなさそうに見える。
簡潔に説明を終えたアシュアは、次に反対側の掲示板を指差した。

「そしてこちらの掲示板は、『お尋ね者掲示板』とも呼ばれている。悪さをしたポケモンの指名手配所が張られているのだ」

「指名手配所……ってことは、そのポケモンを捕まえてくるってことですか？」

答えにうすうす感付いているのか、アシュアの返答前にキロットは少し怯えていた。そんなキロットの様子にも気づかず、アシュアはニコニコして答えた。

「そうだよ♪でもお前達は新入りだからねぇ。いきなり極悪犯罪者を捕まえて来いだなんて鬼みたいなことは言わないさ♪今日は普通の依頼をこなしてもらうからね」

ただし、その前に。とアシュアは念を押すように言った。

「研修と違って、食糧等の道具はお前達が用意するんだよ。この近くに『トレジャータウン』という冒険準備の街があるんだが……まさか知らないということはないよね？」

そう聞かれ、スバルは少し焦った。ただでさえ記憶喪失なのに、土地勘は限りなくゼロに等しい。ここで「『トレジャータウン』？それ何ですか？」なんて言ってしまったら、絶対怪しまれる。

しかし、こんな時こそのパートナー。キロットは機転を利かせて、前に進み出た。

「大丈夫です。ボク、このギルドに入る前はこの町のはずれに住んでましたから」

「おぉ、それならよし♪じゃあさっさと準備してくること！」

アシュアに必要以上に急かされ、スバル達は一路、「トレジャータウン」へ向かった。

「……なかなかいいアシストだったでしょ？」
「グッジョブだぜ、キロット」

冒険準備の街、「トレジャータウン」。
「アナザー」最大の大陸の極西に位置するこの街は、近くにギルドがあるおかげか、探検隊のための施設が豊富な場所である。カクレオン兄弟が営む商店を始め、ガルーラが管理する倉庫、ヨマワルが経営する銀行などといった基本的な施設の他、連結店や訓練所といった上級探検隊御用達の施設もあった。それら全てに関するキロットの説明も交えて、スバル達は今日の仕事の準備を整えていった。

「研修でいくらか道具は集まったけど……食糧が足りないね。カクレオン商店へ行ってみようか」

銀行に持ち金の半分を預金した後、キロットが提案した。カクレオン商店は、様々な施設が軒を連ねるメインストリートをずっと行った先の右手にある。そこでは食糧、装備品などを扱う兄と、技マシンなどを扱う弟が二人並んで商売に精を出している。

「おっ、そこにいるのはキロット君じゃないかい？」

二人のうち、緑色の肌をしたカクレオンがキロットに気付いた。キロットが気軽に挨拶したことから判断すると、どうやら顔見知りのようである。スバルに気付いたのは、バラ色の肌をしたカクレオンの方だった。

「あれ、そちらの方は……この辺のポケモンじゃなさそうですねぇ」
「彼はスバル。ボク達、探検隊を結成したんですよ」

スバルはとりあえず、ペコリと一礼だけしておいた。カクレオン兄弟は人柄がよく、スバル達の探検隊結成を祝福してくれた。そのお礼も兼ねて、［リンゴ］を三個購入したスバル達。すると、ギルド方面の道から二人のポケモンが駆けてきた。

「すみません、［リンゴ］一つください！」

そう言って料金を差し出したのは、みずねずみポケモンのマリル。隣には進化前であるルリリが立っている。おそらく兄弟か何かだろう。疑問の意味が混ざったスバルのアイコンタクトに気付き、キロットが小声で教えてくれた。

「あの兄弟、マリルの方がキュオで、ルリリの方がキアっていうんだけど、お母さんが病気らしくてね……それで、いつも兄弟そろって買い物に来てるんだって。何度かボクも見かけたことがあるんだ」

「ふぅん……」

見た感じ、まだ幼そうだ。健気な子達だな……スバルはそう思った。

「おぉ、キュオちゃんにキアちゃん。申し訳ないねぇ……［リンゴ］は今売り切れたばかりなんだよ」

「えぇっ、そんなぁ……」

どうやら、スバル達が買ったのが最後の三つだったらしい。がっくりとうなだれるキアを、仕方ないよと言いながら撫でるキュオ。そんな二人の様子を見、スバルはしばらく考えた後、袋から先程買った［リンゴ］を一個取り出し、キアに差し出した。

「えっ？これって……」
「あげるよ」
スバルにそう言われ、キアが飛び跳ねて喜びながらそれを受け取ろうとするのを、キュオが慌てて止めた。
「ダメだよキア、そんなすぐにもらっちゃ！……あの、すみません。お金……」
「いいって。在庫切れになったのはオレ達のせいなんだから。今すぐ必要なんだろ？」
キュオはまだ躊躇っている。手渡すことができないため、スバルは［リンゴ］をキアの頭の上に乗せてあげた。その時、
「うっ――――――……！」
眼球の奥が重くなるような感覚がスバルを襲った。眠気……ではない、目眩だろうか？目に映るものすべてが渦巻きのようにグニャリと曲がり、視界が徐々に暗くなっていく。
そして完全な黒一色になった刹那、それを横切るように一筋の光が迸った。
――――――――た、助けて……っ！
悲鳴のような声と共に映ったのは、涙でぐしゃぐしゃになった怯え顔。その顔がキアのものだと分かった瞬間、スバルの視界が一気に開けた。
「……あの、どうしたんですか……？」

まず見えたのは、キアのキョトンとした顔。怯えている様子など微塵も見えない。その頭には、スバルの乗せた［リンゴ］がバランスよく乗っかっている。

「――――あ？い、いや！なんでもない、なんでもないぜ？」

不自然に取り繕っているあたり「なんでもない」ようには見えない。それでもそんなに気にしない性なのか、キアは兄に早く行こうよと急かしている。キュオは長らくペコペコとお辞儀し、キアを連れて来た道を引き返していった。

「スバルさんって、いいヒトなんですねぇ～。ワタシもう感動しちゃいましたよ～」

カクレオン兄弟に至っては、スバルの様子にも気づかず拍手して褒め称えている。キロットもニコニコしているし、街の人たちも普通に振る舞っていることから判断して、先程の悲鳴はスバルにしか聞こえなかったのか、あるいは空耳だったのだろうか？

それでも念のため、スバルは悲鳴の件についてキロットとカクレオン兄弟に聞いてみた。

「悲鳴？……ボク、全然聞こえなかったけど」

「ワタシも」

「ワタシも聞こえませんでしたよ～？」

やはり、気のせいだったのだろうか？しかしどちらにせよ、これだけは言える。

「（あの悲鳴……間違いない。キアの声だ……！）」

「スバル！」

キロットに肩を叩かれ、スバルは我に返った。

「何ボーっとしてんの？らしくないなぁ。早くしないとアシュア先輩に怒られるよ？」

別に急ぐことではないと思うのだが、キロットはそそくさと走って行ってしまった。スバルもカクレオン兄弟に会釈し、［トレジャーバッグ］をしっかりと閉じて、ギルドへと足を運んだ。

「あれ、あの子達だ……」

キロットがはたと足を止める。ギルドの続く道の途中にある広場。その一角で、キュオとキアが一人のポケモンと話していた。ずんぐりとした身体に、長い鼻を持つ、さいみんポケモンのスリープだ。穏やかに笑ってキュオ達に何かを話し、キュオ達はそれを聞いて大喜びしている。

「あ、さっきのお兄ちゃんたちだ！」

キアがスバル達に気付き、こちらにやってきた。キュオもそれに続き、さっきはありがとうございましたとまたお辞儀する。スリープと目が合うと、先程と変わらない笑みのまま挨拶してきた。

「キミ達、どうしたの？」

「あの、ぼく達、以前から落とし物を探していたんです。失くしてから一か月、手あたりしだい探したけど見つからなくて……」

諦めかけていた時、キュオ達の落とし物を見たというスリープに出会ったのだという。

「ホントにありがとう、エディックさん！」

「なんの、お安いご用ですよ。困っている子を見かけたらほっとけませんからね」

エディックと呼ばれたスリープは、キアのお礼に笑顔で答えた。誰かに盗られてしまう前に早く行こうと、キュオとキアはエディックと共にギルド方面の道へ向かおうとすると、

「痛ってぇ！」

歩き出したエディックの足が、スバルの足を（思い切りというわけではないけれど）踏んだ。約三十キロの重みが、スバルの足にのしかかる。

「うわっ、ご、ごめんなさい！大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈……」

「大丈夫」が終わらないうちに、今度は眼球がずしりと重くなった。さっきの目眩と似ているが、今度は一気に目の前が真っ暗になり、またあの閃光が眼前を横切った。

———言うことを聞かないと、痛い目に遭わせるぞ！

———た、助けて……っ！

一つ、誰かのセリフが増えている。ぼんやりと映し出された映像には、さっきも見たキアの怯え顔。そして、

ものすごい剣幕で怒鳴っている、エディックの姿があった。

「――――――あ？」

スバルが我に返った頃には、すでにエディック達の姿はそこになかった。おそらくすでに連れて行ってしまったのだろう。いてもたってもいられず、スバルはキロットの腕を引っ掴むと、ヒト気のない林の中まで引っ張っていった。

「ち、ちょっとスバル！どうしたの？」

「しーっ、大声出すな！」

一先ずキロットを黙らせた後、スバルは先程見た映像のことをキロットに話した。目眩がして見た映像の中で、エディックがキアを脅していたこと。その現象もその内容も、キロットを驚かさないわけがなかった。

「そ、その話……本当なの？」

「嘘だったらここまで連れてきて話すわけねぇだろ？」

「う、うん。だけどさ……」

キロットは腕を組み、困った表情を浮かべた。

「別にスバルのこと、疑ってるわけじゃないけど……エディックさん、すごく親切そうだったじゃない。パッと見、嘘つくようなヒトには見えなかったなぁ」

「いや、それはオレだってわかってるよ。でも……」

「多分、スバルは疲れてるんじゃないかな？毎朝ラドイル先輩に叩き起こされっぱなしだったんだし。寝不足で変な夢でも見たのかもしれないよ？」

夢……か。寝ないで夢を見ることなんてできないと思うけれど、今思えば感覚は夢そのものだったような気もする。それに、疲れているというのも半分事実だ。キロットの仮説も一応筋は通っている。

「それに、ボク達はギルドで修業中の身なんだから勝手なことはできないよ。さ、早くギルドへ戻ろう！」

キロットに促されて、モヤモヤしたしこりのようなものを残したまま、とりあえずスバルはギルドに戻ることにした。

朝ほどではないが、ギルドの地下一階は未だに大勢のポケモン達で賑わっていた。まだ掲示板を見ている者もいれば、すでに依頼を済ませ、依頼主からお礼をもらっている者もいる。準備ですっかり時間を使ってしまったので、スバル達はなるべく早めに依頼を選ぼうとした。

「おっ、スバル、キロット！」

後ろから声をかけてきたのは、ゴゾだった。これから仕事に行くのか、背中に［トレジャーバッグ］を背負っている。

「その様子だと、依頼選びの真っ最中でゲスね？」
「はい。どの依頼にしようか、なかなか選べなくて……」
「コホン、それならあっしに任せるでゲス。まだこっちの出発には時間があるし、ピッタリの依頼を選んであげるでゲスよ」
「わぁ！じゃあよろしくおねがいします！やったね、スバル……
…」

キロットが顔を向けても、スバルは全く反応しなかった。ただずっと、口をあんぐりと開け、体をわなわなと震わせながら「お尋ね者掲示板」を見上げている。

「スバル、どうしたの？ここそんなに寒い？」

「き、キロット……アレ、見てみろよ……！」

スバルが指差す先を慎重に目で追い、やがて「お尋ね者掲示板」に到達した途端、キロットは息をもろに飲み込んでしまった。

そこに張られている一枚の指名手配所に、スリープの顔が大きく描かれていたのだ。しかもその下に、「悪党　エディック」の文字、さらに前科であろう犯罪名がつらつらと書かれていた。

「あ、アイツ、お尋ね者だったんだ！」

「え……じゃあ、スバルが見た夢って……事実だったの？」

スバルは反射的に駆け出し、這い上がるように地上へと続く梯子を上っていった。キロットはまだ混乱していながらも、スバルの後を追う。

「ほら、この依頼なんかどうでゲスか……って、あれ？」

一枚の依頼状を持ったゴゾが振り返った先に、「チーム・スピリッツ」の姿はもうなかった。

第七話　修行――――不思議な夢（後書き）

残りの研修は地の文でさらさら～っと流しちゃいました＾＾；
書こうかなとも思ったのですが、流石に七日分書くと
紀は返事のないただの屍と化します（↑

あとこれだけは叫ばせてください。

ルリリ（この小説ではキア）って、性別どっちなんですか！？

第八話　討伐――心を読む悪党（前書き）

っしゃあああ！８ページいったあああぁぁぁああ！

……はい、なんだか無駄に長いです。注意。

第八話　討伐――――心を読む悪党

ギルドと交差点をつなぐ長い階段を飛び下りるように降りていくと、ちょうど交差点にキュオが立っていた。両手を輪のようにして、誰かを呼んでいる。その時僅かだが、街の外へと続く門のあたりに、エディックとキアの姿がちらりと見えたような気がした。

「あ！さっきの探検隊さん……」

息を切らしながら走ってくるスバル達に、キュオが気付いた。

「キュオ、大丈夫か？怪我とかは……」
「ぼ、ぼくは大丈夫です。でも、キアが……」

スバルは門の方を見た。すでにエディックとキアの姿は見えない。スバルはこれまでの経緯をキュオに聞いた。

「落し物がこの交差点にあるって教えてもらって、エディックさんの提案で三手に分かれて探してたんです。そしたらエディックさんが、キアを連れてあっちに行っちゃって……」

キアを誘拐するために、キュオの気を逸らさせたということか。スバル達はとりあえず弾む息を整えると、再びエディックの後を追って駆け出した。

キュオの驚異的な聴力でかすかに聞こえるキアの声を辿っていくと、切りたった山に辿り着いた。大きな山がトゲのような形をしていることから、「トゲトゲ山」と呼ばれている山だ。草木の一本もない入口に、何か赤い物が落ちている。キロットがまず近くまで行き、それを拾い上げた。

「これ、あの時スバルがあげた［リンゴ］じゃない？」

値段と今日の日付が書かれた値札がついている。決定的とは言えないが、キアがここに連れてこられたという可能性が浮かび上がってきた。さらに、

「キアの声……この山から聞こえます！さっきよりハッキリと！」

そう言ったキュオの顔は、スバルが夢で見たキアのように涙で濡れていた。目的は不明だが、それが何であれ誘拐は許されるべき行為ではない。スバルとキロットは顔を見合わせて頷くと、一先ずキュオに「トレジャータウン」に戻るように指示し、早速「トゲトゲ山」へと突入した。

「キアの奴、無事だといいけどな……」

岩陰から顔を出して、敵がいないことを確認してから、徐々に上へと登っていくスバル達。「トゲトゲ山」は岩以外に身を隠す場所がなく、比較的遠距離攻撃できるポケモンが多く生息しているため、下手すると周囲から一方的に攻撃される羽目になってしまうのだ。キアも心配だが、自分たちの身もまた然りである。

「……スバル、ごめん。あの時ちゃんとスバルの言うことを聞いてれば……こんなことには……」

キロットが俯きがちに歩きながら呟くように言った。さっきから元気がないと思ったら、こういう理由だったのか。スバルは一瞬キョトンとした後、軽く笑い飛ばした。

「何言ってんだよ。あんな変な夢、信じないのがふつう当たり前だろ？」
「で、でも……」
「ま、結果的には夢の通りになっちまったけど。今更あの時こうしてたらなんて言ってもどうにもならないぜ？さっさとエディックをとっちめて、キアを助ければいいだけの話じゃねぇか。な？」

どうやったらそんなに楽観的になれるんだろう。そう思いながらも、キロットは気を持ち直して頷こうとした。しかし、

「キロット、右！」

叩かれたようにその方向を向くと、何かが坂を転がってくるのが見えた。その正体がイシツブテ、しかもまっすぐキロットの方へ向かってると分かった瞬間、悲鳴を上げる暇もなく、キロットは反射的にそのイシツブテを尻尾で打ち返した。
ガキン！という音を立てて、イシツブテは丸まった状態のまま遠くへふっとばされてしまった。ただ尻尾で打ち返しただけではないということは、キロットの光り輝く尻尾を見るだけでも明らかだった。

「キロット、今のって……」
「え？……あぁ、これ？“アイアンテール”だよ。小さい頃、お父さんから教えてもらったんだ」

スバルはつくづく疑問に思う。このピカチュウ、純粋なヘタレなのか、「能ある鷹は爪を隠す」気取りで振る舞っているのか。
キロットの意外な一面を垣間見はしたが、その後は特にピンチというピンチには陥らなかった。敵が遠距離攻撃を使ってくるなら、

こちらも遠距離攻撃とスバルは“バブルこうせん”で敵を蹴散らしていく。そして七日間の研修の成果なのか、キロットも以前のように怯えることなく、落ち着いて敵を倒せる程度に成長していた。……これはあくまでスバルの観察であって、キロット本人は無論自覚はしていないのだけれど。

今日は空が曇っているので、日を見ても時間がどのくらい経過したのかはわからない。技を一発当てて敵を倒せるくらい強くなったことを確認すると、時間短縮のために極力敵は無視しながら、スバル達は着実に頂上へ登りつめていった。

所変わって、「トゲトゲ山」山頂――――――

「……あれ？エディックさん、ここ何もないよ」

山の頂上に落し物があったことを思い出したと言われ、キアはエディックに連れられて山頂までやってきた。しかし、辺りを見回しても、岩陰を除いてみても、落し物はおろか何も見つからない。

「そりゃそうだろう。ここに落し物があるわけない。なんせ、俺は見てないからなぁ」

エディックの目は、笑っていなかった。さっきと全然話が違うということくらい、いくら幼くともキアには分かっていた。それに、後で来るはずだった兄も、まだ来ていない。

「……お兄ちゃんは？後で来るんじゃなかったの？」

「ハハハッ、まったくガキを騙すのは容易いことだぜ。ヒトを疑う知恵なんざこれっぽっちもないんだからな」

ようやく笑顔を見せても、それは広場で見かけた穏やかなものではなく、悪意がひしひしと伝わってくるものだった。キアは後ずさりしかけたが、後ろに逃げようとしてもそそり立つ壁が立ちはだかる。

「……え、エディックさん……」

「なぁに、怖がることはないぜ。ちゃんと俺の言うことを聞いてくれたら、お兄ちゃんのところに帰してやるからさ」

エディックが指差したのは、壁にぽっかりと空いた洞窟のようなものだった。洞窟と言っても、規模はかなり小さい。せいぜい入口は直径三十センチほどといったところだろう。

「あの穴の向こうには、大昔に盗賊が隠した宝があると噂されてんだ。見ての通り小さいから、オレじゃああの中に入れねぇ。だから、体の小さいお前に取って来てもらおうとここに連れてきたんだ」

エディックの説明の八割くらいは、キアの耳に入らなかった。ただただ湧き上がる恐怖感がキアの耳を塞ぎ、足を竦ませる。

キアがもたもたしていることに痺れを切らせたのか、エディックは唐突にキアの足元に向けて“サイケこうせん”を放った。爆風が起こるほどの激しいものではなかったが、地面に残った焦げ跡が、キアの恐怖心をさらに煽らせる。

「そんなところでガタガタ震えてねぇで、早く財宝を取ってこい！言うことを聞かないと、痛い目に遭わせるぞ！」

「た、助けて……っ！」

依然としてキアは震えるばかり。エディックは舌打ちをすると、再び“サイケこうせん”の構えをとった。

「や、やめろおおおおぉぉぉ！」

突如として一瞬の閃光が、“サイケこうせん”を放とうとするエディックの腕を貫いた。エディックは悲鳴を上げながら腕を抑え、睨みつけるように後ろを振り向く。

「よっしゃ！上出来だぜ、キロット」

「う、うん……」

隠れて様子をうかがっていたスバルとキロットが、岩陰から姿を現した。ペンダントのように首にかけてある［探検隊バッジ］、そして［トレジャーバッグ］を見て、エディックはこの二人が探検隊であることを確信した。

「な、な、お前等……なぜここがわかったんだ…？」

「し、しょうもないこと企んで、こ、こ、子供誘拐した奴に、お、教える義理なんか、な、なな無いぞっ……！」

棒読み且つ半ばどもりながら叫ぶキロットを見て、エディックが拍子抜けしないはずがなかった。隣のポッチャマはまぁ別にいいとして、あのピカチュウの口調と言い覇気のなさと言い――――と、あれこれ推察して確信に辿り着き、エディックは勝ち誇ったようにニヤリと笑った。

「そうか、お前達探検隊と言ってもまだ新米だな？［お尋ね者捕まえたことないオーラ］が見え見えだぜ」

「す、スバル、バレてるよ！」

「お前があからさまにガタガタ震えてるからだろ！」

カッコよくキメてやるという思惑が総崩れである。エディックは指をパキパキと鳴らしながら、徐々にスバル達との距離を詰めていく。恐怖でキロットは後ずさりをしかけたが、思い直して四肢を踏ん張った。

「やれやれ、今まで多くの探検隊に出くわしてきたが……ここまで頼りなさげな奴等は初めてだよ」

「…何とでも言いやがれ。新米探検隊に捕まるっつー末代まで続く恥をかいてもらうぜ！」

叫ぶ勢いに乗って、スバルは今までよりずっと威力の高い“バブルこうせん”を放った。エディックも“サイケこうせん”を放ち、相殺させることで回避する。二つの光線がぶつかり合い、一瞬の爆発、そして巻き起こる砂埃を突き破るようにスバルが第二派の“バブルこうせん”を放つが、砂煙で見えないはずなのに、エディックは身を捩っていとも簡単にそれをかわした。

「そこのピカチュウ君は［いしのつぶて］でも投げるつもりかな？」

「えっ？」

キロットは驚きのあまり、［トレジャーバッグ］に伸ばしかけた手を慌てて引っ込めてしまった。エディックの言う通り、キロットは少しでもダメージを与えようと［いしのつぶて］で攻撃しようとしていたのだ。先に記したとおり、辺りは爆発が起こした砂煙で視界が悪い。互いの姿も見ることができないはず。それなのに、エディックにはまるでスバル達が見えているかのようである。

「さてどうするんだ？もう一度“バブルこうせん”でも放つかい？」

「……じゃあ、お望みどおりにしてやるよ！」

相手の“ちょうはつ”が癇に障ったのか、スバルが再び“バブルこうせん”を繰り出す。するとエディックは、巨体に似合わないほど身軽に大ジャンプをし、スバル達の頭上を飛び越えた。着地ざまに振り向き、その腕から“サイケこうせん”が放たれる。

「マズい！キロット、避け……！」

背後をとられたと察したスバルが叫ぶが、その言葉が切れないうちに“サイケこうせん”が二人の足元に直撃した。地面から突き出すような衝撃波がスバル達を宙に弾き飛ばす。放物線を描き、頭から地面に激突し目から火花が出た。

「ぐぅっ！……くそっ、やりやがったな……！」

腕に力を込め、反動で跳ね上がるように飛び起きるスバル。しかし、真っ赤に光るエディックの目を見た瞬間、足が作り物であるかのように感覚がなくなり、着陸するはずが今度は顔から地面にぶつかった。

「なっ……何しやがった……？」

「“かなしばり”。目を合わせた者の感覚をマヒさせる技だ。俺は今までこの技を使って、追っ手である探検隊を退けてきたんだ」

確かに、足はおろか手もゴムでできているように力が入らない。動かすことができても地面をこする程度。スバルは上目づかいでエディックを睨みつけた。

「す、スバル、大丈夫？」

恐る恐る話しかけてきたキロットは、どうやら“かなしばり”の

影響を受けていないようである。スバルはそれに気付くなり、苛立ちも混ざった声で怒鳴った。

「オレのことはいいから！こっち気にしてる暇があるんだったらさっさとアイツをとっちめてくれ！」

「えっ……でも、アイツは……」

「その通り。俺にはどんな技を放っても全く意味がないぜ。分かってんだろうな？」

少なくともキロットはそれに気付いていた。ポケモンが個々に備えている「特性」――その内、スリープの一族は「よちむ」という特性を持っている。相手の心を探り、次に放つ技を予知することができるのだ。こちらが何をしかけようとしても、すぐにエディックに読み取られて避けられるのが関の山である。

それでも、キロットは必死に作戦を考えていた。スバルがマヒ状態で動けない今、満足に戦えるのは自分だけ。目の前の敵は逃げることなく、相手が弱いと思っていて勝負を仕掛けてきている……

――――その考えが、間違っていることを証明しなくちゃ！

「“でんこうせっか”！」

地面を蹴って、キロットは流星のような速さでエディックに向かって突進していった。しかし、エディックはそれさえも読み取り、とびかかるキロットを“はたく”で地面に叩き落とす。

「うあ！」

呻き声と叫び声を足して二で割ったような声を上げて、キロットは仰向けに倒れてしまった。当たり所が悪かったのか、目を回して気絶している。

「やれやれ、ド低能過ぎて退屈になってきたぜ。そろそろ減らず口叩けない程度に叩きのめしてやろうかな」
「どっちが。少なくともテメェよか知能指数三十くらいは上だって自負してるぜ」

マヒしていながらも、スバルは屈することなく不敵に笑った。この言葉には流石のエディックも堪忍袋の緒が切れ、スバルを木っ端微塵に吹き飛ばそうと“サイケこうせん”の構えをとろうとする。その時、

「なっ……？」

持ち上げかけた腕が空気が抜けたように下がり、エデッィクは俯せに倒れてしまった。スバルと同じように、起き上がろうとしても手足に全く力が入らない。要するに、マヒ状態になってしまったのだ。

「ど、どうしてだ……？」
「何も特性はお前だけにあるもんじゃねぇぜ。キロットにだって『せいでんき』っつー特性があるんだよ！」

触れた相手を身にまとった電気でマヒさせる特性「せいでんき」。本人はここまで作戦を立てていたかどうかは定かではないが、疾風のようなスピードで相手に体当たりをする“でんこうせっか”を繰り出した場合、“サイケこうせん”を放とうとしていては間に合わないので、エディックの行動の選択肢は自動的に弾き飛ばすか避けるかの二択に決められる。
避ければまだエディックに勝機はあったものの、自分はこの探検隊に負けるわけがないという過大な自信があったからこそ、相手に

触れる技“はたく”でキロットに攻撃をしてしまった。そしてマヒ状態に陥ったという、自分から落とし穴に突っ込むような結果になったのだ。

とはいえ、こちらもマヒ状態になっている以上、動けないのでエディックを取り押さえることができない。キロットは依然として気絶している。両者が文字通り一歩も動けない状態のまま、時間ばかりが過ぎていった。すると、

「オ尋ネ者発見！オ尋ネ者発見！大至急、身柄ヲ確保セヨ！」

静寂を打ち破ったのはけたたましいサイレンと、ロボットのような感情のない声。振り向くと、数人のポケモン達が、スバルの頭上を越えて通り過ぎて行った。

「アナタ達、見タトコロ探検隊ノヨウデスネ、大丈夫デスカ？」

一人だけ通り過ぎずに目の前に降りてきたのは、ＵＦＯのような形をしたじばポケモン、ジバコイル。よく見ると、通り過ぎて行ったポケモン達は全員、部下であろう進化前のコイルだった。強力な磁場でマヒしているエディックを持ち上げ、「トゲトゲ山」の麓まで運んでいく。マヒで動けないので大丈夫というわけではないが、傷も大したことはないのでとりあえずスバルが頷くと、ジバコイルは喜ぶように腕の磁石を点滅させた。

「ソレハヨカッタ。私ノ名ハせふぇる。『とれじゃーたうん』ノ保安官デス。きゅおトイウ子ノ通報ヲ受ケテ駆ケツケマシタ」

「お、お兄ちゃんから？」

いつの間にか、キアがこちらまで走ってきていた。目立った外傷もないことが、スバルを安心させた。さらに、

「イテテテ……スバル、何があったの？」

キロットも意識を取り戻し、駆け寄ってくる。スバルはセフェルからもらったマヒ治しの効果がある［クラボの実］を齧りながら、キロットが気絶してからの経緯を短く話した。案の定、自分の特性がエディックの捕まえるきっかけとなったことなど、キロットは予想もしていなかったらしい。いや、予想していなかったからこそ、エディックの「よちむ」で読み取られることがなかったのかもしれない。

［トレジャーバッグ］に入っていた［オレンの実］で活力を取り戻し、エディックの引導を任せた後、スバルは到着先をギルド前の交差点に設定して、キアと共に［探検隊バッジ］で脱出した。事前に交差点で待つようにと、キュオに言っておいたのである。

「お！ほら、スバル達が戻ってきたぞ♪」

地面に降り立って初めて聞いた声は、アシュアのものだった。交差点にある水飲み場で、アシュアがキュオと並んで立っている。彼の性格からして考えにくいけれど、泣いているキュオを慰めていたのだろうか。うつむいていたキュオはふと顔を上げ、キアの姿を目にするなり、キアよりも早く糸が切れたように駆けだした。

「キア、キア！」

「お兄ちゃああああぁぁぁん！」

キアはキュオに飛びつき、小さな体に相応しくない大声でわあわあ泣き出した。こうして二人を見ていると、ヒトを助けて何も悪いことはないということを改めて実感できる。もらい泣きなのか、キ

ロットも大人気なく顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。
「キアを助けていただいて……本当に、ありがとうございました……うぅ……」
弟の前で泣くのはやはり恥ずかしいのか、口を引き結びながらお礼を言うキュオ。すると、何かを思い出したのか、キアが泣き顔のまま駆け寄ってきた。
「あの、ポッチャマさん……」
「…えぇと、名前言ってなかったな。オレはスバル。そんでこっちの泣いてるピカチュウがキロットって名前だ」
「ち、ちょっと、『泣いてる』は余計だよっ！」
「じゃあ、スバルさん……ごめんなさい。あの時もらった［リンゴ］、落としちゃった……」
「［リンゴ］？あぁ、それなら大丈夫だぜ。ほら」
スバルは［トレジャーバッグ］から、「トゲトゲ山」入り口で拾った値札付きの［リンゴ］を取り出し、カクレオン商店前の時のように頭に乗せてあげた。無論、またキアが手放しで喜んでくれたのは言うまでもない。
兄弟は姿が見えなくなるまで、何度も振り返って手を振りながら自分達の家に帰っていった。気付けばもう夕暮れで、茜色の空が何物にも形容しがたいほど美しい。そうして感慨に浸っていると、目の前に巾着袋が姿を現した。
「お前達、今日はよく頑張ったな♪掲示板の依頼じゃないから何かペナルティでもつけてやろうかと思ったが……お尋ね者を倒し、幼いポケモンを助けたんだ。お咎めなしということにしておこう♪」
「……はぁ。それで、その巾着袋ってやっぱり……」

「セフェル保安官から頂いたお尋ね者の賞金だ♪さて、中身は三千ポケだから……」

アシュアはいつになく楽しそうに翼を巾着袋に突っ込むと、中から三枚の硬貨を取り出した。三千ポケの一割、つまり三百ポケである。

「やっぱこのくらいしか貰えないんですかぁ～？」

「当たり前だ♪いくらお尋ね者だからって区別なんてことはしないぞ。明日もこの調子で頑張れよ♪」

死ぬ気で頑張って依頼こなしたのに報酬の九割も取られては、いくら「頑張れよ」と励まされても、正直気が滅入るだけである。

毎晩恒例の戦争のような夕食を終え、そろそろベッドに入ろうかという頃になって、季節外れの嵐が「トレジャータウン」を襲った。キロット曰く、海岸でスバルが倒れていた日の前日も、この地域は嵐に見舞われていたという。雨水が入ってこないように木の皮を編んだザルのようなものを窓に取り付け、ようやくスバル達は寝床に着くことができた。

「ふぅ、今日もやっと一日が終わったね……」

キロットはベッドの上で仰向けになり、大きく背伸びした。

「まぁ、今日はお前の活躍でお尋ね者も捕まえられたんだし、よかったじゃねぇか」

「エヘヘ、そうだね」

「だけど、ここぞという時にガタブル震えるそのクセ、なんとか治

せないのかよ？」
「うっ……うん、努力するよ」

すでに寝ているであろう先輩達を起こさないように、スバルとキロットは小さく笑った。
明日も早いからとキロットは早々に寝てしまったが、スバルはまたいろいろと考え事をしていた。ようやく身体を休める時になると、頭が冴えるのだろうか。原因はともかくとして、疑問の内容はもちろん、昼間見たあの夢のようなものだった。キアに［リンゴ］を渡した時、そしてエディックに足を踏まれた時……シチュエーションは違えど、目眩が起こって夢を見ることはどちらも変わらなかった。そしてその内容――「トゲトゲ山」で見た、エディックがキアを脅しているシーン、あれがそのまま夢となって映し出されたのだ。未来の出来事を映し出す夢……これもまた、自分の過去に関係があるのだろうか？

「（……ダメだ。いろいろ考えると、また眠れなくなっちまう……）」

明日もラドイルの大声で起こされるからには、これ以上睡眠時間を削るわけにはいかない。所詮は夢だ。偶然か何かだろ。そう勝手に結論付けて、スバルは藁葺きベッドに顔をうずめた。

――その数日後、「トレジャータウン」に雨を降らせていた雲は次第に北上し、大陸北東にある広大な森にその拠点を移した。世間では「キザキの森」と呼ばれているこの森で、一つのヒト影が今、動き出す。
「時の乱れ」で理性を失ったポケモン達が、ヒト影に危害を加えようと我先に襲いかかる。ヒト影は慌てることもなく、身にまとっ

た深緑色のローブの袖から光り輝く刃を出して敵を片っ端から切り伏せていった。迷うことなく、むしろ何かに引き寄せられるかのように、森の奥地へと進むヒト影。その強靭な足は、森の奥地に着いた瞬間、はたと止まった。

青緑色に光り輝く結界に守られ、重力に逆らって宙に浮かぶ、歯車のような形状をした石。ヒト影の狙いはそれだった。ヒト影はしばし、その神々しさ、近寄りがたい美しさに見とれていた。しかしすぐにその思いも封印し、代わりに心の中に残した決意をその目に映して、宙に輝く歯車へ手を伸ばす。

次の瞬間、「キザキの森」は死んだように静まり返った。雨が止んだのではない。雨水がそのまま、降り注ぐような形で固まってしまったのだ。非現実的な言葉で言い切ってしまうのなら、「時が止まった」――と言うべきであろう。

時が止まった「キザキの森」を切り立った崖の上から見下ろし、ヒト影は一瞬、自身が奪った歯車を、その手の中で握りしめた。

第八話　討伐――心を読む悪党（後書き）

……結局悩みに悩んだ挙句、ルリリは弟ということになりました。
感想にて意見を出して下さった皆様に感謝します。

第九話　探検――――秘密めく大きな滝（前書き）

最近ちょっと展開が早いかなという気がしないでもない。
オリスト入れたいなぁ……でもそれを考える活力すらリアルに奪われる毎日。

第九話　探検――――秘密めく大きな滝

初めての本格的な仕事でお尋ね者を捕まえたという手柄を皮切りに、「チーム・スピリッツ」はここ数日にわたって、お使いからお尋ね者逮捕に至る様々なジャンルの依頼をこなしていった。毎日の過酷な修行にも弱音を吐かない二人の働きぶりは、一番弟子のアシュアを始め弟子のほぼ全員が舌を巻くほどだった。忍耐強い弟子でも、たった数日でここまで依頼をこなす人材はなかなかいないのだという。

さて、「チーム・スピリッツ」がギルドに入門して三週間目の朝。この日は、いつものラドイルの大声――――ではなく、鳥ポケモンの羽ばたく音で目が覚めた。窓から外を覗くと、大勢のペリッパー達が慌ただしく飛んで行くのが見えた。音の原因は恐らく彼等なのだろうが、それにしてもこの数は異常だ。何かあったというのは間違いない。

「おろ？なんだ、お前らもう起きてたのか」

スバルを起こしに来たラドイルが、呆気なさそうに声を上げる。本人としては普通に喋っているのだが、いつか記したとおり、スバル達にとってはいつもの大声と変わりないくらいうるさいのである。

「うっ……おはようございます、ラドイル先輩」

「おっす。そうそう、今日の朝礼なんだが、いつもより早めに始めるそうだ。今のうちに布団片付けて、大広間に来るように。わかったな？」

「はい」

やはりただ事ではないようだ。それぞれの心に嫌な予感を覚えな

がら、スバル達は急いで布団を片付け、［トレジャーバッグ］を担いで大広間に向かった。

朝礼前の大広間が賑やかであるということは日常茶飯事だが、今日は特に大賑わいを見せていた。ただでさえアシュアが何回も静かにしろと叫んでも鎮まらないのに、ハリセン脅し（？）のおまけつきでも皆は黙る素振りすら見せない。最終的に“ハイパーボイス”並の大声で強引に黙らせ、ようやく朝礼が始まることになった。

「えー、今日は朝礼の前に、皆に知らせたいことがある」

アシュアが取り出したのは、何かが書かれた一枚の紙だった。

「これは、今朝ペリッパー達が運んできてくれた報告書だ。これによると……今日未明、『キザキの森』の時が……止まってしまったらしい」

えぇっ、とどよめく声。そのまま再びざわつくと思いきや、ビジックの威勢のいい声が響いた。

「時が止まるって……どういうことだよ？ヘイヘイ！」

「むぅ……現実をはるかに超越してるんで、ワタシも何と説明したらいいか分からんが……つまり、風が吹かず、雲も流れず、木の葉から落ちた水滴も地面に落ちずたたずむのみ。『キザキの森』そのものが、まるで時間が止まったように動かなくなってしまったんだ」

アシュアは懐から、もう一枚別の紙を取り出した。

「そしてこれはまだ途中経過なのだが、調査の結果が書かれている。

どうやら『キザキの森』には、［時の歯車］があったらしい。……ここまで言えば、大体皆も察しがつくだろう？［時の歯車］があった「キザキの森」の時が止まったということは……［時の歯車］が、何者かに盗まれてしまったということを意味する」

どよめきよりも強い、驚きの声が方々から上がった。またざわざわと先輩達が騒ぎ出す。その声に紛れて、スバルがまた疑問のアイコンタクトをキロットに送る。

「そっか、これはスバルにも教えてなかったね。［時の歯車］というのは、この世界の時を司る大切なものなんだ。世界のあちこちにあって、その土地の時を守っていると言い伝えられてるんだよ」

世界の時を司るわけだから、それを盗んでしまえばよくないことが起こるということを、この世界に住む者は教えられずとも暗黙の了解という形で知っている。たとえどんなに悪いポケモンでも、［時の歯車］にだけは手を出そうとしないのだという。

キロットの説明がちょうど終わる頃、アシュアが再びギルドメンバーを静めた。

「確かに［時の歯車］を盗むとは常識外れにも程がある。盗んだ輩は相当な世間知らずか、目的があって盗んだのか、そのどちらかだ。……まぁ、その辺は現在調査中なので、何か分かればまた報告が来るだろう。皆不安かもしれないが、今日もいつも通り仕事に励んでくれ」

アシュアの言う通り、ギルドメンバーは不安なはずなのに、心の切り替えは驚くほど早かった。いつも斉唱する誓いの言葉も調子は全然変わっていない。朝礼が終わって、スバル達がいつものように依頼をこなすために地下一階に行こうとすると、アシュアが呼び止

めた。

「急に呼び止めてすまない。今日はお前達にいい知らせがあってな♪」

「いい知らせ？」

「そう。初めてのお尋ね者討伐を始め、最近お前達も頑張っているようだし、そろそろ探検隊らしい仕事をしてもらおうというわけだ♪」

「ほ、本当ですか？」

一瞬にして、キロットの目が子供みたいにキラキラと輝いた。無理もないだろう。この三週間、探検隊のくせに探検というものを一度もやったことがないからだ。

「そ、そう目をキラキラさせるな。コホン。お前達、ちょっと地図を出してくれないか？」

スバル達が［不思議な地図］を広げると、アシュアは翼の先端で「トレジャータウン」から右上に少し離れた場所を指した。見ると、滝の絵が描かれているのが分かる。

「この滝は、昔から何か秘密があると噂されていてな。ちょうど場所も近いし、ここをお前達に探検してもらう」

「秘密の滝、ねぇ……」

鬱蒼と茂った森とか真っ暗闇の洞窟とかを想像していたスバルは、ちょっとがっかりした様子である。反面、キロットときたら場所を聞く前からそわそわと落ち着かず、アシュアの言葉も半分ほど耳に入っていないようだった。

「じゃあスバル、早く『トレジャータウン』に行こう！場所も分か

ったんだし、準備しにいかないと！」

いつの間にか、キロットはすでに地下一階へと続く梯子を登ろうとしていた。欲ってつくづく恐ろしい……とスバルは思った。

「トレジャータウン」であらかた準備を済ませ、スバル達は早速「秘密の滝」へ向かった。時折道行くヒトに教えてもらいつつ、地図を頼りに北東へ進んでいくと、昼過ぎ頃になってようやくその滝が見えてきた。

「うわぁ～、これはまさに圧倒されるねぇ」

文字にするとのんびりした物言いに見えるが、実際キロットは言葉通り圧倒されていたのである。スバル達が立っている崖を隔てて、悠然とそびえ立つ岩壁の上から、大量の水が勢いよく音を立てて落ちてくる。その水しぶきは離れていても降りかかってくるので、すでにスバルもキロットもずぶ濡れだった。そしてその水は下を流れる川に到達し、腹の底まで響く轟音を立てる。秘密があろうがなかろうが、この滝はまさに一見の価値があるものだった。

「さてと。この滝に何か秘密があるんだな？」

降りかかる水しぶきをものともせず、スバルはてくてくと滝の近くまで歩いていく。滝に近づくにつれ、暴風雨の中を歩いているような心地がした。

「ち、ちょっとスバル、危ないよ！」

「大丈夫だって。こんなもので……うわぁっ！」

突然、スバルは何かに弾かれたように後方に吹っ飛んでしまった。滝が起こす激しい水しぶきに、吹き飛ばされてしまったのだ。連続後転さながらに転がっていくスバルを、慌ててキロットが追いかける。

「だっ、大丈夫？スバル、スバル！」

ようやくスバルに追いつき、キロットはタックルでスバルを止めた。意識までは吹っ飛ばされず、スバルはすぐに自力で起きようとしたが、突如として起きた目眩に妨げられてしまった。

「（――――っ？この目眩、あの時の……）」

初めてお尋ね者を捕まえたあの日に二度も見た、未来を映し出す夢。視界が渦状に曲がり、だんだんと黒く塗りつぶされていく。あの時の目眩と瓜二つだ。やがて真っ黒になってしまった世界に、一筋の閃光が横切る。

今回は音も聞こえない、映像のみの夢だった。鳥瞰図のように空から見下ろした映像で、さっきまで見ていた滝が移っている。

するとスバル達が立っていた崖に、ヒト影が姿を現した。身体の輪郭はぼんやりと見えるが、顔は分からない。

ヒト影は辺りを大体見渡した後、滝から五メートルほど後退したと思った瞬間、なんと滝に向かって猛ダッシュしたのだ。

ヒト影が頭から滝に突っ込んだところで、映像が切り替わった。今度は洞窟のような場所で、入り口か出口らしきところに水のカーテンが下りている。すると、そのカーテンを突き破るように、ヒト影が頭から飛び込んできたのだ。ヒト影は二、三度転がって着地し、再び辺りを見回すと、何の迷いもなく先へ進んでいった――――

「……ル、スバル！」

キロットの声で、映像はかき消されてしまった。最初に目に飛び込んできたのは、キロットの顔――何故か、涙で目が潤んでいる。

「あぁスバル、気が付いたんだね！ボクの名前、分かる？」

「……流石に記憶は飛んでねぇぞ。ってかキロット、なんで泣いてんだよ？」

「だっ、だって呼んでも全然反応しないんだもん！ボク、心配で……」

「こんなので死んだら生まれ変わっても後悔するっつーの」

不敵に笑った後、スバルは落ち着いて夢の中で起こったことを整理してみた。ヒト影が誰だったかは別にいいとして、重要なのはその行動だ。無謀にもあの滝に突っ込んだ後、いつの間にか洞窟の中を転がっていた――ということは、

信じられないけれど、あの滝の向こう側に、洞窟がある可能性がある。

「スバル、ホントに大丈夫？ボーっとしちゃって……熱とかあるんじゃないの？」

目の前で何かがヒラヒラしている。キロットの尻尾だった。

「あぁ、大丈夫だよ。それより……また夢を見たんだ」

「夢？夢って……エディックを捕まえたときに見た、あの夢？」

「そう、それによると……一人のヒト影が、この滝の中に突っ込んでったんだ。そしたらそのヒト影は、洞窟の中を転がってた。だから、もしかすると……この滝の向こうには、洞窟があるんじゃないかって……」

話し終わらないうちに、今度はキロットが気絶して倒れそうになってしまった。秘密があるとはいえ、何の変哲もなさそうに見える滝の潜入方法が、滝に向かって体当たりとは……明らかに自殺行為である。

「あ、でも、嫌ならいいんだぜ？今まで散々オレの行動のせいでハラハラさせちまってるし……」

スバルはあやふやに付け加えた。彼自身としては、もちろん夢の中で起こったことを試してみたいという気持ちはある。しかしそれ以上に、そんなことをしてまでキロットを危険な目に遭わせたくないという気持ちもあった。

キロットは腕を組んで、何かを考えているようだった。それは初めて夢の内容を話した時と同じ反応だったけれど、困ったような顔はしていない。さほど時間を入れず、キロットは口を開いた。

「その……ヒト影が滝に突っ込んだところ、本当に夢で見たの？」

「う、うん」

「それでスバルは……その夢を信じてるの？ホントにあの滝の向こうに、洞窟があると思ってるの？」

半信半疑、スバルが中途半端に頷くと、予想外にもキロットは笑顔を見せた。

「だったらボクは信じるよ。あの時の夢と同じだったら、今度もまた本当かもしれないじゃないか。何より……あの時ボクは一度、疑って無視しちゃったからね」

キアがエディックに襲われていた夢を見たと話した時、キロットは信じずに流してしまった。きっと、まだそのことを気にかけてい

たのだろう。

「キロット……」

「初めての探検なんだよ？先に進まなかったら意味がないじゃない。行こう、スバル！あの滝の向こうへ！」

……どうやら、前みたいにビクビクする気はないみたいだな。

「わかった。じゃ、行くか！」

まず、助走をつけるために十分な距離の分、慎重に後退する。夢の中のヒト影は五歩程度だったが、正直それだけで飛べる自信はない。倍の十歩分後退した。

改めて滝を目の前にすると、心臓がバクバク騒いでいるのが自分でもわかる。これからあの滝に体当たりして、もし向こうに何もなかったら、間違いなくペシャンコの平面物体になってしまう。だがそれ以前に、そのことを考えないのが第一だった。恐れるままあの滝に中途半端にぶつかったら、それこそ危険だ。到達できるものも到達できないかもしれない。当たって砕けろ――――という言葉が、唯一の心の支えだ。

「行くぜ。一、二の……三っ！」

掛け声と同時に、スバル達は同じタイミングで駆けだし、同じスピードで走って、夢の中でヒト影がした時と同じように、頭から滝に飛び込んでいった。

第九話　探検――――秘密めく大きな滝（後書き）

本当なら次話あわせて一つの話だったのですが、
いざ確認してみると１０ページを軽く超えてしまうという事態が発生。
慌ててこんな中途半端なところで切ってしまった紀です。

考えろ、考えるんだ紀！切るのにもうちょっといい箇所がなかったか！（エセ自己暗示

第十話　潜入――――滝壺に眠る洞窟（前書き）

【半ばどうでもいいようなお知らせ】
いつぞやの活報でも書きましたが、プロローグを大幅に書き変えました。
見なきゃ小説読めないよ！というわけではありませんが、念のためこの場でもお知らせしておきます。

今回も８ページ。妙に長いです。
絶対どっか切る場所あっただろコレ。

第十話　潜入――――滝壷に眠る洞窟

一瞬だけ背中に水の重みを感じ、気が付くとスバル達は地面の上を転がっていた。未だに滝の音はするが、その場所は背後から。振り向くと、夢で見たときと同じように、水のカーテンが下りた洞窟の入り口のようなものが見えた。やはり、今回の夢も事実だったのだ。そう確信して、スバルはほっと胸をなでおろす。

「やったよスバル、やっぱり今回の夢も本当だったんだ！」

キロットの喜びの声が、洞窟の壁に跳ね返って幾重にも響く。これだけ反響が続くということは、相当この洞窟は奥深く入り組んでいるということだろう。何かあるという期待はできる。

「それじゃ、探検開始だ！」

スバル達は互いに頷くと、初めての探検の第一歩を踏み出した。

奥深くへ進むにつれ、洞窟内の雰囲気は一変した。と言っても、内部構造は特に変化がない。入り口であれほど聞こえていた滝の音が、まるっきり聞こえなくなってしまったのだ。洞窟の壁に音が反響し、さらに分散することでこのような静けさを生み出しているのだろう。静かな空気、さらにキロットの“フラッシュ”を照り返してキラキラ輝く濡れた岩壁が、この洞窟を一層神秘的なものにしていた。

滝の裏側にある洞窟だけあって、生息しているポケモンは水タイプが多かった。中でもスバルとキロットが特に手を焼いたのは、みずうおポケモンのウパー。地面タイプを併せ持っているのでキロットの電気技にも耐えるし、その特性「ちょすい」で、スバルの“バ

ブルこうせん”を吸収してしまう。可愛い顔して厄介な相手だ。もし［いしのつぶて］などの飛び道具を持ってきていなかったら、この人畜無害そうな敵にやられていたことだろう。

「ん……何だ、あれ？」

突き当たりを抜けると、スバルは妙なものを見つけた。地面にオレンジ色の絨毯が敷かれており、その上には［リンゴ］などの食料、戦闘に役立つ道具などがこれでもかと置かれている。明らかに誰かが用意したものに見えるが、持ち主はおろか野生ポケモンさえいなかった。

「な、なんか怪しくない？無視して先進もうよ」

「えーっ、だってこんなに大量にあるんだぜ？一個くらい持ってったって気付かれねぇだろ？」

スバルは絨毯のところまで走って行き、大量の［リンゴ］の中から一つを拾い上げて戻ってきた。カクレオンの店で売っている物よりも一回り大きい。へたに付いてある値札には［リンゴ］の売値五十ポケの二倍、百ポケと書かれている……

「――――って、値札？」

やっとスバル達が値札の存在に気付いた瞬間、静かだった洞窟内に甲高い声が二重三重に反響した。

「泥棒だぁ！泥棒だぁ！誰か捕まえてぇぇ～！」

あれよあれよという間に、顔を真っ赤にしたカクレオンが襲いかかってきたのだ。因みに一人ではなく、ざっと数えて三十人。スバ

ル達は声にならない悲鳴を上げ、値札付きの［大きなリンゴ］を持ったまま逃げ出した。

「そ、そういえば聞いたことがあるよっ、ダンジョンの中で稀にカクレオンがお店をやってることがあるって！」
「何で先に言わなかったんだよそれを！」
「だってボクも見るの初めてだもん！そもそもスバルが勝手に持ってったのが悪いんでしょ！」

スバルは言い訳しようとしたが、そんなことにエネルギーを回していたらカクレオン達に捕まってしまう。自身最高記録のスピードで走り続け、そろそろ疲れ果ててきた頃、追っ手のカクレオンのうちの一人が“サイケこうせん”を放ってきた。
そんなによく狙っていなかったのか、“サイケこうせん”はスバル達の頭上を大きく飛び越え、天井に直撃した。派手な爆発とともに天井にヒビが入り、大きな岩がガラガラと崩れ落ちていく。その様子を見て、スバルの頭の中の電球が光った。

「キロット、“でんこうせっか”で抜けるぞ！」
「えええええぇぇっ！そ、そんなの無理だよぅ！」
「無理って言ってる暇あるんだったらさっさとやる！」

スバルがキロットの尻尾を掴む。一か八かの賭けで、キロットは“でんこうせっか”を繰り出した。目にも留まらぬ速さで飛ぶ二人は、数多の大岩が地面に到達するすれすれの隙間を抜け、地面にしたたか顔面をぶつけた。
強打した嘴をさすりながら、スバルが振り返る。スバルの目論みは当たり、崩れ落ちた岩がうまい具合に壁となり、カクレオン達の行く手を塞いでくれたのだ。時々壁を崩そうと攻撃を当てる音が聞こえてくるが、しばらくして諦めたのか、洞窟はまたもとの静けさ

を取り戻した。
決して故意ではないのだが、「チーム・スピリッツ」、初の泥棒成功である。

「こりゃ、どう考えたってオレのせいだよな。ごめんな、キロット」
「……」
「……キロット？」

怒りのあまり口もきいてくれなくなったのかとドキリとしたが、そうではなかった。キロットは座った状態のまま、口を半開きにして天井を仰いでいる。どうしたんだよと声をかけても、ただ天井を指差すだけであった。

「上？上に何が……」

訝しげに天井を見上げ、スバルも固まってしまった。驚かずにはいられないだろう。彼等の目に入ってきたものは、燦然とした輝きを放つ無数の宝石だったのだから。

「す、スバル！この宝石、壁にも埋め込まれてるよ！」

キロットは磁石に吸い寄せられた鉄のように壁まで飛んでいき、壁から顔を出している宝石の一つを抜き取った。市場でよく見るカットされたものではなく、自然にできた原石だったが、それでも見る者全てを魅了するほどの美しさだった。

「スバル、すごいよ！これお土産にしたら、みんな絶対喜んでくれるよね！」
「お土産にするなら、あの宝石がいいんじゃないか？」

まだ驚きを隠せない声で言いながら、スバルは奥の方を指差した。その先にあったのは、今まで見た宝石の中でも一際大きなものだった。ダイヤモンドによく見られるブリリアント・カットが施された、赤い宝石。きめ細かく磨かれたその表面の一つ一つが、“フラッシュ”に照らされて乱反射していた。

「よし、じゃあ早速引き抜こうか！」

キロットが宝石の根元を持ち、持ち上げようと試みる。だが、やはり小型のポケモンでは荷が重いのか、キロットがどんなに力を入れても、宝石は一ミリも動かなかった。

「……スバル、代わって」

「ひ弱にも程があるだろお前。しょうがねぇな……」

スバルは軽く腕のストレッチをした後、宝石に腕を回して一気に身体を仰け反らせた。宝石は、面白いほど簡単に――――抜けなかった。勢い余って手を離してしまったスバルが、ゴロゴロと後ろに転がっていく。

「うへぇ……全然ビクともしねぇや」

「うぅ……でも持って帰らなきゃ折角の探検も意味がないし……ボク、もう一回やってみるよ！」

キロットが再び宝石を掴み、持ち上げる。時々“アイアンテール”で根元を砕こうとしても、宝石にはヒビすら入らなかった。そんなキロットを傍から見つつ、スバルもどうしようかと考えていると、突然視界がぐるりと暗転した。

「（――――っ、また来た……）」

予告なしに度々来る夢。一筋の閃光が切り開いた映像には、スバル達が今いる洞窟を映していた。個数は微妙に少ないけれど、ちゃんと宝石も映っているのだから、間違いない。今キロットが必死に抜こうとしている赤い宝石もそこにある。

そこにひょっこりと現れたのは、あの時滝を突き破ったあのヒト影だった。改めてよく見ると、このヒト影……どこかで最近、見たことがあるような気がする。何が潜んでいるのか分からない洞窟の中を、平然として歩いているその姿……

ヒト影は簡単に辺りを見回した後、例の赤い宝石を抜く――――のではなく、なんと奥に押したのだ。するとどうだろう。数秒の地響きの後、突然右の方から激流が襲いかかってきた。ヒト影もこれは予想していなかったのか、慌てて激流から逃れようと試みるも、呆気なく頭から水にかぶって――――そこで、映像は途切れた。

「き、キロット、ちょっと待て！」

「――――え？」

スバルが呼び止めた時にはもう、キロットはすでに“でんこうせっか”で赤い宝石にタックルしていた。ガコン！という重い音を立てて、僅かながら宝石が傾く。スバルは血の気が引くのを感じた。

「やった！ちょっと傾いたよ。後もう一発くらい当てれば……」

「『やった！』じゃねぇよバカ野郎！とっとと逃げるぞ！」

呑気に喜ぶキロットを叱咤し、その腕を掴んでスバルは逃げだした。

「へ？逃げるって……」

どういうこと？と問いかけようとしたキロットの口を、大量の鉄砲水が塞ぐ。スバルもキロットも逃げ切ることができず、ヒト影のように頭から水をかぶり、なすすべもなく流されてしまった。視界が真っ暗になり、息もできず、水の冷たさをその肌に感じながら、スバルとキロットの意識はそこで途切れた。

「……ん、あそこ、何か見えねぇか？」

右手を目の上に翳して遠くの川を見ているのはラドイル。ジオーネと共にダンジョンから帰ってくるところだったのである。お尋ね者だったゴースト三兄弟を引っ張りながら、ジオーネも彼に倣って川の方を見る。

「きゃー！『チーム・スピリッツ』ですわー！」

ジオーネが甲高い悲鳴を上げる。川の上流から、スバルとキロットが流されてきたのだ。うつ伏せの状態のまま、ぐったりとしている。ラドイルは急いで二人を担ぎ上げ、一目散にギルドへ走っていった。

「あー、つまり、こういうことか？あの滝の裏には洞窟があって、その奥にある赤い宝石を押してみたら、突然川まで流されたと」

「……はい」

げんなりした顔のまま、キロットが頷いた。スバルはまだ耳に水が入っているような心地がするのか、始終頭を叩いている。二人共、ギルドに搬送されてからすぐに意識を取り戻し、今こうしてアシュアに探検の成果を報告しているのである。

「ふぅむ……まぁギルドとしては、せめて証拠に宝石の一つや二つでも持って帰ってきてほしいところなんだがな」
「じゃあアシュア先輩、疑うなら今からでもあの滝に行ってきてくださいよ。多分まだ宝石あると思いますから」
「いやいやいや！お前達みたいに流されたらたまったもんではないからな。しかし、これはもう大発見だよ！」
「えっ？」

二重の意味で悪かったキロットの顔色が、少し元に戻る。

「だってそうじゃないか！あの滝の向こうに洞窟があるだなんて、今まで誰も知らなかったんだろう？それを見つけただけでも大手柄だよ♪」

早速親方様に報告しなくては♪と、アシュアはまるで自分の手柄のようにウキウキとしながら、ピコルの部屋へ飛んで行こうとした。が、何を思ったか、不意にその尾をスバルが掴んだ。

「あだだだだっ！す、スバル！何するんだい！」
「す、すんません。ただちょっと……確かめたいことがあって」
「確かめたいこと？」
「はい。えっと……オレとしても正直信じたくはないけど……あの滝、ひょっとしたら親方が一度行ったことがあるんじゃないかなぁ～って……」

核心部分をわざと軽い感じで言ったのだが、当然のことながら、それでキロットとアシュアの受けた衝撃が和らぐわけがない。約五秒間、時が止まったような静けさが辺り一帯を包み、突然キロットもアシュアも「えええええっ」という言葉を半ば絶妙なハーモニーで

叫びだした。

「あ、ありえんよ！もしそうなら親方様直々に『調査に行って来い』なんておっしゃらないはずだよ？」

「だからっ、そうじゃないかなって思っただけです！ただ報告ついでに親方に聞いて来てほしいだけなんです！お願いします！」

珍しく、スバルが自ら頭を下げた。ギルドに入門してこの方、先輩に何か頼みごとをする際にも、先にキロットがお辞儀をしてあとから面倒臭そうに頭を下げていたのに。アシュアもそのことは知っていたから、なおさら驚いていた。しかもここまで頼まれてしまっては、容易に断ることなどできない。

「ううぅむ……そこまで言うなら聞いてみるが……」

引き受けたものの、アシュアはやはり複雑な気分だった。初の探検で得た成果が、もしかしたらふいになってしまうかもしれないというのに、変わった奴だ……今更だけど。

先程のウキウキはどこへやら、何か釈然としない表情で頭を掻きながら、アシュアは改めてピコルの部屋へ向かった。

「スバル、なんであんなことを言ったのさ？」

そう聞くキロットは、少し不機嫌な顔をしていた。まぁ、スバルがあんなことを言わなければ、「滝壺の洞窟」の発見は自分達の手柄になっていたはずなのだから、無理はない。スバルは一先ず謝った後、滝に突入する前に話した夢のことをキロットに思い出させ、さらに洞窟の奥底で宝石を引き抜こうとした後に見た夢の内容を話した。

「ヒト影が宝石を押したら、水に流されてったって……ボク達が体験したのと全く一緒じゃないか！なんでもっと早く言わなかったの？」
「言おうとしたら誰かさんがすでに“でんこうせっか”で宝石にタックルしてたんだからしょうがねぇだろ？」
「うぅ……」

キロットがたじろいだ、その瞬間、

「思い出♪思い出♪たあ――――――――――っ！」

ピコルの元気な声が響き、一瞬の光がドアから漏れた後、そのドアを爆風（と、それに巻き込まれたアシュア）が吹き飛ばした。衝撃でその場にいた弟子全員が重力に逆らってわずかに地面から浮く。一連の出来事が終わっても未だ尚続く地響きがやっと収まった頃、

「あぁ！よく考えてみれば、行ったことあるかも」

決して邪気がこもっていないであろうこの言葉が、キロットにとどめの一撃を与えた。

「今日は残念だったが、探検なんていつでもできるんだからな♪また明日があると思って、これからもがんばってくれ♪」

またしてもボロボロになっているアシュアの慰めにならない慰めをかけられると、メルの呼び鈴が鳴った。夕食の時間である。先輩達がものすごいスピードで食堂へと飛んでいく中、スバルも未だに固まっているキロットを引っ張って、食堂へ向かった。

「……それにしても、すごいねぇ」

食堂へ行く弟子達を全員見送った後、ピコルが徐にぽつりと呟いた。

「へ？何がですか？」

「なんでもないよ。ほら、アシュアも食堂に行っといで。僕も後から行くから」

アシュアが行ってしまった後、ピコルは少し考え事をしていた。

何とか誤魔化すことはできたが、スバルに自分が「滝壺の洞窟」に探検に行ったことを悟られてしまった時は少し焦った。いずれこの探検の成果は自分の弟子に託してやろうと、わざわざ「ポケモン探検隊連盟」にも報告しないでおいたのに。

初めて見たときから薄々感じていたが、あのスバル、只者ではないような気がする。立ち振る舞いも普通のポッチャマらしからぬものだが、ピコルが一際興味を持っているのは、スバルの「夢」である。盗み聞きで聞いたのだが、彼らが初めてお尋ね者を捕まえた時、スバルが見た夢がきっかけだったのだという。ならば、今回自分の探検が悟られたのも、恐らくその夢が原因なのだろう。

「……そうだね。じゃああの子達も候補に入れておいてやろうかな」

頭の上に音符マークを浮かべて独り言を言った途端、ピコルの腹が常人の倍以上に大きく鳴った。今まで考えていたこと全てを「セカイイチ」に置き換えて、ピコルはスキップしながら食堂へ向かった。

気落ちしていては、食事も喉を通らない。腹八分で食事を切り上げ、スバル達は一足早く寝床につくことにした。ギルドの生活は疲れるが、今日はいつにも増して疲労困憊で、一度ベッドに寝っ転がるともう起きる気にすらならなくなった。

「今日はお互い、『疲れた』って文字が顔に出てるね」

［トレジャーバッグ］の中を探りながら、キロットが苦笑いした。

「そりゃそうだろ。ましてやあの終わり方じゃ……」

「そうだね。確かにガッカリしたけど……でもボク、やっぱり探検隊になってよかったと思ってるよ」

そう言いながらキロットが取り出したのは、［遺跡の欠片］だった。彼の父からもらった、心の支え、そして目標ともなりえる宝物。

「このギルドで修業して、立派な探検隊になって、そしていつか……この欠片の謎を解く。それがボクの夢だし、お父さんの願いでもあったんだ」

そういえば、キロットのお父さんは今何をしているのだろう。探検家だとは聞いたけど、詳しいことは教えてもらっていない。そのことを聞くと、キロットは少しだけ悲しそうに耳を垂らした。

「お父さんは……ボクにこの欠片を渡して、また探検に行ったきり、行方不明になっちゃったんだ。あれから五年たつんだけど、全然音沙汰なくて……」

「キロット……」

「大丈夫だよ。始めは寂しかったけど、もう慣れちゃった。まだお父さんが死んだって決まったわけじゃないし、何より、こうしてス

バルと過ごしてたら、寂しさなんかとっくに忘れちゃったよ」
「ま、確かにお前、初めて会った時よかは逞しくなってると思うぜ」
「それもスバルのおかげだよ。スバルと一緒にいると、なんだか勇気が出てくるような気がするんだ。今更だけど、いつもありがとう」

唐突に礼を言われ、スバルはこそばゆく感じた。

「そんなことで礼言われたら、オレ何て顔すりゃいいんだよ？」
「顔真っ赤にしてるだけで十分だと思うけど？」

小さな弟子部屋に、にぎやかな笑いが起こる。

「でも、今日のお前は一味違ってたような気がするぜ。滝に突っ込む前、オレの見た夢を真っ先に信じてくれるなんて思わなかったぞ」
「そうそう、その夢のことなんだけどさ……」

キロットが耳をピン！と立てた。何かを思い出した時のしぐさである。

「ボク、ずっとその夢のことを考えてて、そしたらいろいろと気付いたことがあるんだ」
「気付いたこと？」
「うん。スバル、キミが時々見る夢、いつも何かに触った時に起きてない？」

スバルはそれに答える前に、今までの夢を見た時の状況を頭の中で整理してみた。
これまでに見た夢は全部で四つ。そのうち二つは、二週間前に見たキアとエディックの夢だ。最初の夢は、キアに［リンゴ］を渡した時。二つ目は、エディックに足を踏まれた時。そして今日見た三

つ目の夢は、滝に弾き飛ばされてしまった時。四つ目は、宝石を抜こうとしてダメだった時……

――――確かに、いずれも何かに触れた時にあの夢を見ている。

「あともう一つ。二週間前に見た夢は、これからキアがエディックに襲われるという『未来』に関する夢だった。そして今日見た夢は、昔親方様があの滝を探検したという『過去』に関する夢だった」

「っつーことは……えぇと、つまり？」

「（少しは自分で考えてよ……）……つまりね、スバルは物に触れることで、その物に関する『過去』や『未来』を夢で見ることができる。そういう能力を持ってるってことさ」

言い終わると、俄然キロットは目をキラキラさせた。

「これってすごいことじゃない？この能力さえあれば、探検するときとかに色々と役立つかも！」

褒め言葉というのは分かっているが、スバルはなんだか複雑な心境だった。その能力が任意で発動するなら役に立つかもしれないが、振り返っても分かるように、その夢は偶然起こっている。それに何かに触れて夢を見るたびに目眩のオマケつきときたら、見ているこちらとしては正直健康に悪い。

アシュアにさっさと寝ろと言われるまで、疲れているはずなのにスバルもキロットも談笑に耽っていた。何かに夢中になっていると、疲れというのは案外簡単に吹き飛ぶものなのである。

「……さて、ワタシもそろそろ寝るとするか……」

アシュアは大きな欠伸を一つして、自分の寝床（実はギルド入口

の梯子）へ向かおうとすると、食堂からかすかに物音が聞こえた。何かを齧っているような音である。

「まーた親方様、［セカイイチ］盗み食いしちゃって……」

アシュアに届けてもらわない限り、ピコルが食堂にこっそり忍び込んで［セカイイチ］を盗み食いするのは日常茶飯事。かといってそれを注意したら何が起こるかということは、一番弟子でピコルとの付き合いが最も長いアシュアがよく知っている。無理やり無視して梯子を上るという判断をした。

しかし、当のピコルは自室で眠りの世界に入っていたのだった。食堂に潜んでいた者――正確には三人のヒト影――は、［セカイイチ］を食い尽くすだけ食い尽くした後、食堂の窓枠を破って外へと脱出した。そのうちの一人が、取り外した窓枠を元に戻す。

「へへっ、今日もたらふく頂けましたね」

「ケッ、このギルドのセキュリティーもしょぼいもんですぜ」

「あぁ。だが食い物あさってるだけじゃ終わらねぇ。近々ギルドで遠征があるという情報は手に入れたことだし……これを使わない手はねぇぜ。ククククッ」

第十話　潜入――――滝壺に眠る洞窟（後書き）

【補足説明】
「滝壺の洞窟」ラストをちょっとアレンジ。
本来なら「アレ」が出るはずですが、今回は一旦パス。
「アレ」は少し話を進めた後に出す予定です。
分かっていても感想などで言及しないように！紀からのお願いです。

【どうでもいい裏話】
前半でスバル達がやらかしてしまった泥棒は実話。
興味本位でやっちゃいましたw［せいなるタネ］万歳。

第十一話　急転――望まぬ再会（前書き）

今日で紀がこのサイト様に小説投稿して1ヶ月。
あっという間だったなぁ……この1ヶ月、五本の指で数える程度しか休みがなかったぜ…

第十一話　急転――望まぬ再会

「――――えー、というわけで、その場所には未知なる秘密が隠されていると昔から言い伝えられており、これを解明するため、我がギルドでは近々、遠征を行おうと思っている♪」

とある日の朝礼。珍しく弟子達はわりあい静かだったのに、アシュアのこの発表を機に、大広間は一瞬にして歓喜の声で満たされた。

「わぁ、遠征ですか！」
「本当に久々ですわー！きゃー！」
「ヘイヘーイ！」

先輩の弟子達は文字通り、飛び跳ねるように喜んでいる。それほどこの「遠征」というものは、「ピコルのギルド」にとって一大イベントなのだ。

遠征というのは、ギルドを上げて遠方まで探検に行くことである。今までスバル達がしてきたように近所を探検するのとではわけが違うので、当然それなりの準備もするし、効率性も考えて、ギルドの弟子の中で実力のある数人が遠征に行く資格のあるものとして選び出されるのだ。前回の遠征は大成功をおさめ、金銀財宝をお土産として持って帰ることができたという実績もあるため、恐らく今回も遠征メンバーに選ばれるべく皆実力アピールに躍起になることだろう。

それは「チーム・スピリッツ」もまた然りだった。むしろ彼らが、ほかの先輩達よりも俄然やる気が出ていることだろう。

その理由は、昨晩にさかのぼる。

その日も探検隊としての仕事をやり遂げ、もう眠りに付こうかと

いうその時に、突然親方直々に呼び出されたのだ。親方から告げられた内容は、今朝アシュアが行ったのと同じ遠征の件、そして、

「いつもなら新入りは候補に入れないんだけど……でも、君達ものすごく頑張ってるじゃない？だから、特別に君達を選抜メンバーの候補に入れることにしたんだよ！」

これにはキロットはもちろん、せっかくの睡眠を妨げられて少しイライラしていたスバルも、喜ばずにはいられなかった。入門当初に比べて探検の数は増えたものの、そろそろ近場の探検に飽き飽きしていたところだったのだ。遠方へ行って財宝を手に入れ、見聞を広め、先輩との交流もさらに深められる。そんないいことずくめの遠征に参加できるというこのチャンスを、無駄にするわけにはいかない。

「はいはい、気持ちは分かるけど静かにー！」

アシュアが皆の背丈以上に飛び上がり、ふりかけるように怒鳴って弟子達を静める。

「選抜の件はぜひとも、みんなには頑張ってもらいたい。それともう一つ、みんなに知らせたいことがある。今日からこのギルドに、新しい仲間が入ることになった」

遠征発表ほどではないが、少なからず弟子達はざわつき始めた。弟子入りとなれば、自分たちに早くも後輩ができるかもしれないと、キロットは妙にワクワクしている。スバルの方はというと、朝礼の話題が変わって早々、再び覚醒と睡眠の狭間を彷徨いはじめた。

しかしそんな彷徨も、一秒とたたずに終わってしまった。

突然何かが破裂したような音が聞こえたかと思うと、地下一階へ

と続く梯子の先にある穴から、黒い煙がギルドメンバーに向かって一気に吹きつけてきたのだ。これだけなら少し驚くだけで済むが、問題は――――

「ぶへぁ！何なんだこのニオイ！」
「きゃー！何かオナラくさいですわー！」
「ヘイヘイ！ゴゾ、まさかオメェ……」
「うえぇ！あっしがやったわけじゃないでゲスよぉ～！」

食事中の皆さんに詫びたくなるほどのセリフを次々と言い放つ弟子達。なんとも言えない異臭を放つそれは、よりによって大広間に拡散するのではなく、弟子達を包み込むようにその場にとどまっているのであった。

「ちょっとお前達！どこ行ってんだい？」

気がつけば、一部を除くギルドメンバーは、新鮮な外気を吸うべく我先に窓から顔を出そうと争う始末。その間に、新たなギルドの仲間――――正確には三人のポケモンが、大広間の地に足をつけていた（うち二人は宙に浮いていたが）。

「ほらほらみんな、新しい仲間が来たぞ！集合！」

無理！と口に出さずとも、そんな言葉を顔に浮かべて数人の弟子達は恐る恐る振り向いた。皆特にこれといった反応を示さなかったものの、唯一キロットだけはハッと息を飲み込みそうになって慌てて口を閉じた。

「えー、こんな対応をしてしまって申し訳ないのですが、どうぞ自己紹介を……」

いつになくアシュアが丁寧語で話している。そんなに相手が尊敬すべき対象なのか、とんでもない。何故ならその相手は、

「ケッ、ドガースのコドワだ」

「へへっ、ズバットのティッドだ。よろしくな」

「そして、俺様がこの『チーム・ドクローズ』のリーダー、スカタンクのジャグスだ。覚えておいてもらおう」

一瞬忘れていたが、先に自己紹介をした二人が、かつてキロットの［遺跡の欠片］を奪ったコソドロだったのだ。しかも、後に紹介した探検隊リーダーのスカタンクの後についていっていることから察すると、恐らくこの二人も探検隊の一員なのだろう。

彼等もキロットとスバルを見るなり目を見開いていることから、彼等にとってもスバル達がここにいることが驚きだったようだ。

「えー、この三人だが、正確に言うと弟子入りではない。今回の遠征に当たり、補佐役として同行してもらうことになったのだ」

アシュアの説明の三分の二も終わらないうちに、弟子全員の顔が恐ろしく嫌そうなものに変わった。皆の頭の中は「こんな奴等と行くのかよ……」とか「早く遠征が終わってほしい」などといった内容がほとんどだったが、同時に「親方やアシュアはこのニオイ平気なのか」という疑問もその中に入っていた。

「とはいえ、いきなり遠征に同行しても馴染めないだろう？そういうことで、選抜メンバー発表までの数週間、このギルドでみんなと生活を共にすることになったのだ♪」

……恐らく、弟子達はこれほどまでに親方とペラップを恨めしく

思ったことはないだろう。しかし彼等の中には、再び静かに喜んでいる者もいた。
えらくお後のよろしくない朝礼が終わり、先輩の弟子達は未だにニオイに呻きながら、各自の仕事に就きはじめた。キロットも顔に憂愁な色を浮かべながらも、いつものように掲示板に向かおうとしたのだが、

「す、スバル、早く行こうよ！」
「ゴメン、あと三十秒だけ空気吸わせてくれ！」

スバルは依然としてニオイに悶えているようである。キロットはやれやれと溜息をつき、しばらく待とうとしたのだが、突然身体が後ろに引っ張られるような感覚がした。

「ちょっとお前、こっちに来い」

振り向くと、コドワがキロットの尻尾を銜えて引っ張っていた。抵抗しようとしたのだが、今度はティッドがいきなり前方から“たいあたり”で追い打ちをかけ、たちまちキロットは食堂にまで引きずり込まれてしまった。

「お前、何でこんなとこにいるんだよ？ここが何処だか知ってんのか？」

コドワの形相に、キロットは思わず泣き出しそうになってしまったが、口の中で歯を食いしばってそれを堪えた。

「知ってるよ。『ピコルのギルド』でしょ？ボク達、ここで探検隊として働いているんだ！」
「探検隊だぁ？お前がか？」

不必要なほど大きく頷くと、コドワもティッドも声高らかに笑い始めた。苛立ちも感じたが、海岸の時の出来事も思い出してしまい、さらに涙がこみ上げてくる。

「な、何がおかしいんだよ？」

「悪いこたぁ言わねぇ。探検隊はやめとけ。お前みたいな弱虫が務まるほど甘くはねぇんだぜ？」

「え……偉そうなこと言わないでよ！そりゃボクは弱虫だけど……でも、そんな自分に負けないように努力してるつもりだよ！今だって、遠征のメンバーに選ばれるように頑張ってるんだもの！」

「無理無理！遠征なんざお前にとっては夢のまた夢。仮に行けたとしてもあのポッチャマの足を引っ張るだけ引っ張っておしまいだぜ？」

「ポッチャマ――――スバルって言ったか？アイツもかわいそうだよなぁ。コイツに無理やり探検隊組まされて、気苦労ばかりが続く毎日を送らなきゃならねぇなんてよぉ」

流石にこれにはキロットにも答えたようだった。ティッドの言っていることもまるっきり嘘というわけではないからだ。もう泣きそう――――と思った瞬間、そのティッドの悲鳴が聞こえた。

「どいたどいた！オレ達はお前等と違って忙しいんだよ！」

いつ食堂に入ってきたのか、スバルが乱暴にティッドを叩き落とし、コドワを押しのけてこちらに向かってきた。助け舟かと思いきや、スバルはキロットの腕をつかみ、半ば引きずるように食堂から出て行った。

「ちょ、ちょっと……」

「アシュア先輩から呼び出されてんだよ！プチ説教くらいたくなかったら自分の足で歩けってんだ！」

スバルの声は、過半数苛立ちで占められていた。誰に対しての怒りなのだろう。コドワとティッドか、それとも、キロットか。

いずれにしろキロットの心には、疑問と不安が深い傷跡として残ることになってしまった。

第十一話　急転――望まぬ再会（後書き）

ついにドクローズ登場！嫌いな人が多そうな気がしなくもないですね（

第十二話　調達――――知り得ぬヒトの心（前書き）

なんか最近タイトルの二字熟語がネタ切れになってきた；
タイトルでスランプ起こるとか……ハハハ……笑えない……

第十二話　調達――知り得ぬヒトの心

ほぼ強引にキロットを連れてきたスバル。その様子に、アシュアが驚かないはずがなかった。

「お、お前達、どうしたんだい？」

「なんでもないです！それで、用件は何なんですか？」

なんとも言えないスバルの覇気にアシュアは少しおののいたが、気を取り直すように咳払いを一つした。

「あー、えぇとだな。今日はお前達に、頼みたいことがあるのだ」

「頼みたいこと？」

ようやく「スピリッツ」が並んで立つ。先程の覇気とは一転、スバルは至って普通の表情に戻ったが、キロットは耳を垂らし、誰がどう見ても憂鬱な表情を浮かべていた。あからさまに正反対な二人の様子を、アシュアは気にしなかったわけではないが、あえて無視して続ける。

「ズバリ、ギルドの食糧を調達してきてほしいのだ♪」

アシュアが言うには、今朝倉庫を調べたところ、食糧が大幅になくなっていたのだという。しかも、今日が初めてというわけではなく、分かっているだけでも一週間前からこのような現象が起きていたとか。

「…じゃあ、誰かが倉庫の食いもんを盗んでったってことッスか？」

「そうとも限らない。……これはあまり大きな声では言えないのだ

が、時折親方様が真夜中にこっそり盗み食いすることもあってな。現に、なくなっていたもののほとんどが、親方様の大好物である［セカイイチ］だったからな」

今更の説明のようにも思えるが、［セカイイチ］というのは、普通より一回りも二回りも大きく、味も格別な［リンゴ］のことだ。手に入る場所も限られており、なかなか手に入らないことで有名なのである。

「何でそんな貴重なものが親方の好物になってんスか……？」
「わ、ワタシに聞かれてもな……とにかく、誰が犯人かはまだ判明していないが、［セカイイチ］がなくなっていることは紛れもない事実だ。［セカイイチ］がないことを親方様が知ったら……」

言葉も切らないうちに、アシュアは突然思いつめたように押し黙ってしまった。何秒か置いて、やっと口を動かしたのだが、注意して耳を澄ませても聞き取れないくらいのボソボソとした声だった。

「あの、アシュア先輩、どうしたんスか？」
「……親方様は……なのだ。だから、よろしく頼む」

一番肝心な部分が主語と述語でしか構成されていなかった。当然のことながら、それでスバルが理解できるわけがない。

「うえぇっ？それだけじゃ分かんないっスよ！」
「だーっ！うるさい！とにかくとんでもないことになっちまうんだ！そうならないようにさっさと行く！絶対に失敗してはならんぞ！いいね？」

ロクな説明ももらえず、あまつさえ穴が開くほど釘を刺されてしまった。これ以上言及してもアシュアの頭の中の薬缶が噴き出すだけだろう。スバルはため息をつき、キロットに行くよう促した。しかし、キロットは依然として、憂鬱な表情のまま顔を伏せている。

「キロット！何ボーっとしてんだよ？早く行こうぜ！」

「……え？……あ……うん……」

答える声にも元気がない。その理由を、食堂での一件を知らないスバルが悟るはずがなかった。

そして、梯子を登っていく彼等を、「ドグローズ」は食堂入口の陰から眺めていた。

「へへっ、アイツ等、行ったようですぜ」

「ケッ、俺達が昨日食い散らかしたおかげでとんだとばっちりだな」

「さて、ちょっくらちょっかいでもしてやろうかね、ククククッ……」

――――所変わって、別の場所。

「失礼します」

大量の書類を起用に片手に携えたまま、ドアをノックし、一人のポケモンが中に入る。そこは、本棚、机。それ以外には何もない大きな部屋だった。壁に大きく穴をあけ、木の枝で作った格子をはめた窓越しに、広大な森を眺める別のポケモンが佇んでいる。ノックしたポケモンは、このポケモンの秘書だった。

「やぁ、君か、ご苦労さん。書類は机の上に置いといてくれ」

振り向くこともなく、ポケモンが指図する。秘書は特に嫌な顔をすることもなく、言われた通りに書類を机の上に置いた。

「また外の風景を眺めていらしたのですね」

秘書が呼び掛けると、やっとポケモンは顔をこちらに向けた。だが、すぐにまた外の森に目をやる。秘書も倣って外を見た。

「速度は緩やかだが、『時の乱れ』は確実に進行しておる。このままでは、いずれこの森を見ることができなくなってしまうのではと思ってな」

言うべき言葉が思い浮かばなかったので、秘書は何も答えなかった。そのまま、風の音だけがこの部屋に反響する。

「ところで」

突然ポケモンが身体ごとこちらを向いた。あまりにも急だったので、不躾なほど秘書は縮み上がってしまった。そんな秘書を見、ポケモンは少しだけ眉間に皺を寄せたが、咎めることはなかった。

「風聞じゃが、『ピコルのギルド』に新しい探検隊が入ったようだな」

「えぇ、『チーム・スピリッツ』。ポッチャマとピカチュウで構成されている探検隊チームです」

そうか、それだけ言って、また顔を外へ向ける。いつ突拍子もない質問が来てもいいように、秘書は心の中で身構えた。

「実は、近々彼等に会いに行こうかと思っとるんじゃよ」
身構えは、呆気なく崩されてしまった。
「……え、えぇっ？総長ご自身が、ですか？」
秘書のリアクションに、総長と呼ばれたポケモンが口だけで笑みを作る。
「何じゃ、何か文句でも？」
「い、いえいえそんな！ですが、何も総長自らが行かなくとも……」
「よいではないか。こんな老いぼれでもたまには運動も必要じゃよ。それに、前々から、あの者達が気になっていてのう……」

スバル達に視点を戻して、「リンゴの森」。
アシュアの情報によると、この「リンゴの森」は［セカイイチ］がなる木がある数少ない森なのだという。「アナザー」最大の大陸の中心部に位置し、温暖な気候に恵まれたこの地は、昔から様々な［リンゴ］が自生している地として名を馳せていた。「カクレオン商店」で商品として売りに出されている［リンゴ］の約三分の一は、ここから入荷しているのだという。
栄養豊富な［リンゴ］を糧にしているのか、ここに住むポケモン達は無駄に体が丈夫だった。当然ここも「不思議のダンジョン」。「時の乱れ」の影響で我を忘れたポケモン達が襲いかかってくる。攻撃力は「トゲトゲ山」や「滝壺の洞窟」のポケモンと大差ないのだが、いつもより多く技を撃ち込まないと倒れてはくれなかった。おまけに、この森は今まで探検したダンジョンの中で過去最高の規模を誇っている。いくら真面目に修行しているとはいえ、後輩をこ

んなところにほっぽり出すとは、ついアシュアへの恨み言を並べたくなるものである。

「ったく、分け入っても分け入っても同じ景色じゃねえか。これホントに先進んでんのかなぁ……」

「……」

前半は独り言、後半はキロットに向けて呟いたのだが、キロットは全くと言っていいほど反応しない。さっきからずっとこの状態だ。いい加減痺れを切らし、スバルがキロットの顔を覗き込む。

「なぁ、さっきからどうしたんだよ？腹でも痛いのか？」

首を振るキロット。表情は変わらなかった。スバルは困ったように頭を掻き、話題を見つける時間を稼ごうと再び歩き出す。そのまましばらく、気まずいほど静かな時間が流れていった。

「スバル、さ」

ようやくキロットが口を開いたので、スバルはすぐに振り向いた。それでも、続けて言葉を発することなく、キロットは口をもごもごとさせている。

「ボク、スバルに迷惑かけているのかな……」

「は？」

聞き取れなかったのと、意味を理解できなかったという二重のニュアンスを含めてスバルが返す。キロットの顔は、今にも泣きだしそうだった。

「ち、ちょっと待てよ！なんで泣いてんだよ？」
「ボク、ずっと考えてたんだ。スバルに迷惑かけてるんじゃないかなって……いつもヘマして、スバルの足を引っ張ってばっかで……一緒にコンビを組んで探検隊結成しても、足手まといにしかなってないんじゃないかって……」

食堂でコドワ達に言われてから考えていたことを、キロットは絞るように吐き出した。もちろん、スバルはキロットが何故こんなことを言い出したのか、そのきっかけに見当もつかなかった。しかし、少し考えて、本格的にキロットが泣き出す前に口を開く。

「まぁ、確かにお前は手間のかかる奴だよ。ここぞっていう時にドジ踏むし、そうやってすぐに泣き出すし、オレが今負っている疲れの半分くらいはお前関連の疲れだ」

だけどな、と、スバルはキロットに発言の余地を与えないようにつづけた。

「それでも、お前は大切な仲間なんだ。お前がいなけりゃ、探検隊も結成できなかったし、ギルドにも入門できなかったし、今まで作ってきた思い出すら作ることができなかったんだぜ？迷惑だなんて一度も思ったことなんかねぇよ」

伏せていたキロットの顔が、少しだけ持ち上がった。しめたと思い、スバルがたたみかける。

「だいたい、なんで今更そんなこと考えてんだよ？誰かに言われたりしたのか？」
「……コドワと……ティッドに」

スバルは少し首を傾げた後、あぁ、アイツ等かと、ため息交じりに吐き捨てた。ほんの数時間前に会ったはずなのに、今の今まで顔すら忘れていたらしい。

「ボクと探検隊を無理やり組まされて、スバルは苦労してるって言われて。まるっきり嘘じゃないから、ひょっとしたら……って、思って」

「あっそう、じゃあお前はオレよりもあの二人を信用するってか？」

いきなりとんでもないことを言われ、キロットは慌てふためき顔を上げた。

「ちっ、違うよ！ボクは……」

「お前の悪いところはそこだよ。相手がどんな奴でも、言ったことをすぐ信じやがる。あのな、オレが苦労してるかどうかなんて、アイツ等が知るわけねぇじゃんか。読心術使えるわけじゃあるまいし。オレの心は、オレ自身にしか分かんねぇんだ。そんでそのオレが、お前が迷惑で足手まといなんて思ったことがないって言ってる。お前はそれを信じねぇのか？」

「……」

暗く沈んだキロットの目にスバルの真剣な顔が映った時、キロットの心に、反省と後悔の波がどっと押し寄せてきた。コドワ達とスバル。どう考えたって、信用できるのはスバルじゃないか。それなのに自分は、彼等の言っていることが間違っていないという理由で、スバルを疑ってしまった。本来なら、チームメイトとして失格だ。

それでもスバルは、キロットのことは大切な仲間だと言ってくれている。

「あのさ、スバル」

最後に、少し気になっていたことをスバルに聞いた。

「あん？何だ？」

「ボクを連れてこようと食堂へ入った時、ものすごく怒ってたじゃない。あれはどうして？」

スバルは一瞬キョトンとした顔を見せ、あぁと呟いた。

「ニオイにイライラしててさ、何べん外の空気吸っても取れねぇんだもん」

拍子抜けするほどあっさりした返答が来て、芸人でもないのにキロットはその場でズッコケた。それを見てかどうかは定かではないが、スバルがケタケタと声をあげて笑う。

「何だお前、もしかしてそれで思い悩んでたのか？だとしたらゴメンな。変に誤解させて」

ペコリと頭を下げるスバルを、キロットは頬を膨らませて睨んでいたのだが、やがてその顔は自然な笑顔となっていた。やっぱりスバルはすごい。彼とチームを組んで本当に良かったと、心の底から思えるようになった。

この時スバルは、漠然とした懐かしさが心にこみ上げてくるのを感じていた。今自分が言った言葉、初めてではないような気がする。ずっと前に、同じようなことを誰かに話したような。

そこから先は思い出すことができなかったので、あっさり諦めてしまった。そもそも、こんなところで時間を潰している場合ではない。

「さて、問題も解決したところで、［セカイイチ］採りに行こうぜ。早くしないとアシュア先輩に怒られちまう」
「……うん！」

今までとは打って変わって、溌剌とした表情でスバル達は再び森の中に飛び込んだ。

急いで走ったおかげで、空が茜色に染まる前に［セカイイチ］の木を見つけることができた。
流石実が大きいということだけあって、木もそこらの［リンゴ］の木とは比べ物にならないほど丈が高かった。いたるところに、真っ赤に熟した見るからにおいしそうな実が、スバル達を見下ろすように枝にぶら下がっている。

「さて、あれをどうやって採るかだな」

小柄なスバル達では、あの高さの木に登ることは不可能に近い。技を当てて落とすという手もあったが、スバルとキロットの技であれらの実を無傷で落とす芸当などもっと不可能だ。
早くしないと日が暮れてしまう。スバルもキロットも脳のエンジンをフル回転させていい方法を考えに考えていた。その傍ら、お互いに嫌な気配を感じていた。この森に入ってからずっと、誰かに見られているような気がする。

「……スバル、逃げて！」

敏感なキロットがいち早く気配をつかみ、スバルの手を引いて逃げようとしたのだが、一足遅かった。次の瞬間、黒く染まった煙が吹きつけ、瞬く間に彼等を包み込んだ。今日の朝も堪能した、正直

思い出したくもなかった、強烈なニオイ。それは、スバルとキロットの意識を瞬時に奪い取ってしまった。

第十二話　調達――知り得ぬヒトの心（後書き）

中盤で出てきた二人は今回の話には何ら関係ございません（殴

第十三話　波瀾――――挫折と激励（前書き）

ただでさえ一週間も放置しちまったのに話を読み返してみたらあまりの酷さに愕然ｏｒｚ

スランプをリリースしてネタの神様を召還！（↑

……なんてのはできないものか……

とにかく、恐ろしいほど更新遅れて本当に申し訳ございませんでしたｍ（＿＿）ｍ

第十三話　波瀾――挫折と激励

地平線の遥か彼方へ沈む夕日は、ありとあらゆるものを赤く染め上げる。空も、山も、海も、そして森も。

［リンゴ］ほどではないが真っ赤に染まった森の中を、アシュアが低空飛行で突き進んでいた。もうすぐ夕食の時間なのに、よりによって食糧調達を頼んだ「チーム・スピリッツ」が未だに戻ってきていないのだ。このままではピコルの逆鱗に触れるのも時間の問題となってしまう。苛立ち三分の一、焦り三分の一、心配三分の一で森の奥深くまで入っていく。自身も何度か［セカイイチ］の収穫で訪れたことがあったので、道は覚えていた。

［セカイイチ］の木が見えた頃、その一歩手前で、スバルとキロットが倒れていることを発見した。“はねやすめ”しかけた羽を慌てて動かし、アシュアはスバル達のもとへ猛スピードで飛んで行った。敵の奇襲に遭ったのだろうか、もしそうだとしたら、先輩である自分の責任は計り知れない。進めば進むほど、心配と焦りは大きくなった。

しかし、やっと彼等のもとに辿り着いた瞬間、その思いは砂で出来た城のようにボロボロと崩れ去った。――――そう、思いの全てが。

「…お、お前達……何しとるんじゃあああぁぁぁ！」

鳥ポケモンが一斉に逃げ出すほどの、アシュアの怒声が響き渡った――――

「……アシュア先輩、これはどういうことッスか？」

「そりゃこっちのセリフだよッ！」

何度目か分からないアシュアの怒鳴り声が地下二階大広間に反響する。今日に限って、大広間にはトレード店を営むボルリド以外は誰もいなかった。だから余計アシュアの声が響く。

「リンゴの森」で気を失った後、スバル達はギルドの自室で目を覚ました。お互い身体に付いたニオイに顔をしかめていると、突然アシュアに呼び出され、いきなりこのような怒鳴り声を浴びる羽目になってしまったのである。

「とにかくっ、どういうことか説明してくれるかいっ？」

「だから！ボク達は何も知らないって言ってるじゃないですか！」

「しらばっくれてんじゃないよ！お前達が［セカイイチ］を食い散らかして倒れてるの、ワタシはこの目でしっかりと見たんだからねっ！」

なんでも、［セカイイチ］の木には実が一つも残っておらず、その代わりそれらの食べカスが、倒れていたスバル達の周りに散らばっていたのだと言う。もちろん、スバル達にそんなことをした覚えなどない。何かの罠にはめられたのだ。だが、それを必死に弁明しようとしても、怒り心頭のアシュアは聞く耳を持たなかった。

「だーっ！もういい！お前達、今日は夕飯抜き！」

それどころか、こんな言いつけまでされる始末。

「えぇーっ、そんなぁ！」

「当たり前だよ！大事な仕事ができなかったんだ。どうせたらふく［セカイイチ］を食べたんだから我慢くらいはできるだろ？全く…お前達を信用したワタシがバカだったよ！」

吐き捨てるように言ったアシュアのセリフの最後の部分が効いたのか、またしてもキロットは泣き出しそうになった。スバルはアシュアに気付かれないよう、舌打ちをしてこれでもかというほど睨みつける。その視線には気付かず、むしろキロットの半泣き顔を見た途端、またアシュアが頭から湯気を出した。

「泣きたいのはこっちだよ！ワタシは……これから……この件を親方様に報告しなきゃなんないんだよ！［セカイイチ］がないと知ったら……親方様は……」

何が頭に思い浮かんだかは知らないが、突然アシュアはいつもより二オクターブ高い声で叫びだした。ラドイルの声とはまた違った意味で強力である。

「とにかく！親方様への報告にはお前達も同行してもらう！親方様のアレをくらうのがワタシだけというのは……あまりにも不公平だからな」

分かったらさっさと行く！と、後ろに飛んだアシュアから体当たりされ、スバル達はほぼ強引な形でピコルの部屋に入らされた。

例のごとく、アシュアに呼び掛けられてから数分の時間差で、

「やぁっ！君達、［セカイイチ］を取ってきてくれたんだね？ありがとう！」

ものすごいスピードで回れ右しながらピコルがにこやかに話しかけてきた。何を考えているのかわからなくとも、あまりにも無邪気すぎるこの笑顔が、今日に限って心なしか不気味に思えてくるよう

な……少なくともアシュアはそれをひしひしと感じていた。

「あぁ……えぇっと、親方様……その件なのですが……この者達が、その……［セカイイチ］を採ってくることに失敗しましてですね……」

ヒトってその気になればこんなに汗が流れるのか……と思えるくらい、アシュア一人だけ滝のように冷や汗をだらだらと流していた。その光景を見て、スバルもキロットも平然とした表情ではいられなくなる。しかし、

「あぁ、そういうこと？大丈夫。失敗なら誰にでもあるよ、気にしない、気にしない♪」

予想していた反応とはまるっきり逆の返答に、アシュアを始めとするこの部屋にいる者達は呆気にとられた。やがて、徐々に安堵の溜息がアシュアの口から漏れ出そうになると、

「……それで、［セカイイチ］はどこなの？」

その溜息は「え？」という疑問形に突然変異した。痛いほどの沈黙が辺りを包み込む。どうやらピコルは、スバル達の失敗が何を意味するのか理解できていないらしい。

「いえいえ！だから……採ってくるのを失敗したわけですから……その……［セカイイチ］の収穫は……ゼロ、ということに……」

ピコルの笑顔はそのままだが、何かが抜け出たのはスバルもキロットも傍から察することができた。アシュアは敢えてそれを見ず、

「当たって砕けろ」と言わんばかりに早口に続ける。

「ですので、親方様には当分［セカイイチ］を我慢してもらわなくてはならない。……そういうことになるわけですよ！あは……あはは……あはははははは！」

当たった結果盛大に砕け散ったのか、壊れたように笑いだすアシュア。それとは逆に、ピコルの顔から笑顔がだんだんと消えていく。真意は分からないが野生の勘というもので危険を察知したスバル達は、アシュアが笑っている間に逃げようと踵を返した、その時。

「……ぐすっ……」

アシュアにとって一番聞きたくないような声が聞こえた。即座に笑うのをやめたアシュアの顔が、瞬時に青ざめる。

ピコルの大きな目が潤んでいく。今にも泣きだしそうとキロットが思った瞬間、何故か下から突き出すような地響きが三人を襲った。

「わわわ！地震？」

「お前達、今すぐ耳を塞ぐんだ！」

「な、何でッスか？」

「いいから早くううううぅぅぅ！」

そう叫ぶアシュアも、今にも泣きだしそうな顔をしていた。地響きは収まることなく、むしろピコルが本格的に泣きはじめるにつれてその強さを増していく。ピコルの泣き声に混じって、アシュアの絶叫が木霊する――――――

「御免ください！［セカイイチ］、お届けに参りました！」

背後から聞こえてきた声が、ある意味お祭り騒ぎとなっていたこの部屋を一瞬にして沈めた。一同が呆然とする中、突然それらはスバル達を押しのけてどかどかと部屋に入ってきた。

「ど……『ドクローズ』！」

何かが入った袋を背中に乗せたジャグスを筆頭に、「ドクローズ」が入ってきたのだ。子分のコドワとティッドが両側から袋を持ち、ピコルの前に運んでいく。どさりと重い音がし、反動で袋の口が少し開けた。

そこに入っていたのは、大量の［セカイイチ］だった。

「どうぞ、本物の［セカイイチ］です」

「…僕にくれるの？やったぁ、ありがとう！」

早速ピコルはその中から一つを取り出し、頭に乗せてはしゃぎ始めた。先程までの泣き顔はどこへやら、またいつもの無邪気な笑顔に戻っている。しばらくアシュアは唖然としていたのだが、急に我に返ると、スバルとキロットを引っ張りよせて「ドクローズ」に駆け寄った。

「あ、ありがとうございます！貴方達が来てくれなければ今頃どうなっていたか……ほら、お前達もお辞儀する！」

「ち、ちょっと待て！首折れる！痛い痛い！」

無理な体勢で頭を押さえられ、スバルがバタバタと暴れだす。一方のキロットは声こそ出さなかったものの、上目づかいに「ドクローズ」を睨みつけた。

ようやく「ドクローズ」の真意がわかったような気がした。自分達を気絶させ、アシュアの誤解を招くよう［セカイイチ］の食べか

すで細工をし、そして「ドクローズ」がさも苦労して［セカイイチ］を取ってきたようにアピールする———スバル達に対するアシュアとピコルの信用を無くして遠征メンバーから外すよう仕向ける。すべてはこのためだったのだ。

「お礼は要りません。私達はこのギルドに身を置くことを許されている身なのです。このくらいの恩返しは当然のことでしょう」
「おおぉっ……何と心の優しい！貴方達と共に遠征に行けるとは光栄なことこの上ないです！」

「ドクローズ」のかりそめの態度に、アシュアはすっかり心酔しきっている様子である。もっとも、彼等の本当の顔を知っているのは今のところこのギルドの下っ端であるスバル達しかいないので、本当のことを言ったところで一蹴されて終わりだろう。

「では、我々はこれにて失礼します」
「ありがとうね～！ともだち、ともだち～♪」

ジャグスが踵を返す時に見せたドヤ顔を、スバル達は一生忘れはしないだろう。だが、スバル達にとっての地獄は、これだけでは終わらないのだ。

たとえば夕食。どうせ食べられないのなら自室で待機させてほしいのに、よほど食糧調達失敗の罪は大きいのか、食堂の一番奥で、先輩達や「ドクローズ」が美味しそうに夕食をガツガツ食べているのを黙って見なければならないという、この上ない苦痛を強いられる羽目になってしまったのだ。苛立つ元気も出ず、時折コドワやティッドがわざとこちらを向きながら［リンゴ］を口に入れているのを見ても、ただ腹が鳴るしかなかった。

いつもより長く感じる食事が終わり、やっと自室に戻れると足を引きずっていると、またしてもアシュアの呼び出しをかっくらった。

「お前達、遠征メンバーの候補は諦めた方がいいぞ。理由は……」

疲弊した身体に追い打ちをかけるようにアシュアはずらずらと理由を並べ始めた。言われなくても分かってると反抗する気力も残っていない。ひとしきり説教し終わってアシュアが行ってしまうと、キロットの身体が仰向けに倒れそうになった。

「お、おい！キロット！大丈夫か？」

「……大丈夫……たぶん……」

顔色が非常に悪い。スバルはともかく、キロットは朝からいろいろと神経をすり減らしていたのだ。こんな時になって、その代償がキロットに襲いかかってきたのだろう。

スバルはキロットを背負い、急いで自室に戻ろうとした。すると、

「スバル、スバル！」

小声で誰かが呼び掛けてくる。何だよと怒鳴りそうになったが、慌てて口を閉じた。

「ご…ゴゾ先輩？」

「早く、こっちへ来るでゲスよ！」

スバル達の部屋のドアから顔をのぞかせて、ゴゾが手招きしている。部屋の中に入ってみると、ピコルとアシュアを除いたギルドメンバーが待っていた。よく見ると、ジオーネの背後に何かが置いてある。

一番初めにキロットの容体の悪さに気付いたのは、メルだった。

「キロットさん！大丈夫ですか？」
「どう見たって大丈夫には見えないでしょ！早く何とかしないと……！」
「スバル、気持ちは分かるけど焦りは禁物ですわ。メルちゃん、お願い」

メルは頷くと、自分の身体を震えさせ、心地よい鈴の音を奏で始めた。ポケモンの状態以上を治す“いやしのすず”。キロットの場合は状態以上と若干異なる症状だが、それでもしばらくすると、キロットの顔色が少しだけ戻ってきた。

「あ、ありがとうございます、メル先輩」
「お礼を言うのはまだ早すぎですよ」

メルの言葉にスバル達がキョトンとしていると、ラドイルとジオーネが背後に置いてあったものを、それぞれ一つずつ手に持ってスバル達の前に置いた。それを見て、スバル達は驚かずにはいられなかった。
目の前にあったのは、［大きなリンゴ］だったからである。

「あ、あの、これって……」
「おなか、空いてますでしょ？」
「みんなで晩御飯をちょっとずつ残しといたんでゲスよ」
「さ、早く食べて食べてー！」

ジオーネに促される前に、スバル達は目の前に［大きなリンゴ］にかぶりついていた。大きさがスバル達の半分弱であることを除けば、何の変哲もないただの［リンゴ］なのだが、空腹の全盛期を迎えていた今のスバル達にとってはご馳走に近かった。先輩達が呆気にとられているのを尻目に、無心で頬張るスバルとキロット。五分

も経たないうちに、［大きなリンゴ］はスバル達の胃袋に収まってしまった。

「ぷはーっ！生き返ったぁ！」

「ありがとうございます。ボク達のために……」

「水くせえこと言うなって！困ったときはお互い様だからな！」

「あら、最後まで迷ってたヒトがよく言いますわね」

ラドイルとジオーネの間に一瞬、火花が散った。喧嘩に発展する前に、マミタがうまい具合で割って入る。

「でも、元気になってよかったです！これでまた遠征に向けて頑張れますよね！」

マミタ本人は元気づけるつもりで言ったのだろうが、逆に「スピリッツ」を落ち込ませる結果となってしまった。事情を知らないマミタは、ただ狼狽えるばかり。

「……遠征のことなんですけど、ボク達、選ばれないかもしれないんです。実は……」

沈んだ声ながら、キロットはこれまでの経緯をかいつまんで話した。「ドクローズ」の罠にはまり、大切な依頼を失敗してしまったこと、それが原因で、ピコルの信用を完全に失ってしまったこと――

案の定、それを聞いた先輩達は、

「ヘイヘイ！そいつぁ酷ぇ話だぜ！」

「失敗したとはいえ、遠征候補から外すなんてあんまりでゲス！……それだったら、あっしなんか失敗ばかりで絶望的でゲスよ」

このように思い思いの異論をぶつけていた。その中でジオーネやメルは、目を潤ませているキロットを慰めている。

「大丈夫です。少なくとも、私達はスバルとキロットの味方ですから。今から頑張れば遠征メンバーも夢ではありませんよ！」

優しく励まされても、キロットにはまだ気がかりなことがあった。遠征メンバーの枠は、決して大きなものではない。仮に自分達が選ばれても、相対的に誰かが落とされてしまうのだ。こんなにも自分達のことを思っているからこそ、選抜に向けて頑張るには大きすぎる躊躇いが生まれる。

そのことを話すと、思いの外先輩達は笑い飛ばした。

「気にする必要はないですわ！その時はその時！」

「今度は選ばれた者を応援すればいいのだからな！」

「みんな、『チーム・スピリッツ』と一緒に遠征に行きたいんでゲスよ」

先輩達の言葉、笑顔が、不安を徐々に取り除いてくれる。折れかけていた心が、また戻っていくのを感じる。もう一度頑張りたいという気持ちが、再び湧き上がってくる。キロットは涙を拭いた。

「ありがとうございます！もう一度、頑張ろうね！スバル……って、あれ？」

キロットが顔を向けた先に、スバルの顔が見えない。まさかと思って視線を落とすと、寝息を立てながら、スバルは仰向けになって眠りの世界に入っていた。……もしかして、食べ終わって早々、寝てしまっていたのだろうか？

「す、スバル……」
「すんげえ幸せそうな顔だな。食ってからすぐ寝ると太るぞ～？」
「大丈夫ですわ！誰かさんよか太りはしませんから」

小さな部屋からどっと湧き出る、小さくも盛大な笑い声。ドアが障害物としてあっても、聴力のいいピコルは彼等の話の一部始終を大広間でしっかりと聞いていた。

「やっと僕のギルドらしくなってきたね」

ご機嫌に鼻歌を歌いながら、ピコルは今夜も「盗み食い」のために食堂へ向かっていったのだった。

第十三話　波瀾――――挫折と激励（後書き）

前回同様、「ドクローズ」のちょっかいの部分をアレンジ。
そもそも原作でパートナーが言っていた「どうせまた何か企んでるんでしょ？」の「企み」が何なのか解釈出来なくて（殴
結局いつものアレンジ戦法に走ってしまったという。
バカな人間でスミマセン；

第十四話　再起――不思議な依頼人（前書き）

今回は久々のオリストです。
久々……と言っても、前回のはもはやオリストと呼んでいいのかさえ分からんほど酷過ぎだったような記憶が……

第十四話　再起――不思議な依頼人

「ポケモン発見！ポケモン発見！」
「誰の足形？誰の足形？」
「足形は……オクタン！足形はオクタン！」

ギルドの地下で、スバルとラドイルの声が幾重にも反響する。「ピコルのギルド」ではほぼ毎日と言っていいほど、このやり取りが繰り返されている。これは見張り番と言って、若干原始的ながらギルドのセキュリティーシステムの一つである。掲示板があるが故に多くの探検隊が出入りする中では、もちろん怪しい者が紛れ込んでいる可能性だって低くはない。そこで、ギルドではあらかじめ出入りする探検隊の名簿帳を作り、スバルが初めてギルドに入るときに飛び越えた格子付きの見張り穴で訪問者の足形を地下から検査し、名簿帳に載っているものと一致すれば入口の鉄格子が開いて入れるという仕組みになっている。ギルドに直接弟子入りしていない探検隊も、事前に申請して名簿に記載されなければ、ギルドに入ることすら許されないのである。

本来なら、足形の検査はギルドメンバー最年少であるマミタが担当するのだが、例のごとく彼の父親のシーザが掲示板更新の仕事をサボったらしく、代わりに行かなければならなくなったのだという。そこで、スバル達が代行人として現在見張り番の仕事をしているのだ。……しかし。

「ちょっと待てやー！オクタンとイーブイをどうやったら間違えるんだよ！しっかりしろ！」

やはり初心者ということもあって、こんなやり取りがしばしば行われていた。今スバル達がいる足形検査台の真下はギルド地下二階

の大広間につながっており、割と結構な距離があるのだが、それでも容赦なくラドイルの怒鳴り声が襲いかかってくる。キロットに呆れ顔で睨まれ、スバルはバツが悪そうに頭を掻いてはぐらかした。

「リンゴの森」の一件から、今日で太陽を見るのは六度目。完全に信用を失ったのか、アシュアからいつものように仕事内容を告げられることはほとんどなくなってしまった。しかし、だからこそこれから巻き返さなくてはならない。普通の依頼を受ける傍ら、先程のような見張り番を始め、できるだけ先輩の雑用を引き受けることにしたのだ。いくら日々の修行で実力をつけてきたとはいえ、スバル達はギルドの中でも一番下っ端の身。このくらいの仕事は引き受けて当たり前なのである。

検査台から差し込む光がだんだんとオレンジ色になる頃、ようやくスバル達の仕事が終わった。大人数のポケモン達が訪れた中で、スバル達の当てた者はちょうど半分くらい。ラドイルから怒りの“ハイパーボイス”をくらったのは言うまでもない。――ちなみに、正解したポケモンはすべてキロットが当てた者だった。

「そういや、お前達宛に手紙が届いてたぞ？」

夕食後、ラドイルから一通の手紙を手渡された。自室に戻って開けてみると、中には一枚の手紙が入っていた。幾つもの足形文字が、きれいな列を作って並んでいる。

その手紙には、こんなことが書かれてあった。

拝啓、「チーム・スピリッツ」様

貴方方のご活躍はかねがね聞き及んでおります。先日、「滝壺の洞窟」の探検を成功させたことを風の便りで聞きまして、その力を見込んでお願いがあります。内容をこの紙で語るにはいささか長い話になりますので、直接会ってお話ししたく存じます。明日の昼頃、「滝壺の洞窟」手前でお待ちしております。

敬具

「……何だこりゃ？ラブレター受け取るにはオレたちゃまだまだ幼すぎるぜ？」

「どう見てもラブレターには見えないでしょ！（……あれ、見えなくもない…？）え、えーっと、差出人は……」

キロットが封筒の裏を覗き込む。その右下には小さな文字で「匿名希望」と書かれてあった。自分の正体を知られたくないのだろう。ますます怪しい。

「……どうするの？スバル」

「どうするって……まぁ、明日もどうせやることはいつもと同じだし、一日くらい別件で外出てみるのもいいんじゃないか？襲われたら殴り返せばいいんだし」

何を根拠にそんな自信が出てくるんだと、キロットは心の中でツッコんだ。「滝壺の洞窟」……一度探検したことがあるとはいえ、正体不明の依頼人が関わってくるとなると、何かが起こることは目に見えている。どうか平穏に明日の一日が終わってほしいものである。

翌日。

どうせアシュアが話を聞いてくれないのなら、わざわざ今日の件を伝える必要はないだろう。朝礼が終わって早々、スバル達は冒険の準備のため「トレジャータウン」へ向かった。相変わらず多くのポケモンで賑わう中、ヤルキモノがチラシをばら撒いている。今までワケあって休業していた「エレキブル連結店」という施設がリニューアルオープンしたらしい。

「連結っていうのは、二つの技を合体させて繰り出す技のことだよ。ちょっとテクニックは必要だけど、使いこなすとなかなか強力なんだ」

連結とは何たるかと聞くと、キロットがこう答えてくれた。チラシの右下には、リニューアル記念ということで［連結箱］というのを無料で配布しているらしい。無料ならもらっても損はないかと、スバル達は早速一個もらうことにした。

プラスチック製の箱で、中に様々な機械が入っているようだが、使い方がさっぱりわからない。キロットも首をかしげているし、そもそもスバルは連結技に興味はないのか、そのままバッグにしまっておいた。もうすぐ太陽が中天まで達する。急がないと依頼人との約束の時間に間に合わない。

流石につい最近探検したおかげで、道はほとんど覚えている。ヒトに道を聞くというタイムロスがなくなったので、始めてきた時よりだいぶ早く着いた。相変わらず滝が勢いよく音をとどろかせている。その裏に洞窟があるということは、今となってはほとんどの探検家に知られていた。奥底に眠る宝石欲しさに潜入する者もいたが、スバル達がそうなったように激流の被害に遭うことが度々あったという。

その滝に続く架け橋の名残のような断崖絶壁。その数メートル手前に誰かが立っていた。巨大な巻貝を頭にかぶり、首には紅白の襟飾り。おうじゃポケモンのヤドキングである。走ってきたスバル達の荒い息遣いに気付いたのか、こちらから話しかける前にそのヤドキングはこちらに顔を向けた。

「やぁ、やぁ。君達が『チーム・スピリッツ』かね？」

「は、はい。そうです……えっと、あなたがこの手紙の差出人ですか？」

キロットから渡された手紙を開け、ヤドキングはその中身をしげしげと見た。やがて、手紙をたたみ、一つ頷く。

「いかにも。わしがこの手紙の差出人、バルゴじゃ。君達の名は？」

スバルとキロットはそれぞれ名乗り、早速、バルゴの依頼内容を問うてみた。が、すぐ答えるかと思いきや、何故かバルゴは顎に手を当て、あからさまに考えるようなしぐさをし始めたのだ。

「……バルゴさん？」

「おぉ、そうじゃ！思い出したぞ！君達への頼みというのはだな、ちょいとこの滝の裏にある洞窟の奥底まで同行してほしいのじゃよ。最近凶暴化したポケモンが増えたと聞いて、何かと物騒なものでのぉ……」

依頼の内容以前に、本当に思い出したような行動をとったことがスバル達を余計不安にさせた。仕草が大げさなあたり、何か企んでいるようにも見えるし、例えそうでなくとも、このヒト、脳内年齢も実年齢に比例してしまっているのかもしれない。

とはいえ、ここで断ってしまったら無条件でただでは済まないだろう。

「……あー、分かりました。じゃあ、まずあの滝に飛び込まないと……」

「おぉ！引き受けてくれるのか？さすが期待の新星。頼もしいのぉ」

身体を仰け反らせて豪快に笑うバルゴ。性格が陽気だということ

は分かったものの、スバルとキロットの不安はいまだに消える気配がない。このポケモンは、「チーム・スピリッツ」のことをどこまで知っているのだろうか。

「そうと決まれば、さっさと突入じゃ。君達、わしの頭につかまっていてくれないかね？」

スバルとキロットは顔を見合わせ、言われたとおりにした。巨大な巻貝から伸びた二本の角にそれぞれつかまったことを確認すると、バルゴは滝に向かってゆっくりと歩き出した。ゆったりとしたテンポながら、次第に滝に近づくにつれて、小雨並の水飛沫がバケツでぶっかけられたように激しくなってくる。

「さて、ここら辺で飛び込むとするか」

そう言って立ち止まった場所は、なんと絶壁の先端。スバル達が飛び込む時でさえ十メートルくらい離れてから飛び込んだというのに、これでは助走する余裕もない。まさか、そのまま滝に飛び込むつもりなのだろうか。

案の定、バルゴは何の躊躇いもなくひとっ跳びで滝に突っ込んだ。不安が絶頂に達したキロットがバルゴに問いかけようとした途端、その言葉は絶叫に変換される。目前に迫る水のカーテンが顔をすり抜け、驚くほど平然とした様子でバルゴは両足で着陸した。その反動がスバル達の身体に伝わり、危うく舌をかみそうになる。

「ちょっとハラハラさせてしまったかの。君達、大丈夫かね？」

「……ハラハラどころの問題じゃねぇよ……」

敬語を忘れているが、スバルは喋れる余裕があるからまだマシな方。キロットは目の奥の瞳孔があらぬ方向を向いていた。気絶一歩

手前、と言ったところだろう。彼等がそんな状態であるにもかかわらず、相変わらずバルゴはニコニコしている。何か企んでいてもいなくても、スバルはこの面を一発殴りたくなった。しかし、老人はいたわるべきもの。彼にだってそれくらいの良識はある。

時間を長く過ごせば過ごすほど、このポケモンに対する疑心はますます深まっていった。

第十四話　再起――――不思議な依頼人（後書き）

さて、今回登場したバルゴを見て「どっかで見たなぁ」と思ったそこの貴方、鋭い！
ですが例のごとく感想欄では言及禁止ということｄ（しつこい

第十五話　習得――初一念の大切さ（前書き）

オリスト＋スランプ＋約二週間のブランク＝過去最高の出来の悪さ

文系のくせに何変な数式立ててんだ橘　紀。

そして今回後書きにてご意見募集しています。よろしければご協力くださいませ。

第十五話　習得――初一念の大切さ

ようやく気分も落ち着いてきたところで、スバル達は洞窟の奥へ進み始めた。

今回二度目となる「滝壺の洞窟」の探検。「時の乱れ」の影響を受けてか、ここも「不思議のダンジョン」の一つとなっており、内部構造ががらりと変わっているため以前の探検で覚えていた道順は正直アテにならなかった。時々襲い来る敵を倒しながら、まるで初めての探検のように地道に進まなければならない。

それだけなら慣れているので苦労はしないのだが、スバルとキロットにとって一番気になるのは、先程から一向にバルゴが戦いに加勢してくれないことである。敵が一人出てきただけでもスバル達の後ろに隠れるし、大群で出てくると一切技も出さずに逃げ回るばかり。その件についてスバルが問いただすと、

「なんじゃ、老人に無理をさせようというのかね？」

――このように一蹴されてしまった。

石を積み上げるようにしてつくられた自然の階段を登った先に、あの赤い宝石がある空間があった。心なしか、周りの壁や天井にあんなにあった宝石が、少なくなっているように思える。おそらく、スバル達の後に訪れた探検家や盗賊が奪っていったのだろう。もっとも、その末路は欲に駆らんで奥の赤い宝石を操作し、激流に流されてしまうと決まっているのだが。

「やぁ、ここまで連れてきてくれてありがとうな。やはり君達に頼んで正解だったよ」

「……はぁ。それで、こんなところに用って何なんですか？」

「ふむ。まぁ見ていればわかるぞ」

またニッコリと笑い、バルゴは前へゆっくりと進み出た。その目線の先には、明らかにあの赤い宝石が映っている。あの宝石がどんなものなのか知っているかは定かではないが、どちらにせよあのまま行かせたら危険だ。スバルが急いで呼び止めようとする――――が、

「……むっ……いかん！」

不意にバルゴは踵を返すと、スバルに向かって“たいあたり”を繰り出した。巨体と正面衝突し、勢いよく地面を転がるスバル。何すんだよと苛立ち混じりで怒鳴ろうとしたが、次の瞬間、さっきまでバルゴがいた場所に鋭く尖った巨大な岩が突き刺さったのだ。

「ば、バルゴさん！」

「わしは大丈夫じゃ。しかし……」

バルゴはそう呟きながら、睨むように天井を仰いだ。程なく、あまりの高さに黒く染まった天井から、巨大な物体が落下し大地を揺るがす。

「おうおう！こんな宝の山に先客かぁ？運が悪いもんだぜ！」

荒ぶる声を発したのは、ドリルポケモンのサイドン。さらに、スバル達の周りを取り囲むように、進化前のサイホーンの大群がこちらに睨みをきかせていた。目の前のサイドンの部下か何かだろう。

「な、何なんだよお前等は？」

「ま、しがない盗賊ってところだ。お前等こそ何もんだ？やっぱこの宝目当ての同業者か？」

「あ、アンタと一緒にしないでよ！ボク達は……」
「なんだっていいさ！ライバルは先にぶっ潰すってぇのが盗賊の掟よ！やれっ！」

サイドンが右手を挙げたのを合図に、サイホーンの大群がスバル達に向けて飛び掛かってきた。そのうちの一人が繰り出した“ブレイククロー”を際どいところでかわしたスバルは、やや不安定な姿勢ながら“バブルこうせん”を放つ。青い軌跡を残して放たれた泡はサイホーンに直撃し、近くにあった大きな潮溜まりに叩き落とした。

キロットは“こうそくいどう”で瞬発力を上げ、幾人ものサイホーンを撹乱させている。それでも動じなかった一人が地面を蹴ってキロットに“とっしん”してくるのに対し、キロットは“１０まんボルト”で迎え撃とうとしたのだが――――

「……！しまっ……」

気付いた時にはもう遅い。キロットの放った電撃はサイホーンの特性「ひらいしん」によって吸収されてしまった。サイホーンの強固な鎧が、キロットを壁にめり込ませる。

「キロット！」
「……イテテ…ぼ、ボクは……大丈夫、だよ！」

目の前で弾ける火花を払うかのように頭を振ると、キロットは壁から飛び出し、先程攻撃を仕掛けたサイホーンに“アイアンテール”を浴びせた。硬度が勝ったのか、サイホーンの鎧に大きなヒビが入る。

スバルもキロットも弱点を突く技を持っているので一人一人を倒すことには苦労しなかったが、対峙すべき相手は何もサイホーンだ

けではない。スバルがそちらに顔を向けたのと同時に、親玉であるサイドンが水面に小波を立てるほどの咆哮を上げた。ハッとする間もなく、サイドンの周りに鋭く尖った大岩が浮かび上がり、それらが隕石のようにスバル達に降りかかってきた。先程バルゴへの奇襲にも使った“ストーンエッジ”だ。

“ストーンエッジ”は高威力だが命中精度は低いため、かわすのはどちらかというと容易な方である。しかし、かわしている間にサイホーンが襲いかかってくるので、余計気を抜くことができなくなった。

敵味方問わず降りかかる尖った岩。無論それはサイホーン達にも度々直撃したが、硬い鎧のおかげであまりダメージは受けていない様子である。それよりも気にかかるのは、バルゴだ。雨のような尖石の来襲に、はたして彼は無事でいるのだろうか？サイホーンの一人をねじ伏せたスバルは、横目でちらりとバルゴを見る。

「やぁ、わしはこの通り無事じゃから気にせんでいいぞ～♪」

バルゴの目の前に半透明の壁――――“リフレクター”がそびえ立っており、“ストーンエッジ”をいとも簡単に弾き返している。それだけなら（百歩くらい譲って）まだいいが、何故か先程からスバル達が特典でもらった［連結箱］をいじくり回している。その光景を見て、さすがにスバルの堪忍袋の緒が切れた。

「ジジィてめぇ！ヒトが折角必死で戦ってんのに何余裕ぶっこいて……うおわっと！」

スバルの眼前を岩がかすめる。その拍子に足を滑らせ、スバルはしりもちをついてしまった。それを見て、しめたと言わんばかりにサイホーンが鋭い角を向けて突進してくる。

避けられない――――そう悟り、スバルは固く目をつぶった。

しかし突然、重力に逆らって体がふわりと浮かぶのを感じた。真下をサイホーンが通り過ぎたと思った直後、きれいなアーチを描いて宙を舞うスバルを、バルゴが片手でキャッチした。

「ば、バルゴのジイさん……」

「ほっほっほ。ジジィでもやるときゃやるんじゃよ」

笑いながらそう言うと、さっきまでいじっていた［連結箱］の蓋を開けて何かを取り出し、それをスバルに手渡した。真ん中に小さな穴の開いたドーナツ状の薄い円盤で、表面がわずかな光を受けて乱反射している。

「それを頭につけて、しばらく待つのじゃ」

「……はぁ……こうッスか？」

乱反射している面を、額につけてみる。すると、その円盤が急に小刻みに震えはじめ、一瞬目を射るほどの目映い光を放った。震えが収まってから取り外して見ると、乱反射していた表面は輝きを失い、黒ずんでしまっていた。

「あの、ジイさん……」

「あとは早く“バブルこうせん”を放つのじゃ！来るぞ！」

円盤の放った光が目立ち過ぎたのか、ここにいるすべてのサイホーン達がスバルに向かって猛突進してきた。追い打ちをかけるように、サイドンも高台から“ストーンエッジ”を放つ。スバルは慌てて前に出、何も考えずに言われた通り“バブルこうせん”を繰り出した。

瞬間――――自身でも信じられないことが起こった。

特別な動作もしていない、いつも通りのやり方で放ったはずなのに、スバルの口から飛び出した光線は尋常ではないほどに幅広だったのだ。よく見ると“バブルこうせん”の周りに、微細な泡が幾重にも重なって纏わりついている。巨大な“バブルこうせん”にサイホーンやサイドンはもちろん、別の場所で戦っていたキロットもそれに巻き込まれかけたが、バルゴが先程のスバルと同じように“サイコキネシス”でこちらに引き寄せて事なきを得た。

泡の大洪水は壁にぶつかった途端、呆気なく消え失せてしまった。

あとに残ったのは、気絶して倒れているサイドンとサイホーンの群れ。スバルとキロットは、しばしこの光景をあんぐりと口を開けて傍観していた。

「す、スバル……前……」

空気の抜けたような声で、キロットが前方を指差す。今の今まで存在を忘れていたが、そこには例の赤い宝石。それが奥に向かって傾いていることを悟った瞬間、サイドンが起こしたものとはまた違う地響きがした。

「マズい、逃げるぞ！」

一目散に入り口に向かって駆け出すスバル達の首根っこを、バルゴがつかんで持ち上げた。これから何が起こるのかを知ってか知らずか、バルゴはニコニコしながら平然とつっ立っている。

「な、何すんだよジイさん！早く逃げないと……！」

「分かっておるよ。しかし、こういう時こそ落ち着くのじゃ」

「いや、そういう意味じゃ……」

キロットの言葉が終わらないうちに、あの大量の水が覆い被さり、視界が一気に暗くなった。

――――誰かの呼ぶ声がする。瞼は未だに重くて開けられないけれど、視覚以外の感覚はすべて身体に戻ってきていた。さっきから、身体の後ろ半分が妙に温かい。あまりにも心地よくて、もう一度眠ってしまいたいほどの……

「おーい、いつまで寝とるんじゃ～？気持ちいいとはいえ湯の中で寝たらのぼせるぞ～？」

「――――――はっ？」

間延びした声がはっきりと耳に届いた瞬間、あれだけ重かった瞼がいとも簡単に持ちあがった。最初に目に映ったのは、バルゴのニコニコ顔。失礼だとは分かっているが、反射的にスバルは驚きの声を上げてしまった。

「ほっほ！叫べるほど元気なら一安心だわい」

「す、すんません……」

「構わんよ。ほれ、キロット君もお目覚めじゃ」

バルゴに倣って目をやると、キロットが仰向けになって浮かんでいた。その瞼が震え、目に光がさした途端、どうしたことかいきなりキロットは溺れ始めた。

「お、おいキロット！大丈夫か？」

「ぷはっ！ゴホッ、ゴホッ！……す、スバル……？」

「まぁ、ここの温泉はちぃと底が深いからな。君達だと浮かぶだけで苦労するじゃろう。淵の方は浅いから、そっちでくつろぐといい」

「お、温泉？」

淵の方まで泳ぎながら、スバルとキロットは同時に声を上げた。確かに、周りは木で囲まれているが、大きさの違うごつごつした岩で縁取られた湯の池。それはまさに、温泉と呼ぶにふさわしいものだった。

「そう、温泉じゃ。ここの温泉は肩こりに効くことで昔から評判なのじゃよ。いつもなら近所のポケモンも来るのじゃが、今日はありがたいことに貸し切りじゃな。君達、地図とかはもっていないかね？」

［不思議な地図］を広げると、バルゴは「トレジャータウン」から南東へ行った先の一点を指差した。確かにそこには、小さいながら温泉のような絵が描かれてある。「滝壺の洞窟」を出発点に温泉まで辿っていくと、その距離の長さに度肝を抜かれた。

「滝壺の洞窟」奥底の仕掛けはもともと、この温泉の給湯のために使われていたそうだ。仕掛けを作動して流れ込んできた水の流動ルートは実は二種類あり、初めての探検でスバル達が流されたルートは、滝の近くを流れる「静かな川」につながっていたらしい。そして、今回バルゴが使ったルートで流されていくと、地下のマグマで水が温められ、温泉にある小さな火山の形をした岩から、ちょうどいい湯加減で噴き出すのだという。バルゴ曰く、「トレジャータウン」から直接温泉へ行くよりも、この仕掛けを使ったルートで行く方が少し近道になるのだとか。

「普段は一人でも行けたんじゃが、最初に言ったとおり、『時の乱れ』の影響を受けたポケモン達が増えてきていてな。危険じゃから、君達に護衛を頼んだんじゃよ」

「そう、だったんですか……」

キロットが真剣に聞いている隣で、スバルは顔を火照らせて体の芯まで温まっていた。余程ご機嫌なのか、口から度々シャボン玉を吐いている。その一つがキロットの目の前を通り過ぎた時、キロットは思い出したように声を上げた。あまりにも急でスバルが縮み上がり、危うく溺れそうになる。

「そういえばバルゴさん、あの時スバルが出した“バブルこうせん”って、ひょっとして……」

「そう、“あわ”と“バブルこうせん”の連結技じゃ。その名も“バブルマグナム”！」

「“バブル……マグナム”……」

スバルはしばらく、自身が出した泡を眺めながら考え込んでいた。

今まで繰り出していた“バブルこうせん”は、遠距離攻撃が可能だったので主力技として重宝していた技だが、範囲が狭すぎるため、敵を一人ずつしか倒せないというデメリットもあった。しかし、“あわ”が連結されたおかげで効果範囲が広がり、先程のように大勢の敵を一掃する程の大技となったのだ。

正直スバルとしては、強くなって覚えた技で戦いたいと思っていたので、連結技のようにヒトの手を加えた技はあまり好むものではなかった。しかし、我武者羅になって鍛え上げた強さにも限りがある。戦術や効率の良さも考えて鍛えるのも、強くなる手段の一つなのだ。

初心に戻ると、本当にいろいろなことが学べる。そしてその学びも、いつかは力となってその身に宿る。

「おぉ、そうじゃ！忘れるところじゃった」

辺りに漂っていた静寂の中で、バルゴが両手をポンとたたく。

「君達に、もう一つ頼みがあるんじゃ。十分にくつろいでからでいいから、わしを『ピコルのギルド』に連れて行ってもらえんかのぉ？」

第十五話　習得――初一念の大切さ（後書き）

……さて、ご意見募集というのは。
今回スバルが習得した”バブルマグナム”。名前はれっきとしたオリジナルです。
ただ、連結素材が”あわ”と”バブルこうせん”という既存の技なので、はたしてこの技はオリジナル技と呼べるのかと紀の中で議論になっておりまして。
一応この小説を読んでくれているリア友にも聞いてみたのですが、小一時間のディベートもどきにまで発展してしまったという。マジです。そこまでするか普通……

そして、結局決まらずじまいになってしまったということで、感想欄にて皆さんのご意見をお聞きしたいと思います。
オリ技にすべきかそうでないかの二択で結構です。もし前者が多かった場合は、新たに「オリ技あり」的なタグを入れる予定です。

そんなに切実というわけでもないですしもちろん強制ではないのですが、ご協力の方、よろしくお願いしますm（__）m

第十六話　選抜――遠征メンバー発表（前書き）

前回の感想欄にて意見をくださった皆様、ありがとうございます！
さっそく「オリ技あり」タグを追加しました！

そしてどうでもいいけどバルゴについて面識なかった方のためにヒントのような答えをば。

この話の４話ほど前に彼がちょこっと出演していました。中盤あたりです。

まぁ今回の話で彼の正体は明らかになりますけどね！（
それでは第一章のラスト、どーぞ！

第十六話　選抜――遠征メンバー発表

毎日の修行で疲労した身体を癒し、スバル達はバルゴとともに「ピコルのギルド」に戻った。空はすでに茜色に染まり、目の前で沈みゆく太陽が眩しい。ギルドの地下一階に着くと、バルゴはキロットに、ピコルとアシュアを呼んでくるように頼んだ。どうやらあの二人に用があるらしい。彼等がいる地下二階は主にギルドに所属する者達の生活場所なので、一般のポケモンが立ち入ることは許されていないのだ。

「バルゴのジイさん、親方やアシュア先輩と知りあいだったりするんスか？」

ふと気になったことを、スバルはバルゴに聞いてみた。

「ふむぅ……知りあい、とはまた違うがのぉ……まぁ、彼等が来れば分かるよ」

「……はぁ」

空気の抜けた返事をすると、何やら下からドタドタと騒がしい音が聞こえてきた。次の瞬間、アシュアが砲台か何かでブッ飛ばされたように地下二階へ続く穴から飛び出し、

「ば、バルゴ総長ぉっ？どうしてこんな所に……！」

混乱してもいないのに、彼の特性「ちどりあし」のように蛇行染みた走りをしながらこちらに向かってきた。その間にピコルが梯子をあがり、遅れてキロットも穴から顔をのぞかせる。

「やぁっ、バルゴ総長！久しぶり！」
「ほっほっほっ、ピコル君もアシュア君も相変わらずじゃのぉ」

親しげに挨拶をかわすピコルとバルゴ。この親しげな挨拶はピコルだからこそなせる業なのだろうが、先程のアシュアの恭しさから判断すると、確かにバルゴの言った通り、普通の知り合いではないようだ。試しにスバルが聞いてみる。

「あの、親方。このバルゴのジイさんとどういう関係で……」
「だーっ！お、おま、お前ぇっ！バルゴ総長になんて失礼な……！」

スバルはピコルに聞いたつもりなのに、いきなりアシュアがスバルの口を翼で塞ぎ、いつぞやのキロットのようにバルゴに向かって狂ったように謝った。

「アシュア君、構わんよ。彼らにはまだ、わしのことを名前ぐらいしか教えてないからな」
「……そ、そうなんですか……」

右手を振ってアシュアを制し、バルゴはかしこまったように背筋を伸ばした。

「ではスバル君、キロット君、改めて自己紹介をしよう。わしの名はバルゴ。『アナザー』全ての探検隊を統括する『ポケモン探検隊連盟』の事務総長じゃ。みんなからは総長と呼ばれているがの」

事務……総長……？
日常生活ではあまり聞かない言葉だが、何となく意味は理解できた。が、念のためキロットがアシュアに問う。

「……あの、アシュア先輩。『事務総長』ってひょっとして……」
「いーっちばん偉い人だよ！『ポケモン探検隊連盟』の！」
「えええええええっ！」

スバルとキロットの驚きの声が綺麗にハモった。驚かずにはいられないだろう。探検に同行した一風変わった老人が、自分達探検隊の中のトップに君臨する存在だったのだから。

バルゴが説明したとおり、「ポケモン探検隊連盟」とは、「アナザー」全土の探検隊をまとめる巨大な組織体だ。「アナザー」の情勢の調査、ギルドとの連携による経済的なやり取りの他、探検隊の必需品である装備品を始めとした道具なども製造している。

これで、バルゴが匿名希望でスバル達に手紙を出した理由が理解できた。事務総長という身分上、自分の勝手な都合で外出することは許されていない。だから正体をばらさないよう、名前を伏せてスバル達に探検の同行を依頼したのだ。新米のスバル達が連盟のことをあまり知っていないことまで考えていたとは、なかなか侮れない。

「……スバル、散々バルゴ総長のことを『ジイさん』とか『ジジイ』とか言ってたよね…？」
「げっ！……そ、それは……」
「ほっほっほ、構わんと言ったじゃろ？若いうちは目上の人にもの言えるほど元気なのが一番じゃ。君達のバイタリティ、新米とは思えないほどの見事な戦いぶりも、しかと見させてもらったぞ。そして、わしの頼みを引き受けてありがとう、『チーム・スピリッツ』」

バルゴに礼を言われ、スバルは大きくガッツポーズをとった。キロットもこれ以上はないというほどに手放しで喜んでいる。今まで依頼を成功させて感謝の言葉を多く頂いてきたが、今回ほど心の底から喜べるお礼はなかった。

「……お、お前等！喜ぶのはいいが早く食堂に行け！みんな腹空かせて待ってるんだぞ？」

目の前に偉大なヒトが立っているからか、アシュアが不自然に慌てふためきながらスバル達の背中を押して食堂へ向かわせる。そんな彼等を見送ってから、ようやくピコルが話し出した。

「ところでバルゴ総長、今日はもう帰っちゃうの？」

「ふむ……まぁ、今日一日は秘書も誤魔化しに頑張ってくれそうだし、もう少しここにいてもいいかの？君といろいろ話したいことがあるんじゃ」

まるでその質問を待っていたかのように、ピコルは笑顔になった。

「もちろん！僕も、総長と話したいことがたくさんあるからね」

毎晩恒例の慌ただしい夕食が終わり、皆が満足感に浸っていると、アシュアが口を切った。

「え～、諸君、注目！重要な話がある！」

満足感を通り越してもう半寝状態の者もいる中、皆がアシュアの方に顔を向けた。すでにうつらうつらと舟を漕ぎだしているスバルを、キロットが肘で小突いて起こす。

「今さっき、親方様が遠征メンバーを決定されたそうだ。ということで明日、お待ちかねの遠征メンバーの発表をするぞ♪」

おぉっ、という声を皮切りに、眠そうにしていた先輩も含めて皆が騒ぎ始めた。まだ発表もされていないのに、フライングで喜んでいる者もいる。キロットの心に、期待感と緊張感が顔を出した。

「ついに、明日なんだね……！緊張するなぁ。ね、スバル？」

「……くか～……」

ついさっき起こしたばかりなのに、本格的にスバルは鼾をかいて眠りこけていた。キロットは漫画のような青い縦線を何本も額に浮かべ、とりあえずスバルの肩を揺さぶる。

「……ふぇ？キロット、アシュア先輩何て言ってたんだ？」

「……あとで話すよ」

まだ心のざわめきが収まらないまま、ギルドメンバー達は自室で就寝の準備を始めた。メンバー発表は明日の朝礼。それが終わったら、いよいよ遠征に出発だ。

スバル達は布団に入り、後は寝るだけなのだが、当然のごとく寝ることができなかった。食堂でうとうとしていたスバルも、キロットから話を聞いて、すっかり心の中も起床してしまっている。

アシュアにメンバー選抜は諦めろといわれても、スバル達はできる限りのことをした。初心に返り、様々なことを学ぶことができた。その頑張りの評価は、親方のピコル次第。何を考えているか分からない彼のことだから、ひょっとしたら希望はあるのかもしれないし、はたまた絶望的かもしれない。

「スバル、起きてる？」

真っ暗になった部屋の中、キロットが話しかけてきた。今日はほぼ新月に近い三日月。わずかな月明かりが窓を通じて部屋に差し込むが、お互いの顔を照らすまでには至らない。

「起きてるよ。寝なきゃいけねぇんだろーけど」

「そうだよね……」

キロットの言葉に、妙に大きなため息が混じる。

「でも、あれからボク達は精一杯頑張ったんだ。選ばれたらそりゃ嬉しいけど、例え落ちても悔いはないよ。シーザ先輩が言ったように、選ばれたヒトを応援すればいいんだからね」

スバルは何も答えなかった。悔いはない。その言葉がキロットの声のまま頭の中に残る。例え口ではそう言っていても、落選したらキロットは間違いなく落ち込むだろう。できたら、彼を遠征に連れて行ってあげたい。チームを組んでいるわけだからスバルが落ちてキロットが受かる、なんてことはまずないと思うが、最悪その状況でもいい。……あぁでも、もしそうなってしまったら、キロットのことだからスバルと一緒に行きたいと言い張ってくるだろう。確実に。

「キロット」

「なぁに？」

スバルは一呼吸おいて、これだけ言っておいた。

「明日、選ばれるといいな」

「……そうだね」

明日のために、彼等は眠りについた。わずかな希望を、胸に抱いて。

翌朝。

いよいよ遠征メンバーの発表ということで、いつもなら騒がしいはずの大広間が、不気味なほど静まり返っていた。前に立つアシュアの翼には、ピコルが書いた遠征メンバーのメモが握られている。その紙に、自分の名前が書かれているかどうか。ギルドメンバーはほぼ全員顔をこわばらせていた。

「……こんなに静かだと発表しづらいな……」

「は、早くしてくれ……」

「あ、あっし……なんだか目の前にお花畑が見えるでゲス……」

緊張のあまり息を切らせる者が何人か、すでに危険な状態になっている者もいた。このままではさすがに酷なので、アシュアはわざとらしい咳払いを三度した。

「では、発表するぞ！まず、ラドイル♪」

一瞬だけの沈黙。その後、喜び百パーセントの大声と共にラドイルは大きくガッツポーズをした。

「まぁ、ワシが選ばれないわけがないがな！がはははは！」

満面の笑みを照らす、さわやかな油汗。絶対お前内心緊張してただろというツッコミは、場が場なので全員心の中ですることにした。

「次！ビジック♪」

「……！へ、ヘイヘーイ！ヘイヘイヘイヘイヘェ――イ！」

ビジックは高く飛び跳ねながら、多分本人しかわからない喜びの声を上げた。騒ぐ前の空白があったせいか、その喜びの中に安堵感があったような気がしないでもない。

「ハイハイ静かに！えーっと、次は……おぉっ！」

アシュアはメモを見るなり、目を丸くした。緊張の面持ちだった残りのメンバーが、少しだけキョトンとする。

「なんと……ゴゾ♪」

皆が一斉にゴゾの顔を見た。スバルとキロットが後輩にいるとはいえ、彼もまだまだキャリアは少ない。それなのに選ばれるとは、アシュアも驚くわけである。皆が祝福の拍手をするが、選ばれた本人のゴゾは凍ったように動かなくなってしまった。

「ん？どうした、ゴゾ？」

「…い、いや……あっし…嬉しすぎて……動けないんでゲスよ……」

目をうるうるさせているあたり、何ともゴゾらしい。キロットは苦笑しながら、そんなゴゾをほほえましく感じた。

「……仕方ない、ほうっておくか。えー、次行くぞ！ジオーネ♪そしてメル♪」

二人連続で選ばれたのは、数少ない女性陣。最初の野蛮な二名と違い、二人とも手を取って華やかに喜びを分かち合った。……余談だが、メルが選ばれたことで、ビジックは心の中でガッツポー

ズをしていた。

「えーっと、以上で遠征メンバーは……」

この言葉が聞こえたということは、メンバーの発表はここで終了ということである。

やっぱり、選ばれなかったか。気付かれないよう、スバルは横目でキロットを見た。思った通り、あからさまに項垂れはしなかったものの、目が潤んでいる。ギャラリーとして発表を聞いていた「ドクローズ」とも目が合いそうになったが、強いて目線の位置を戻した。どうせ、選ばれなかった自分達のことを笑っているに違いない。気にしたらそこで負けだ。――――――しかし、

「……ん、これは？……」

アシュアの声に、暗い表情だった者も、そうでない者も一斉に彼に注目した。だんだんと、アシュアの目が大きく見開かれる。

「……ち、ちょっと待て！まだメンバー発表の続きがある！」

えぇっ、という声と共に、大広間が少しざわつき始める。スバルとキロットは目線で互いの顔を見た。

「アシュア先輩……ひょっとして文字が読めないとか？」

「読めるわ！だいたいこんな紙の端っこにちっこく書かれてたら普通気付かないだろ！」

「え……僕の書いた字が読めない……？」

「！い、いえいえ！なんでもございません！えー、残りの遠征メンバーは、と……シーザ♪マミタ♪ボルリド♪……あ、ワタシの名前も書いてある……あと、キロット♪スバル♪」

読み終わってから、アシュアはあることに気が付いた。もう一度、メモに書かれている名前と、ここにいるメンバーを照らし合わせてみる。

「……あの、親方様」
「ん、なぁに？アシュア」
「まさかと思うのですが……ここにいる全員で遠征に行くのですか？」
「うん、そうだよ♪」

ピコル以外の全員、「ドクローズ」までもが驚きのあまり絶叫してしまった。スバルもキロットも、自分達が選ばれた喜びよりもそちらの感情が優先している。

「ちょっと待ってください！そんなことしたらこのギルド、もはや無人建築物同然になってしまうではないですかぁ！」
「大丈夫！ちゃんと戸締りしていくからさ♪」
「いや、そういう問題では……」
「……私にも異論があります。ピコル親方」

そう言ったのは、ジャグスだった。流石の彼も、少し顔に焦りの色がある。

「全員で行くのは少し危険ではないのですか？効率性のこともありますし……」
「……うーん、ともだちにそう言われるとなぁ……」

ピコルの心が揺らぎ始める。あくまでスバル達を候補から落とすつもりか。スバルは前に出て何か言おうとしたのだが、ジャグスの

追い討ちの方が一足早かった。

「だいたい、何故全員で行くのです？全員で行く意味なんてあるのですか？」

「え？意味ならあるよ。だって……全員で行った方が、楽しいでしょ？」

意表を突いた理由が、大広間の空気を時が止まったかのように沈めた。

「みんなでワイワイ行くんだよ？それ想像したら、僕もうワクワクして夜も眠れなかったよ！」

「ひえっ……」

口をあんぐりさせて呆気にとられている「ドクローズ」を尻目に、ピコルはとびっきりの笑顔のまま、大きく飛びながら方向転換し、皆の前に向き合った。

「アシュア、遠征メンバーのチーム分けをするから、あとで僕の部屋に来てね。さぁみんな、これから待ちに待った遠征だよ！前回の遠征以上に、とっておきの思い出になる素敵な遠征にしようね！」

「はいっ！」

ピコルらしい締め括りに、ギルドメンバーも笑顔で大きく返事をした。苦い顔でピコルを睨むジャグスがスバルの顔を見るその瞬間を狙って、スバルはこれでもかというドヤ顔でジャグスを見た。ジャグスは何も言わず舌打ちだけをし、コドワとティッドを率いて梯子を登っていく。ピコルに呼び出されたアシュアは、このギルドの一番弟子である自分の名前がよりによって端っこに小さく書かれていたことが腑に落ちないのか、釈然としない顔のままピコルの部屋

に入っていく。
残されたメンバーが、大広間の中心に集まった途端、
「うわあああぁぁぁぁん！」
糸が切れたようにキロットが泣き出した。ジオーネが慌てて、スバルが苦笑しながらキロットの傍に行く。
「おいおいキロット、泣くこたぁないだろ？」
「だ、だって……ボク、ホントに選ばれないと思ってたもん……」
泣きじゃくるキロットの肩をスバルが軽く叩き、背中をジオーネが優しく撫でる。
「でも、流石親方様ですね！このメンバー全員で遠征に行けるなんて！」
「ハハ……まったくだな」
「やっぱ全員で行く方が楽しいに決まってるだろ！」
「ヘイヘイ！」
「うぅ……もう嬉しさの極みでゲス……お花畑が見えるでゲス……！」
「ゴゾさん、生きて下さい」
「グヘヘヘヘヘ……！」
景気づけに、毎回遠征の前にメンバー全員でやるという、（腕がない者もいるので多少無理やり感が否めないが）円陣を組むギルドメンバー達。掛け声は、ここまで頑張ったご褒美ということで、全会一致でキロットがやることとなった。
「みんな……この遠征、絶対に成功させよう！」

「おぉ――――っ！」

こうして、「ピコルのギルド」の遠征が、ついに始まったのであった。

第十六話　選抜――遠征メンバー発表（後書き）

ようやっと第一章終了です。思ったよりかかったな……

語り部「一章終わるのに2ヶ月かかってるから……単純計算でも最終話まで一年は費やすね」

ふっ、甘いな……ストックが切れた今、それ以上かかるのはもはや確定事項なのさっ！

語り部「どや顔で言われた……」

まぁとにかく、ここまで読んでくださった皆さんには本当に感謝の気持ちで一杯です。第二章も引き続きお付き合いの方、よろしくお願いしますm（＿＿）m

それと貴方、

語り部「何だい？」

プロローグしか出番なかったからって後書きに不法侵入しないでね☆（レッドカード

語り部「えええ！？ち、ちょっとぉ！？」（強制退場

紹介――登場人物２（前書き）

第二章本文に入る前に「チーム・スピリッツ」のおさらいをば。ちなみに使用技ですが、これは「今までそのキャラが使用した技」であり、「そのキャラが今覚えている技」ではないということを、念のため記しておきます。

しかし「技の数は四個まで」っていう縛りは正直メンドーだと思うんですよねぇ。いっそのこと無視しようかｎ（蹴

紹介――登場人物２

スバル（ポッチャマ）
性別：男
年齢：不明（記憶を失っているため）
波動の色：優しい薄荷青色（ミントブルー）
使用技：“あわ”、“バブルこうせん”、“バブルマグナム”（“あわ”＋“バブルこうせん”の連結技）
本編の主人公。もとはニンゲンであったが、記憶を失い、ポケモンになってしまった。
口調がかなり乱暴で、性格は悪く言えば短気、百歩譲って良く言えばポジティブシンキング。ギルドの先輩に対して最低限の敬語が使える程度の丁寧さは持っているが、たいていは後先考えずそのままどこへでも突進していく。しかし、それなりにヒトとしての情はあり、落ち込むキロットを幾度となく慰める一面もある。
触れた物の視点から見た「過去」や「未来」を夢として見る能力を持つ。
大きなゴーグルのついた、紫色のヘルメットを頭にかぶっている。本人にとって大切な物らしいが、それに関する記憶さえも失ってしまっている。

キロット（ピカチュウ）
性別：男
年齢：十四歳
波動の色：パワフルな橙色（オレンジ）
使用技：“でんきショック”、“１０まんボルト”、“アイアンテール”、“こうそくいどう”、“フラッシュ”、“でんこうせっか”
探検隊「チーム・スピリッツ」の副リーダー。

スバルとは全く正反対の、自他ともに認める臆病な性格で、傍から見ても情けないと思うほど打たれ弱い。その分心優しい性格の持ち主で、しっかりしているところはしっかりしている。探検のことになると若干ヒトが変わるほど好奇心旺盛。

凄腕の探検家である父を目標としており、その父からもらった宝物［遺跡の欠片］の謎を解くことが夢。

第十七話　遠征――ビギナーズチーム（前書き）

第二章スタートです！
しっかしのっけからノーストックぶっつけ本番更新……いと幸先のあしきことかぎりなｓ（

第十七話　遠征――ビギナーズチーム

静かな水面に風が吹き付け、やがてそれは波を起こす。力強く、それでいて白く美しいレースのような波は、岸壁に正面からぶつかり、白い水しぶきとなって砕け散る。根元が何かで削られたような断崖絶壁が、そのサイクルが幾重にも繰り返されてきたことを物語っていた。

そんな一連の光景を、崖から身を乗り出してスバルは眺めていた。時折丁度良い強さで吹きつけてくる潮風を浴びながら。

「たっは～、海岸で見るのもいいけど、こうして海を見下ろすのもまた格別だな！」

「……そ、そうだね……」

気分高揚のスバルとは反対に、キロットはゴゾと寄り添ってガタガタと震えていた。

「ん、どうしたキロット？ここそんなに寒くねぇぜ？」

「いや、別に寒いっていうわけじゃなくてさ……」

「……た、高いところは嫌でゲスウウウゥゥゥ！」

ゴゾの絶叫に、ちょうど良いタイミングで波の轟音のバックコーラスが入った。

なぜスバル達はこんな断崖絶壁にいるのか。何故『チーム・スピリッツ』にゴゾが同行しているのか。話は、遠征メンバー発表の日までさかのぼる。

遠征メンバー発表後、選抜メンバー達（まぁ、要するにギルドメ

ンバー全員）は、「トレジャータウン」にて長旅の準備に明け暮れていた。スバル達もまた、前回遠征に行った先輩達から度々アドバイスをもらいながら、倉庫や商店などの施設を駆けて回っている。

「存分に楽しんでいらっしゃい！いい成果が出るといいわね」

スバル達が頼んだ道具を棚から取り出しながら、倉庫の管理人であるガルーラが激励してくれた。彼女だけではない。商店を経営するカクレオン兄弟や、キュオ、キア兄弟も、スバル達の遠征メンバー決定を心から祝福してくれた。それも、こちらが教える前からすでに知っていたようだ。さすが大勢のポケモンで賑わう街。情報の伝達は風よりも早いのである。

そして、大方の準備が終わると、スバル達ギルドメンバーは大広間に集まった。

「えー、それでは、今から遠征についての説明会を始める♪」

指揮を執るアシュアの後ろには、スバル達の持っている［不思議な地図］の五倍あるかと思うほどの巨大な地図が壁に貼られてあった。「アナザー大陸」の西、「ピコルのギルド」にあたる部分には赤いフラッグマーク、そして東南東、雲に覆われて何も見えない部分に、赤い丸印が付いている。

「以前、朝礼でも少し話したと思うが、今回の遠征の目的地はここ、『霧の湖』だ」

アシュアはどこからか細長い棒を取り出し、赤い丸印のところを指した。［不思議な地図］は普通の地図と違い、未開の地には何も

描かれず雲に覆われたような図になっており、探検隊がそこを開拓するにつれて雲が晴れ、初めて正式な図として記されるのだ。今回の目的地となった「霧の湖」もまた然り。前人未到の地であるため、こうして雲で覆われているのである。

「まぁその名の通り、霧に覆われた湖だな。現にその近くには、深い霧に包まれた『濃霧の森』がある。そして、これはあくまで噂だが……この『霧の湖』には、とんでもなく素晴らしいお宝が隠されていると言われている♪」

「財宝」という言葉を聞いて、ギルド内に大きなどよめきが起こる。声に出さずとも、皆胸を躍らせていた。スバル達も、ギルドの先輩達も、そして、「ドクローズ」も。

「だが、未開の地である以上、そこに辿り着くまでも十分慎重に、なおかつ効率よく計画を立てねばならん。というわけで、いきなり『霧の湖』に向かうのではなく、この『濃霧の森』の入り口にベースキャンプを設置し、具体的な作戦をそこで練ろうと思う」

さらに、そのベースキャンプに行くにも、一気に全員でそこへ向かうには危険すぎる。ましてやギルドメンバー全員で行くのだから、なおさらだ。そこで、メンバーをいくつかのグループに分け、それぞれ別のルートを使ってベースキャンプに向かうということになった。これなら、大勢で一本のルートで行って皆仲良く全滅、ということにもならない。

発表されたグループ分けのうち、スバル達はゴゾと組むことになった。名前が呼ばれ終わると、ゴゾはトコトコと歩み寄り、

「一緒のチームでゲスね。よろしくお願いしますでゲス」

笑顔で会釈してきた。全員遠征経験がないので不安もないというわけではないが、ポジティブに考えれば「ビギナーズラックに恵まれた（ように思える）」グループだ。
助っ人である「チーム・ドクローズ」はチーム単独で、親方のピコルはアシュアと組むこととなった。毎回の遠征でいつもこのコンビであることが不満なのか、

「えぇーっ、またアシュアと一緒？それじゃつまんなぁ～い！」

ピコルがいい年（？）こいて駄々をこね始めた。しかしそれも、アシュアによって軽くいなされてしまう。
その後はグループごとに分かれ、ベースキャンプに至るまでのルートを模索した。色々頭をひねった末、スバル達のグループは海沿いのルートを進むことに決めた。海に沿って進み、数ある「アナザー」の山の中でも指折りの高さを誇る「ツノ山」を超えて、ベースキャンプに辿り着く。内陸を進むより少し遠回りになるが、道に迷うことはほとんどない、初心者のスバル達にとっては最善のルートだ。

そして現在、スバル達は第一関門のダンジョン、「沿岸の岩場」の入り口にいるのである。
絶壁から海を臨むスリリングなアトラクションはこの辺にして、スバル達は［不思議な地図］を囲み、これからの計画を立て始めた。

「遠回りして行った分、ここに辿り着くまでずいぶん時間がかかっちゃいましたね。今頃先輩達は『ツノ山』にいたりするのかなぁ」
「遅くなるっていうことはみんなにも知らせてあるでゲスが、あんまり時間を食うとアシュア先輩の大目玉をくらいそうでゲスね」

まったくだ、という意味を込めて、三人は苦笑いを浮かべた。

「じゃあ、とりあえず目標は今日中にこの『沿岸の岩場』を突破する、ですね。『ツノ山』はものすごく高い山っていうから、一日で登りきるのは多分無理だと思う。なるべく先輩達を待たせないように早くいかないと」

「賛成でゲス！」

特に意見することもなかったので、スバルはキロットとゴゾのやり取りを眺めていた。

本人には内緒だが、この遠征の間はなるべく、キロットにリーダーシップを取らせるようにしているのだ。別にいつも通りスバルが指揮をとってもいいのだが、それだと今までの修業の成果――二人の成長を垣間見ることができない。だから、敢えて立場を逆にすることで、互いの実力を確認することにしたのだ。……ちなみにこれは、遠征に出発する直前、ピコル経由でバルゴからアドバイスしてもらったものである。

期待通り、いや、それ以上に、キロットは物事を的確に考え、驚くべきリーダーシップを取っていた。ギルドに入門する前はあんなに憶病で、弟子入りした後もスバルの手を散々焼いてくれたキロットが、心なしか別人のように思える。今までの修業、たくさんの経験が、キロットを少しずつ、確実に成長させているのだ。

「スバル、何ボーっとしてるの？」

「早く行くでゲスよ！」

考え事をしている間に、すでにキロット達は「沿岸の岩場」に入ろうとしていた。スバルもすぐさまその後を追う。

流石海に近い洞窟ということで、内部にはヒンヤリとした空気が漂い、天井、壁、地面もどことなく湿っている。ちょうどそれは、スバル達が初めて訪れたダンジョン――「海岸の洞窟」に似ていた。やはり襲ってくるポケモンも水タイプが多めで、そのほとんどはキロットの電撃、スバルの“バブルマグナム”によるごり押し攻撃で何とか乗り切ることができた。唯一の例外、「滝壺の洞窟」でもスバル達を手こずらせてくれたウパーと同じタイプ、さらに水技を引き寄せて無効化する「よびみず」という特性を持ったトリトドンは、ゴゾが“ころがる”や“いかりのまえば”で撃退する。

キロットが「風の音が聞こえる」と言ったのは、（あくまで体内時計だが）「沿岸の岩場」に潜入して三時間ほど経った頃だった。

「風の音……ってことは、もうすぐ出口が近いってことか？」

「たぶん、ね。だけど油断は禁物だよ。今までの経験からして、こういうときは出口の方に敵が大群で待ってると思うから」

「うぅ……その予想が間違っていることを祈るばかりでゲス……」

気弱そうにゴゾが呟く。本人も認める情けない発言だが、スバルとキロットも声には出さなかったものの同じ思いを抱いていた。暴れたくて仕方がないほど力が有り余っているならいい。だが自分達は、このダンジョンを抜け、さらに遠方へと足を運ばなければいけないのだ。これから先のことも考えて、なるだけ体力は温存していきたい。

しかし、キロットの予想は、微妙に違う形で当たってしまった。

「な、何だ？これ……」

小洞窟のような暗い通路を抜けた先に、道はなかった。しかしその崖の下は奈落ではなく、地面が円形に広がっている。ドーム状の

空間の壁にぽっかりと空いた穴から、スバル達が顔をのぞかせている、そんな状態だった。そして驚くべきは、その地面を隙間なく埋め尽くしていたポケモン――――トドグラーの群れ。
それは、時折波打つようにうごめく、水色の絨毯のようだった。しかもよく見ると、そこにいたのはトドグラーだけではなく、進化前のタマザラシもちらほらいた。恐らく親子だろう。つまり、トドグラー達にとって、今の時期は繁殖期にあたる。「沿岸の岩場」の中でも最も広いこの空間に集まり、子育てに専念しているのだ。
キロットの言うとおり大群ではあるが、決して敵ではない存在。彼等は子孫を残すためにここにいるだけなのだ。
しかし、だからこそこの状況をどうすればいいのか分からない。出口から僅かに光が差し込んで仄明るくなっている穴が、ここから降りて真っすぐ行った先にある以上、早く先に進みたいのはやまやまなのだが、繁殖期に入った生き物は自分の子供を守るために異端者には敏感に反応し、潰しにかかってくる。このままノコノコ下に降りて行ったら、間違いなくこの群れに袋叩きにされてしまうだろう。

「ど、どうしよ……スバル」
「オレに聞くなっての。……まぁあいつ等には悪いけど、こっから降りて奇襲して、道を開けるように蹴散らしながら出口まで突っ込むしかないようだな」
「なるべく子供の方には攻撃を当てないようにしたいでゲスね」

正直、それは無理難題ということを三人は理解していた。ところで――――と、ゴゾがずっと考えていたかのように口を切る。

「何か、さっきから変な音が聞こえる気がするでゲス」
「え、そうスか？」
「ボクにも聞こえるよ。風の音じゃない……何かが割れていくよう

な音――――――」

言葉で形容してやっと、その音の正体が理解できた。が、もう何もかもが遅い。気付いた頃には、今まで立っていた地面が崩れ、スバル達はトドグラーの群れの中に転落してしまった。水をたっぷりと含んだ地面は脆くなっており、スバル達の重さに耐えきれなかったのだろう。

「ヤバ……ッ！」

どうやらこのチーム、「ビギナーズラック」とは縁遠いようである。

第十七話　遠征――ビギナーズチーム（後書き）

描写不足乙ー（殴

ヘタしたら挿絵という名の最終手段を使うかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3566w/

ポケモン探検隊　スピリッツ　～光り輝く命～

2011年11月21日12時36分発行